



相死喪愛

— 闇の章 —

秋本 勇

第一話 狂い咲き

「ねえ、藤川先生。私が殺したんだと思う？」

杉沢茜のその挑戦的な瞳は、きっと私の狼狽する姿を滑稽なものとして映していたのだろう。しかし、かろうじて保っていた理性の糸をぴんと張り詰めたまま、私が一言、
「何も、心配することはない」
というと、彼女はその美しい強い瞳に涙をいっぱい溜めて笑った。

高校二年生である杉沢茜に惹かれ始めたのは最近のことではない。最初は、とても綺麗で強い瞳をした生徒だと思った。意志の強そうな、そうでいて女性らしい妖艶さをかもし出すその瞳に、私はなぜか惹かれていた。私自身が、五〇を目前に控えて独身であるということも影響していたのかもしれない。しかし、私にはその当時恋人である長谷川夕子がいたし、茜はまして自分が担任をしているクラスの女子生徒だ。ただ、元気よくはしゃぐのが仕事のような生徒の中で、その落ち着いた物腰と美しい容姿に、私は彼女を普通の女子生徒ではなく「女性」という視線で見つめていたのかもしれない。下手をしたら、教育実習生の教師の卵たちよりも、茜のほうがずっと落ち着いていたのだから。

恋人である夕子は、私がまだ三十代の頃に六年勤めていた高校の生徒だ。担任を受け持っていたこともあり、四年前に催された同窓会で再会した。もちろん、私の中では茜と同様受け持ちの生徒であることは変わらなかったが、再会したときお互いの携帯電話の番号とメールアドレスを交換したことから夕子の方からその後も頻繁に連絡してくるようになった。最初のうちは同じ同級生たちと一緒に飲みに行く場に誘われたり、ときどき会ったりしているうちに彼女のほうから告白された。卒業したとはいえ教師と生徒という関係に罪悪感を感じ、断っていたのだが彼女の気持ちは変わらず、一年という期間を経て恋人関係になった。すでに付き合い始めてから五年。そろそろ結婚を考えなくてはと思っているのだが、夕子の方は「焦らなくても私は大丈夫ですから」と妙にさばさばとしている。私よりもちょうど二十歳年下である夕子も三十は目の前である。おそらく、私がこの年まで独身でいることに何らかの信念があつてのことだろうと気を使ってくれているのだろうが別段そんなことはなく、ただ仕事にかまけて彼女に甘えてしまっているところも無きにしも非ずといったところだった。美容師をしている夕子とはなかなか会う時間がとれず、二年前からはそれを気にして私のマンションで一緒に住むことになった。私の両親はすでに他界しているので、夕子の両親に挨拶は済ませている。夕子の両親も娘のさっぱりとした結婚観を心配していないわけではないだろう。それが妙に、五十を目前にした私を焦らせていた。

「ホームルームはじめるぞ」

出席簿を持って教室に入ると、二年B組の生徒たちはすでに着席していた。最近気が付いたのだが、どうやら廊下を私が歩いていくと監視役の生徒がそれを見て着席の号令を出すらしい。何のためかはわからなかったが、それでも私が教室に入ると全員がきちんと着席しているのは助かる。ひどいクラスではホームルーム中でも生徒の立ち歩きやざわつきがやまないらしい。

「きり一つ」

日直のそれに続いて生徒たちが起立し、おはようございますと一礼する。私もそれに「おはよう」と返すと、日直が着席の号令を出す。いつもと変わらない朝の光景だ。

「今日は古文の先生が風邪で休みのため、テスト対策に向けた自習になる。監督は私が来るので、時間になったらすぐに自習を始めていること。自習内容は自由。四時限目までに自習の内容を自分たちで決めておくこと。それから、五時限目の体育は男子と女子で合同になるということだったので……」

朝の職員会議で出た内容の話をかいつまんで生徒たちに説明しながら、私の意識はふと茜の様子を気にしていた。自分の連絡用手帳に目を落としながら、窓際の一番後ろに座る茜の姿を思い浮かべる。いつものように頬杖をつきながら、やや退屈そうに私の後ろの黒板を見ているのだろうか。それとも、両手を机の上で組んでぼんやりと視線をさまよわせているのか。

「以上。あとは日直からの連絡」

日誌から顔を上げ、意識しないように教室全体を見回す。日直が日直日誌に目を落としながら立ち上がるのと、私と茜の視線がぶつかるのはほぼ同時だった。彼女は珍しく、私を見ていた。射抜くような鋭い視線が、私の戸惑う視線を一瞬で弾き飛ばす。

「えーと、今日の連絡は先生の言った自習の連絡と……」

日直が声を上げる前に、私は茜から視線を外していた。だが、私の鼓動はやや早く脈打っていた。なぜなら、さきほどの茜の視線には、うっすらと挑戦的な微笑が含まれていたからだった。

「藤川先生」

ホームルームを終えて職員室へ戻ると、副担任の松山恵美子が隣から話しかけてきた。四十代半ばの化粧の濃い教師で、生徒からはあまり評判が良くない。なんでも「松山先生は男子ばかり鼻屑して女子生徒には厳しい」らしい。そんなことが直接生徒から聞けるのは「藤川先生は顔は怖いけど、ちょっと優しいし絶対鼻屑したりしないもん」という評判かららしかった。たしかに私は強面なので、初対面だと生徒どころか職員も戸惑うことがあるらしい。

「あの、杉沢茜のことなんですけどね」

突然のその名前に、私は先ほどの茜の微笑と視線を思い出した。そして、また高まってきそうな鼓動をやっと抑えて、

「杉沢がどうかしましたか」

と化粧の匂いが濃い辺りを振り返ると、思ったよりも近い位置にいた松山は困ったのよ、といいながら右手を右頬に当て、眉を思い切り下げてため息をついた。

「さっき藤川先生がホームルームに行っているときに電話があつて。どうやら杉沢さんが深夜頻繁に出歩いているっていう連絡があつたの。ほら、先週末から春休み対策に各学校の担当の先生方が大通りを巡回しているでしょう？」

「ああ、そういえば」

長期の休み前になると、各学校の教師たちが何人かの班にまとまって、順番に近くの繁華街や大通りを巡回することになっている。休み前から行うのは、巡回経路の確認や巡回している担当教

師同士の連絡、学校との連絡、補導が必要になった場合の警察への対処などを細かく打ち合わせする予行練習も兼ねているためだ。長期の休みに入ると、また細かく分担が割り振られてほとんど毎日、深夜に担当の教師たちは巡回をしなくてはならない。班の割り振りは学校単位によって好きなように決められているが、私たちの学校では教頭が勝手に決めているようだった。もちろん、私もその班に割り振られていたが、私の班は春休みに入ってから担当だったのですっかり忘れていた。

「私服で大通りを歩いているのを何度か見かけられているらしいの。各生徒たちの顔写真は他の学校の先生方にも配布されているでしょう？それに、あの子は特に目立つ容姿をしてるから気が付いたんじゃないかしら」

「特に目立つ？」

松山の個人的な見解なのだろうが、私は少し引っかかりを覚えて思わず聞き返した。すると松山は嫌なものでもみるような目をして、

「あ、決して派手な格好をしていたとかそういうわけではないらしいですよ。でも、ねえ……ほら、わかるでしょう？先生も。なんとなく」

脳裏には、はしゃぐ女子生徒の中に混じる細身の茜の制服姿が浮かんでいた。目立つ。なるほど言われてみればそうなのかもしれない。なぜなら、私が妙に目をひかれているのだから。それなら、他の教師も同じような目で彼女を見ているのかもしれない。

そう思うと、なぜか心のどこかで何かがざわつくような感触を覚えた。

「でも、電話があったということはうちの先生が見かけたわけではないんでしょう？」

「ええ、まあ。ただ、似た生徒が出歩いているなんて連絡をもらってしまった以上、確認しないわけにはいかないでしょう？」

松山はそれにやや不満げだった。多分教頭から小言の一つか二つでも言われたのだろう。そして、本来なら藤川先生が受けるはずなのに、と心のどこかで思っているらしいことはその目から推測できた。

「……わかりました。今日の放課後にでも本人に聞いてみます」

そうしてくださる？という松山の声と同時に、一時限目の始業を知らせるチャイムが学校に響いた。

自習、と大きく書かれた黒板の前に陣取り、黙々と自習を続ける生徒たちの姿を時折確認してはまた手元の参考書に目を落とす。卒業式はすでに済んでおり、この時期になると一、二年生は四月の休み明けテストの準備に忙しい。また二年生はすでに大学受験対策や就職活動対策にも取り組んでおり、春休みは何かと忙しい生徒も多かった。とくに私のクラスは大学進学希望の生徒が多く、早い生徒は夏休みから夏期受験向け講習に参加していた。

手元の参考書は教科書では補いきれない学習要項をまとめたものだった。私は日本史の担当だ。もちろん自分の受け持つこのクラスの日本史も教えていた。日本史を自習している生徒は時折手を上げて私を呼ぶ。

「先生」

目を上げると、茜の右隣の男子生徒が手をあげていた。参考書を教壇に置いて立ち上がると、そ

の生徒も手を下げてまたノートに視線を落とし、教科書と交互に見比べながら首をかしげている。

「どうした？」

「この問一〇の答えが教科書に見つからないんです」

「ああ、これは教科書の後ろについてる添付資料のところだ。教科書の注記がここだから、この部分だと……」

生徒の右側に立つようにして教科書を覗いているので、生徒を通り越して左側には茜の姿がちらりと見えた。だが、気にしないように意識を生徒の教科書へと集中させる。目的の項目を見つけて、

「これがここの問の答えになる。ただ、そのまま書くと減点だぞ」

「えー」

「問が現在の文化との違いを示せだから、これをそのまま書いても答えにならないだろ。現在の文化と、この答えの文化の違いを示さないと」

男子生徒が頭をかきながら唸る横でまた教室を見渡す。皆黙々と自習を続けている。しかし、その中にこっそりと手紙をやりとりする女子の姿を見つけた。これぐらいのことはどの授業でも日常茶飯事のことだ。見てみぬ振りをきめて視線を戻すと、足元にこんと小さな衝撃があった。視線を床に落とすと、消しゴムが一つつま先の辺りに転がっていた。

「すいません」

周囲の静寂を憚る小さな声。消しゴムを拾い上げてから声のしたほうへ振り返ると、そこで茜が小さく手を上げていた。

「私の消しゴムです」

「あ、ああ」

男子生徒の背後を回って茜へと近づく。紺色の制服の袖から細くて白い手首が覗く。手のひらは小さく、しかし指は細く長くしなやかで、私はなぜか夕子の手のひらと比べていた。

「ありがとうございます」

茜はそう言って、手のひらに置いた消しゴムをまだ掴んだままの私の指ごとふわりと包んだ。驚くほどに、彼女の指は冷たかった。ほんの一瞬肌が触れ合ったそれに、私は激しく動揺していた。

「先生、これでいいですかー？」

背後で男子生徒の声が上がる。瞬間、私はほぼ無意識に茜を見つめていた。茜は優しく微笑んで、私のことを上目遣いで見つめていた。

世界が一瞬、止まったような幻想を見た。

四時限目終了のチャイムが鳴り、日直の号令のもと授業が終わると廊下に飛び出していく生徒のほか、友人たちと集まって机を囲み、早速弁当を広げる生徒もいた。教室の隅へと視線を投げると、茜の机の周りには三人ほどの女子生徒たちが弁当を持参して集まり始めていた。先ほど質問してきた右隣の男子は、リーダー格の女子生徒に片手で追い払われている。話しかけられて無邪気に笑う茜の姿は普通の高校生だ。彼女の何に惹かれるのか、自分でも不思議に思いながら教室を出る。

廊下では教師と生徒が入り混じってそれぞれの目的の場所へと移動していた。ただ廊下で話しているだけの生徒もいる。一日の時間の中で、多分一番開放された気分になるだろう昼休みは、私にとっても良い息抜きの時間だった。昼食はいつも学食か職員用の弁当を取っていた。夕子は朝が早く夜が遅いので、弁当は作らなくてもいいと言っている。今日は職員用の弁当を取ってあるため、職員室に戻ると机の上に仕出しの弁当が置いてあるはずだ。

職員室に入ろうとしたところで、

「藤川先生」

と呼び止められた。振り返ると、そこには二年B組の男子生徒、溝端周平が立っていた。どうやら、先ほど授業が終わってすぐ付いてきたのだろう。

「どうした？用があるなら教室で言えば楽だったろう」

「……」

しかし、溝端は口を横に一文字に結んだまま私を見つめるばかりだった。ほかの生徒や教師たちがいぶかしげな眼で私たちを見ながらすれ違って行く。

「ここでは話しにくいことか？」

私のその言葉に、溝端が一つ頷く。

「そうか……ちょっと待ってろ」

私は溝端を職員室の外で待たせ、職員室内の鍵ボックスから進路相談室の鍵を取った。管理をしている教師に昼休みの間使用したいと頼むと、今日は特に使用する予定がないということですぐに借りることができた。

「よし、進路相談室に行こう」

直立不動で待っていた溝端にそう言うと、

「はい」

と小さく答えて私の後ろをついてきた。進路相談室は職員室から少し離れている。その間も、溝端は無言で私の後ろを静かについてくるだけだった。

溝端周平はバスケット部の新部長で、女子生徒からの人気も高い。放課後の体育館には溝端を目当てに女子生徒が集まってくるらしい。私は弓道部の副顧問なので実際にそれを見たことはないが、ときどき噂に聞いている。たしかに彼はすらりと身長が高く、細身だが筋肉質で高校二年生とは思えぬ綺麗な顔立ちをしていた。私も身長は一八五センチあるが、それに迫るくらいの身長の高さには驚いたものだ。成績も優秀で、毎学期末テストの結果では学年のトップ五に入るほど。性格は明るく、いうなれば「爽やか」とでもいうのだろうか。

「よし、ほら、入れ」

「はい……」

薄暗い進路相談室のカーテンを開き、ソファに座るよう勧める。時折来客用にも使われるこの部屋にはコーヒーマーカーや小さな冷蔵庫なども設置されている。もちろん、進路相談に使われているので就職情報誌や大学進学用参考書なども用意されていたが、私は冷蔵庫から麦茶のペットボトルを出し、紙コップに注いで溝端の前のローテーブルに置いた。

「あ、ありがとうございます」

溝端はしばらく迷っていたようだが、紙コップに手を伸ばした。私もその向かいに座り、同じように紙コップの麦茶を喉に流し込んだ。

「それで、どうした」

一瞬、溝端の手が止まる。そして、二口目を飲もうとした手をそのまま机へと戻した。

「あの……」

しばらくの沈黙。重い沈黙を素直に受け入れる。長くて綺麗なまつ毛が細かく震えて逡巡しているのを思わせる。まるで、女性のような顔立ちをしている。なるほど、女子生徒に人気があるのが分かる気がする。

「先生、俺、学校……やめたいんです」

突然の告白に私は一瞬言葉を飲んだ。だが、全く予想がつかなかったわけではなかった。

「どうして？何か、気になることがあったか？」

「……」

膝の上に乗せられた拳はかすかに震えていた。いつもの溝端らしからぬ姿。

「別に誰かに話すようなことはしないし、場合によってはご両親にも言わないから。何かあったから辞めたいんだろう」

溝端を覗き込むようにして私が言うと、ふと溝端は目を挙げた。その瞳にはかすかに涙がたまっている。

「本当に……誰にも言わないですか？」

「……ああ、約束する」

深くうなずいたが、彼はまだ迷っているようだった。だが、

「先生なら……」

と言ってまた麦茶の紙コップを手に取り、ぐいとい気に飲み込んだ。

「俺、付き合ってる子がいるんです。その子が、妊娠……して……」

私の嫌な予感がじわりと現実味を帯びた。なるほど、その手の理由で学校を退学になる生徒は一年の間に何人かはいるものの、自ら辞めたいということは……。

「責任をとるつもりか」

あえて重い言葉を発した。すると、溝端はこくと小さくうなずいた。

「でも、お前のその姿を見てるとまだ迷ってるな」

一瞬、溝端が驚いたように私を見た。私は落ち着いて紙コップを手に取った。

「相手は？その子もうちの学校の子か」

溝端はまだ驚きの表情を浮かべていたが、素直に一つ頷く。

「同じクラスの……杉沢さんです」

ひやりと背筋を何かが舐めるように冷たくなった。

「杉……沢……」

「でも、僕たち愛しあってるんです！彼女のこと、絶対幸せにできるから……だから、学校を辞めて、働いて、彼女を……彼女と子供を、養ってやりたいんです。でも……」

溝端の声はあまり私の耳には入ってこなかった。ただ、彼の言う、愛しあってるという言葉だけは、脳裏によみがえる妖艶な視線を投げる茜になぜか、合わなかった。

「でも、彼女、堕ろすって……いうんです。子供を……」

「堕胎……」

溝端は頭を抱えた。

「俺、正直迷ってます。先生の言うとおりです。彼女と結婚して、子供も一緒に育てていきたい。でも、俺……」

「まだ、親になる決心はつかないか」

かろうじて絞り出した私の言葉は震えていた。おそらく、今この段階で、動揺しているのは溝端以上に私自身だ。

「それに、まだ、やりたいことも……あるし……本当は大学受験するつもりだったし。でも、彼女が子供を産む以上、俺のわがままつきとおすわけにいかないし……」

「……」

私は正直、どう言葉をかけていいものか迷っていた。自分のクラスからこういう問題が出ることは今までなかった。だから、どこかのクラスでこのような問題で退学していった生徒がいると知っても他人事でした。そして、私自身が結婚していないことも影響している。そして、何より……茜が、相手だと聞いて動揺が隠しきれなかった。

「溝端……」

「先生、俺……どうしたらいいですか」

その質問に、いますぐ答えてやることはできなさそうだった。

「溝端、この話を俺に相談することは……その、杉沢には話をしたのか」

「はい、一応……ただ、今日するとは言っていないですけど……親に相談する前に、先生に相談しておきたくて」

ただぼんやりと、私は今日の茜の様子を思い出していた。あの微笑みは、やはり私に対する挑戦だったのだろうか。

「杉沢からも話を聞きたい。今日の放課後、話を聞くから……お前はちょっと落ち着いてもう一度考えろ」

「……はい」

放課後が少し遠のけばと、思った。

が、声が。

「ああ、杉沢。ちょっといいか」

帰りのホームルームが終わってからすぐ、散り散りに出ていく生徒の中に混じっていた茜に声をかけると、取り巻きの女子たちから怪訝な目をされた。

「進路相談室まで。ちょっと話がある」

茜は一瞬眉をひそめて首をかしげたが、ふと教室の片隅に目をやってからさびしげに微笑んだ。視線の先をみると、溝端が一瞬固まり、すぐに教室から出て行った。アイコンタクトでもとったのだろうか。そう思うと、心の中の黒い塊がぞわりと動き出そうとする。

「帰りの支度をしてからでも、いいですか？」

「ん、ああ。じゃあ、先に行って待ってるから」

出席簿を持って教室を出ると、後ろのほうで「なんかあったの？」と女子の声が聞こえた。聞いていないふりをして、教室からそのまま進路相談室へと向かう。昼休みのうちに、進路相談の担当教師には話をつけてあった。部活に向かう生徒たちに混じって廊下を進む。

昼休みのように進路相談室へと入ってカーテンを開け、冷蔵庫から麦茶を取り出した。ソファを振り返ると、まだ落ち着かない様子の溝端がそこにいるような気がする。麦茶を注ぐ手が思わず止まってしまう。

「失礼します」

ノックの後、そんな声がして茜がドアを開けた。注ぎかけていた麦茶が紙コップを外れて机にこぼれる。

「あ！」

慌てて近くの雑巾で机の麦茶を拭きとる。すると、茜が苦笑してそばへとやってきた。

「大丈夫ですか」

「ああ、考えごとをしていたもんだから……」

茜は少しだけ首をかしげて、それから私が机に置いた濡れ雑巾をとると流しで洗い始めた。

「いいぞ、あとで俺がやっておくから」

「でも、すぐにやっておかないとにおいが付きますよ。これ、机拭き用のふきんみたいだし」

「あ、そうか……」

ふきんを洗い終えた茜はポケットから取り出してあったハンカチで手を拭いてからソファに座った。きちんと揃えられた足は白くて細い。スカートの裾は短すぎず長すぎず、紺のハイソックスが清楚だった。思わず見つめてしまい、慌てて紙コップに麦茶を注ぎなおした。

「部活は、大丈夫か」

「はい。今日は茶道部、お休みなので。といっても、ほとんどお休みですけど」

麦茶を差し出すと、ありがとうございます、と両手でそれを受け取った。その時気がついた。右手の薬指に、銀色の指輪が光っている。安いものだろうが、目に引かれる。

「先生が考え事なんて……なんか不思議」

麦茶を一口含んでから、そう言って茜は笑った。その表情は少し子供っぽく映る。

「いや、それは……」

「溝端君が、相談しにきたんですよ」

いきなり笑顔で核心を突かれ、私は明らかに戸惑った表情を見せたのだろう。茜はいたずらっぽく微笑んで、また麦茶を一口飲んだ。細い首が上下した。

「私が妊娠した話ですよ」

「……」

私は黙って茜の前に座った。昼休みに溝端と対峙した時と同じように、茜に向き合うことに少し困惑していた。

「先生、溝端君に、辞めないでもいいって、言ってあげてください」

「……それは？」

彼女は唇を指先で少し拭いてから、紙コップをローテーブルに置いた。そして、膝の上に両手を置いて、

「あれ、嘘なんです」

とにっこりと笑った。虚を突かれ、私は固まる。

「彼、固まっちゃって。今の先生みたいに。で、まだ結論は出てないけど、学校辞めて働こうと思う、なんて言いだしちゃって。なんだかいまさら嘘なんて言えなくて」

「……じゃあ、堕ろすっていうのは……？」

「彼のことあきらめさせるのにはちょうどいいかなって」

少し困ったように茜は笑って小さく頭を下げた。

「先生にまで迷惑かけてすいません」

混乱はしていたが、先ほどまでの胸のつかえはとれた気がした。

「本当だな？本当に、妊娠なんてないんだな？」

ともう一度確認すると、

「はい。全然」

と茜が微笑む。私は突然気が緩み、長い溜息をついた。すると、深くうなだれた私の後頭部にくすくすと笑い声が聞こえた。

「先生、なんだか今日はらしくないですね。いつもすごく怖い顔してるのに、なんだかお父さんみたい」

「お父さんとはなんだ。ああ、でも……」

たしかに私にはこのくらいの子供がいてもおかしくはないのだ。そう思うと変な気分だった。しかし、茜の姿をまた真正面から見て、娘、という言葉に妙な違和感を覚えた。

「話って、それだけですか？」

「あ、いや……それから」

茜が小さく首をかしげる。

「ほかの学校の先生から朝電話があつてな。杉沢が、深夜に大通りを徘徊してるっていう連絡があつたんだ。それは、本当か？」

ふと、茜の顔に影が差す。戸惑いと、どう言訳をしたものか逡巡しているような、そんな具合の表情だ。だがすぐに、

「一回だけ。溝端くんと遊びに行って、遅くなっちゃって……」

と右手の人差し指を立てた。

「頻繁に見かけられているという話だったぞ？」

私の厳しい口調に茜が唇を尖らす。リップクリームを塗っているらしい小ぶりの唇が可愛い。

「でも、そんなに夜遅くは……十時くらい……」

「十時なら十分夜遅くだろう。なんでそんな時間になるんだ」

だがそれには茜は答えなかった。視線をローテーブルのあたりにさまよわせ、

「すいません……」

と小さく呟くように言った。

「いいか。そんな時間に出歩くななんて危ないだろう。深夜に出歩くようなことはしないように。わかったな」

「……」

ふっと、茜と視線がぶつかる。動悸がゆっくりと、しかし確実に早くなっていく。

「ねえ、先生……」

茜がゆっくりと近づいてくる。

「私ね、溝端君とは付き合っていないんです。向こうが、付き合ってると思ってるだけ」

茜は私と見つめあいながら、ゆっくりと指輪を抜き取って私の目の前に差し出した。

「これも、かわいそうだからつけてあげてるだけ。だって、私が好きなのは……」

世界が一瞬凍りついた。開け放った窓から、綺麗な夕陽が差しこんでくる。

耳元で囁いた茜の声が、声が。

「おかえりなさい」

自宅に戻ると夕子がエプロン姿で出迎えてくれた。中からはいい香りが漂ってくる。

「ただいま。今日はビーフシチューだな」

「正解。昨日のうちに仕込んでおいたから、今日は帰ってきてすぐ出来ましたよ」

時刻は七時半を過ぎたあたり。夕子と一緒に暮らしてからはいつも六時半には美容室を上がってくるようになった。店長からは許しを得ているらしい。たまに指名が入って遅くなるときには必ず連絡をしてくれる。

「やっぱり、家に帰ると飯ができてるのはいいな」

スーツを預けながら夕子に言うと、

「楽チンでしょ」

と微笑んだ。健康的に日焼けした肌によく似合う明るい笑顔だ。

しかし、今日はなんだか、その笑顔が痛々しく見えた。私の見方が、変わってしまったからだろう。

「それにしても、今日は遅かったんですね」

「あ、ああ……生徒指導があったから」

「担任の先生は大変ですねー。あ、今日洗濯機もうまわしちゃってるから着替えはカゴに入れておいてくださいね」

スーツの上着をハンガーにかけて、夕子はそう言ってからキッチンに消えた。

着替えを済ませてリビングダイニングに入ると、テーブルにはサラダボウルとパンが二種類ほど並んでいた。対面式のカウンターキッチンを覗くと、

「もう少し早いと思ってたからパン焼いておいたんだけど冷めちゃった」

と舌を出して、皿にビーフシチューを盛っていた。

「連絡すればよかったな」

「ううん。全然。あっため直します？」

「いや、このままでいいよ。腹減った」

皿に並んだ薄切りのフランスパンをかじる。

「あ、つまみ食い！」

二つの皿を両手に持ったまま夕子が唇を尖らす。だがすぐに笑って、座った私の前にビーフシチューの盛られた皿を置いた。

「じゃ、いただきます」

「いただきます」

今日の夕食の話題は、夕子の店の客の話だった。大体は夕子が一方的に今日あったことを盛り沢山で話して夕食が終わる。はきはきとかつぜつの良い夕子。茶色のショートボブを時折揺らしながら、大きな身振り手振りで話す。そのせいか、いつも夕子は私よりも遅めに食べ終わる。今日も、私のほうがすぐに食べ終わり、夕子は「ごめんね」と言いながら慌てて夕食を食べ始めた。

「そういえば、この時期に生徒指導なんて珍しいですね」
パンをかじりながら夕子が思い出したように言った。すでに煙草に手を伸ばしかけていた私は、
「ああ」
と曖昧に相槌を返す。

「なんかあったんですか？」

「うーん……」

一瞬、何をどう話したのか悩んだ。そして、茜との放課後の出来事を鮮明に思い出し、煙草に火をつけようとした手が震えた。

「いや、担任してる学級の女子生徒が妊娠したから、同じ学級の男子生徒が学校を辞めるとか言い出したんだよ」

「えー！それって大事件！」

パンをかじっていた夕子が驚きで目を丸くする。

「いや、妊娠は嘘だったんだけどな」

「あ、そうなんですか。じゃあ、相手の男の子は？」

「まだ知らないから、今日中に本人同士で話すとは言ってたけどな」

夕子はへー、と小さく納得したように言ってからパンをかじり、それを咀嚼しながら「でも」と付け足した。

「嘘とはいえ、ちょっと酷いですよね」

「ん？」

「だって、きっとそれってちょっとからかうつもりで言ったんでしょ。きっと、っていうか絶対。私たちぐらいの歳だと、結婚するために騙したとか、変な話お金欲しさに嘘つくとかって聞いたことあるけど。高校生じゃそんなことありませんよね。ただの冗談にしてはちょっと酷いですよ。相手の男の子がかわいそう」

「ああ……」

なんでそんなことするんでしょうねえ、と言う夕子に、私は少し嫌な感情を抱いていた。茜のことを責めることは、したくない。

その夜、一緒に寝よう、という夕子の誘いを断って、先に夕子を眠らせ、私は深夜まで煙草を吸いながらリビングで過ごしていた。今夜は夕子と一緒に過ごすことは考えられなかった。脳裏に、あの茜の微笑みと、強い瞳と、耳元の囁きが残っていたからだ。

「だって、私が本当に好きなのは……」

思い出してはかき消すように煙草を吸いこむ。白い煙をゆっくりと吐き出しながら、からかわれたんだと自分に言い聞かせた。あの言葉は、はっきりとこう結ばれた。

「藤川先生だもの。ずっと……」

魅惑的な声。かすかに震えるように、少女のようでも女性のようにもある、その声が私のことを好きだと。しかし、高校生の女子生徒にからかわれたのだと、冷静な自分は考えている。当たり前である。年端もいかぬ子どもである茜が、五〇を目前とした私に対して恋愛感情など抱くはずが

ない。子供である、茜が。しかし「妊娠」という言葉が私の想像を嫌なものへと変化させる。溝端が妊娠を確信した以上、茜との間にそういったことがあったというのは事実だ。子供だと思っている反面、もうすでにそういった行為をしていることという事実が私の中の嫌な思いを掻き立てる。

ただ澱のように心の底へたまっていく感情を、押し流すように煙草の煙を吐き出した。

翌日、少し早めに職員室へ入ると、教頭が私を見つけて慌てた様子で駆け寄ってきた。何事かと首をかしげていると、来客室に保護者が二名来ているという。

「杉沢さんと、溝端くんのお母さんが二人でいらしてるから早く行ってくれないか」
その名前を聞いただけで話の内容が見えた気がして、私は少しめまいを覚えた。どういった話し合いがなされたのかはなんとなく想像が付く。そして、保護者が二人そろって学校へきたということは、当然私の名前も挙がったのだろう。

「わかりました」
私は念のため「来客中により時間までに戻らなければ朝のホームルームをお願いします。藤川」と書いたメモを隣の松山の机に置いて職員室を出た。

来客室は職員室から少し離れた校長室と隣接した場所にある。ノックをすると、中からはいと返事があったのでドアを開けた。立派な応接セットに二つの女性の顔。テーブルには口のつけられていない緑茶が二つ綺麗に並んでいた。

「おはようございます」
軽く頭を下げてそういって、母親二人も「おはようございます」と頭を下げた。この前三者面談をしたばかりなのでどちらの顔もしっかり覚えている。ソファの左側に座る、ややふくよかな体系をしたほうが溝端の母親で、すらりとした体系をぴんと伸ばしているほうが茜の母親だ。

「朝早くからすいません」
そういって母親二人はそろって頭を下げた。私も向かいに腰掛けながら、
「いえ、こちらこそご足労いただきまして」
と頭を下げる。少しの沈黙。こちらから用件を聞こうかと思った矢先、
「実は昨日」

と、また茜の母親の方が口を開いた。
「溝端君のお母さんからお電話をいただきまして。その、溝端君とうちの茜がどうやら交際しているらしいとのことなんですが、先生はご存知ですか？」

予想外の質問に私は一瞬面食らった。もうすでに私が周知の上での質問が来ると思っていたので言葉に詰まったが、

「ええ。私も昨日、溝端くんから聞いて初めて知りました」
と正直にありのままを話した。

「じゃあ、周平から……その、ある程度のことも？」
遠慮がちに口を開いたのは溝端の母親のほうだった。おそらく、茜の妊娠や学校を辞めると言い出したことだろう。

「ええ、聞きました」
私の言葉に、ため息をついたのは溝端の母親のほうだった。

「できればご両親にもしばらくは内密にしてほしいとのことだったので、あえてご連絡差し上げなかったのは私の采配です。それは申し訳ありませんでした。しかし、昨日のうちに溝端くん

から話を聞いた後で、杉沢さんとも一応話をして、その……」

「妊娠した、ということでしたけど」

茜の母親は、やや困惑したように、しかしはっきりとそう言った。

「ええ、その件ですが。私が本人から聞いた限りでは、妊娠というのは冗談だったということなんです」

私の耳元には、あの甘い囁きが蘇っていた。時間が経過するほど、それは生々しく、零れる吐息までが思い出される。茜が今ここにいるように。

だが、私がそんな余韻に浸っていたのは一瞬の出来事だった。

「冗談！」

と声を裏返したのは茜の母親だった。その横で、溝端の母親は青ざめて口をあけたまま硬直していた。

「娘がそんなことを？」

「ええ。私が聞いたときにはたしかに。あの、杉沢さんのお母さんは本人と詳しくお話になったんですか？」

いろいろ聞くうちに出てきた齟齬を確かめるため、私が尋ねると茜の母親ははっきりと「いいえ」と答えた。

「私は昨日の夜に溝端君のお母さんからお電話をいただいて、どうやら娘が溝端君とお付き合いしていて、妊娠してしまったようだと聞いたんです。溝端くんは責任を感じて学校を辞めるといっていると聞いたので、とりあえず担任の藤川先生にも相談してみようかと」

「溝端君のお母さんは、それなりに本人とお話になったんですよね」

「……え、ええ。本人から話したい事があるといわれて……」

おそろおそろ、といったような口調で溝端の母親はそう言うとまた俯いた。本人からの相談はよほど固い決意の元だったのだろう。それを簡単に冗談だったといわれて状況をうまく飲み込めないに違いない。

「実を言うと、私も妊娠が杉沢さんの冗談だったということは溝端くんには伝えていません。杉沢さんの話では、昨日のうちに溝端君と直接会って話をするということだったので……一応、本人同士の話をさせてから、今日二人を呼んで直接話を聞くつもりだったんです。でも、お母さんがたからの話を聞くと、そんな話し合いがあったようには思えませんね」

私の言葉に母親二人は一度目を合わせてから、

「そうですね……」

とため息混じりに言った。

「二人はもう家は出られたんですか」

「ええ、子供たちには言わずに来ようと溝端さんとも相談していたので。家を出たのを確認してからきました」

「じゃあ、そろそろ着いてる時間だな……」

腕時計を見ると生徒たちの登校ラッシュの時間帯だった。おそらく二人もこの時間帯には教室にいることだろう。

「あの……先生」

そう口を開いたのは溝端の母親のほうだった。

「はい」

「できれば、子供たちとの話し合いはまだ避けたいんです。本当に杉沢さんの妊娠が嘘ならば、うちの子もいろいろ考えると思いますし……」

できるなら今二人を呼び出して話をさせようと思ったのだが、親がわざわざ子供たちと時間をずらしてきているわけである。そこは尊重しないとならないか、と考え直して姿勢を正した。

「では、どうでしょうか。今日中に、また二人と私が話をしてみます。昨日直接会うという話もどうなったかわかりませんし、もしかしたら何らかの事情で会えなかったのかもしれないですし」

その提案に母親二人はしばらく考え込んでいたが、

「よろしくお願いします」

と揃って頭を下げた。

「では、どうしますか。今日の結果は、お電話でご連絡差し上げるという形でよろしいですか」

「そうですね。そのほうが助かります」

全ての生徒の連絡先は事務所に行けばわかるようになっている。昔は担任教師が全ての連絡先を控えていたものだが、今はプライバシーの問題で学校もうるさくなっているのだ。何時ごろに話を聞けるかわからないので、かけられたとしても夜の七時から八時の間になることを了承してもらった。

「あの、ちょっとすいません」

三人揃ってソファをたったところで、茜の母親のほうがそういつて溝端の母親に耳打ちした。すると、溝端の母親のほうは、

「では、私はこれで……」

とまた一つ頭を下げてから来客室を出て行った。完全に二人きりになったところで、

「すいません、長い時間……」

と茜の母親が深々と頭を下げる。

「いえ、でも、どうなさったんですか」

ソファを勧めながらそう言うと、彼女は少し思案するように黙ってから、

「実は、茜の妊娠のことなんですけど」

と切り出した。

「ええ、さっきの」

平静を装いながら返事をするが、かすかな手の震えがとまらない。緊張しているのだ、と認識するのと、

「本当に冗談なんでしょうか」

という茜の母親の言葉が発せられるのはほぼ同時だった。

「といたしますと……？」

一拍遅れて私の言葉が来客室に響く。茜の母親の方は少し俯き加減になりながら、

「私には……いえ、まだ本人と話していないので、先生のお話を聞く限りですけど。どうも、本

当は妊娠しているのにそれを隠そうとしているような気がしてならないんです」

とまっすぐ私のことを見つめた。茜にはあまり似ていない。いや、茜が似ていないのだろうが、私の脳裏にはまっさきに茜のあの姿が浮かんだ。

「今日の話し合いがどういう結果になったとしても、できれば一度、病院で本当に妊娠していないか確認しないと気が治まりそうにないんです」

昨日の放課後、夕焼けの陽気に変化しつつある日差しの中で「あれ、嘘なんです」と困ったように笑いながら言った茜を思い出す。その言葉は真実か。たしかに私はなぜ、この瞬間までそれを疑わずにいたのだろう。

「……わかりました。では、その件も話してみましよう。溝端君にも、勿論話しても大丈夫ですネ？」

「……え、ええ。そうですね」

茜の母親は一瞬逡巡するような目をしたが、すぐにそう答えた。

「では、また後ほどお電話いたします」

「よろしくお願いします」

私たちがソファを立ったのと、ホームルームの開始を知らせるチャイムが鳴るのはほぼ同時だった。茜の母親を職員用の玄関まで送りながら、今頃は松山がホームルームへ向かっているだろう姿を想像し、歩調を少しだけ緩めた。

朝の一件の他は特に変わったこともなく放課後まで時間が過ぎていた。溝端と茜の二人には、昼休みのうちに放課後進路相談室へくるように伝えてあった。昨日から進路相談室の使用が激しいので、担当の教諭からは「熱心ですね」と嫌味なのか本当にそう思われているのかわからないような言葉を頂戴していた。

帰りのホームルームが終わり、一度職員室へと戻って日誌や出席簿を元に戻してから進路相談室の鍵を借りる。

進路相談室へ行くと、すでに二人が扉の外で並んで待っていた。

「待たせてすまないな」

小走りで駆け寄って鍵を開け、二人を先に座らせてから私も向かいに腰掛けた。そして、少し沈黙してから、

「昨日の話だが」

と口火を切った。それまで俯いていた二人の顔が同時に上がる。

「溝端にはいってなかったが、昨日の放課後、杉沢とも二人で話をしたんだ。そこで、杉沢から溝端と二人で昨日のうちに直接会って話すと聞いたんだが、その話し合いはあったのか？」

ちら、と溝端が意外そうな顔をして茜を振り返った。が、茜はそれに答えず、

「いいえ、昨日は私の都合が悪くなったので直接会って話は出来ませんでした。だから溝端君は何も知りません」

とはっきりと答えた。昨日のような甘い表情は微塵も感じさせない冷たい表情。気になって膝の上に置かれた手を見ると、その指から昨日までしていた指輪がなくなっていた。

「そうか。じゃあ、私の口から昨日のことを話してもいいか？」

「はい」

迷いのない答え。私はかいつまんで、溝端に彼女の妊娠が嘘であること、冗談で言ったつもりがあまりにも溝端が本気になったためにこれまで言い出せなかったこと、昨日溝端から私に相談するという話を聞いて私には正直なところを話してくれたことを伝えた。話していくうちに、溝端の表情は困惑とも安堵とも取れぬ表情を浮かべていった。

「溝端、昨日のうちの母さんには打ち明けたんだってな。その話」

やや青ざめていた溝端は、それを聞いて一つ頷いた。それには茜のほうが驚いた様子だった。ずっと溝端を視線だけで振り返り、何も答えない彼にまた視線を私へ戻した。

「実は、そのことで溝端と杉沢のお母さんがいらした。そこで今と同じような話を私からして、溝端のお母さんの方は納得したようだった。溝端も、今後のことを少し落ち着いて考えられる気になったろう？」

「……はい」

「……それで、これは杉沢との話し合いになるが……」

「母は納得しなかったんですね」

私の言葉をきちんと聞いていたのだろう。茜は即座に答えた。その目はひどく冷たい。私はその瞳に射すくめられるように言葉を失った。

「母のことですから。多分、病院にいつて確かめろといわれたんじゃないですか」
図星だった私はなおのこと言葉を見失い、どう話を続けたものか悩んだ。溝端は放心したように机に視線を落としたままだ。こういうとき、なぜ男は戸惑うのかと溝端と自分の姿を心の中で投影して思う。

しばしの沈黙の後、茜はふっとため息をついてから、
「いいですよ。病院にいつてきちんと確かめます」
と寂しそうに笑った。

「元はといえば私の嘘から始まってわけだし」
それは自分自身を納得させるような響きであった。

「……そうか」
やっと出した私の言葉が妙に空々しく、言い訳がましい気持ちになる。だが、だからといってそれを補える言葉はなく、また重い沈黙が私たちを包んだ。

「ただ、条件があります」
ひた、と冷たいものが頬に当てられたような感覚。さっと目線を茜に移すと、彼女はそれまでの冷たい表情とは一転して、悪戯を思いついたような笑顔を浮かべて私を見つめていた。

「条件？」
「はい。まず、私の嘘からこうなってしまった以上、溝端君と付き合うことは出来ません。溝端君とは別れます」

えっ、という短い声が溝端の喉の奥から上がる。端正な顔立ちが驚きと不安で引きつっていた。これを他の女子生徒が見ていたらどんな気分になるのだろうと、頭のどこかで妙に冷静なもう一人の自分が考えている。いや、冷静なのではない。その自分には、私の身に起きていることは他人事なのだ、とまた余計なことを考える。

「それから、病院の付き添いには母じゃなくて、先生に来てもらいたいんです」
「……！」

今度は私が顔を引きつらせる番だった。なるほど、先ほどの笑顔は溝端に向けられたものではなく、私に対してのものだったのだと痛感した。

「私、母とは絶対行きませんから」
その瞳に、またあの冷たい視線が混じる。

そうか、私はこの、とりどりに変化する茜の視線が、好きなんだと、思った。

約束の七時を向かえ、私は職員室の電話からまず溝端の家へ連絡を入れた。そして、まだ和解したとはいえないものの、今回の一件で茜が責任を感じて溝端との交際をやめるとの話がでたことを説明した。溝端自身はまだ整理がついていないため、落ち着かないとは思いますが少しの間考えさせてやってほしいこと、本人がもし相談してくるようなことがあればそれについては話を聞いてやってほしいことなどを話すと、母親は納得したように「ありがとうございました」とくぐもった声で言った。

次に茜の家へ連絡しようと受話器を持ち上げてから、これから話すことについて考えてため息

をついた。どう説明をしたものか、この時間まで正直言って悩んでいた。

「はい、杉沢でございます」

数回のコールの後、母親が直接電話口に出た。

「第一高校の藤川です。茜さんのお母さんはいらっしゃいますか」

念のため確認すると、私ですと簡単に返ってきたので、失礼しましたと前置きしてからまずは溝端の母親に説明したのと同じ内容のことを話した。茜が溝端と別れると言ったことに関してはさすがに驚きを隠せないようだった。

「娘からそう言ったんですか？」

母親の問いに、そうですと肯定する。すると「そうですか……」と沈黙した。

「あとは、お母さんからお話があった病院のことですが」

「ええ。きちんと行くといいましたか？」

「はい。病院には行くといってくれました。元はといえば自分の嘘から始まったことだからと納得してくれたようです。ただ……」

私が曇った声を出すと、母親は「ただ？」とやはり不安げな様子だった。

「実は、病院の付き添いには私に来てほしいというんです。その、お母さんとは絶対に行きたくない……」

「……」

電話口が急に沈黙する。言葉が継げない気持ちはよくわかる。私自身、今この瞬間までもどうしたらいいものか悩んでいるのだ。ありのままを告げるので精一杯である。

「できれば杉沢さんとお母さんで、一度お話していただけないでしょうか。私も相談を受けた以上、きちんと最後まで見届けるつもりです。ただ、こういったことに関しては男の私よりもお母さんの方がいいのではないかと思います……」

男尊女卑、などという古臭い言葉はしかし今でも十二分に有効だ。こういったあとで、男だ女だなどと口にしてしまったのはまずいかと思い直した。そして同時に、私は今茜のことを一人の女性としてみていることに気が付いて急に動揺した。

「あの……」

何か言い訳をしようとしたところで、電話口の向こうから、

「私からもお願いできますか」

と聞こえて一瞬頭の中が真っ白になった。その意味を捉えあぐねて、

「え？」

と非常に間の悪い、そして歯切れの悪い問いかけが無意識に口から零れていた。素になった、とでも言うのだろうか。

「なにかとご面倒をおかけして、これ以上は私もどうかと思うんですけど……娘がそういつているなら、娘の意見を尊重したいと」

一瞬だったが、この親子は一体どうなっているのだろうと思った。三者面談の時にはあまり感じていなかったが、二人間には何かしらの確執があるように思える。

「あの……」

「すいませんが、よろしくお願いします。病院の手配は、私のほうからしておきますので」

どうやら、私の意見というものはないのだとそのとき思い知らされた。

その数日後、学校は春休みを迎えた。校内は進学に向けた講習を受けに来る生徒や、春の大会などが迫る部活動があったりしてそれなりに活気に満ちている。しかし、やはり三年生のいない部分は大きく欠けている。四月にはそれを真新しい制服を着た一年生たちが満たしてくれるだろう。

職員室にはまばらではあるが教師の姿も勿論見られる。大体は部活動の合間に四月からの新学期に向けた準備をしにくる教師たちだ。私も三月中に新学期早々のテストに向けた試験作りに追われていた。

「藤川先生」

松山がふと時計を見上げて私を呼ぶ。作りかけの試験から顔を上げると、

「今日はお昼どうされます？」

と尋ねられた。春休み中も弁当をとることができるので、朝の十時までに仕出屋に連絡しなくてはならないのだ。これは普段の日は女性の教師たちが持ち回りで担当しているのだが、休み中は手の空いた教師が気が付いたときにやるようにしているらしい。

「あ、今日はいいです」

「持ってきてらっしゃるの？」

「いえ、今日は午前中だけで帰ろうと思ってたので」

「あら、ご用事ですか」

「ええ、まあ……」

言葉を濁すと何を思ったのか、松山は「そうですか」と真っ赤な唇を不自然に曲げて笑ってから他の教師のもとへと歩いていった。松山が他の教師と話す間に時折ちらりと見える愛想笑いが、私のことを笑っているように思えてならないのは偏見だろう。これ以上見ても気分が悪くなるだけの様な気がしたので、またパソコンへと視線を戻した。今は一人一台ノートパソコン支給の時代だ。使い方がわからない年配の教師向けに情報処理担当の若い教師が時々講習会を行っていた。

数回のチャイムが響いたところで、私は腕時計を見た。あと五分で十二時を回るところだった。試験もだいぶ出来上がってきているので、内容を保存してパソコンを閉じると、隣の席にいた松山が、

「お帰りですか？」

と尋ねてきた。

「ええ、お先に失礼します」

これ以上留まると何か聞かれそうな気がしたので、休み中も皆勤賞の教頭に「私はこれで」と挨拶をしてから職員室を出る。出たところで、内ポケットで携帯電話のバイブレータが振動したので取り出すと夕子からのメールが着信していた、

『ごめんなさい！今日残業確定です。新人さんのコンテスト指導が入っちゃいました。帰れて早くてもきっと十時ごろになります』

仕事中に慌てて打ったのだろう。彼女にしては珍しく絵文字がなかった。私は絵文字を使うよう

な柄ではないので、

『わかった。夕飯は外で済ましてくるから、あんまり遅くなるようなら連絡しろ。迎えに行くから』

とだけ打った。職員玄関から出て車に乗ろうとした直前、また夕子からメールが着信し「ありがとう」という内容を確認して愛車である黒のオーディに乗り込んだ。

普段は通勤に車は使っていない。日ごろは夕子が通勤に使っているからだ。私の高校は自宅近くの駅から電車で行けばすぐだが、夕子の美容室はもともと離れて住んでいたため、私の家からかなりの距離がある。電車でもいけるのだが駅から離れているので少し歩かなくてはならないのだ。それならば車で行ったほうが夜も夜道を歩いたりせず帰ってこれるので安心だろうと勧めたのである。

「今日はちょっと車を使いたいんだがいいか」

朝の会話を運転しながら思い出す。夕子は最初訝しげに、

「何かあったんですか？」

と尋ねてきたが、

「この前の妊娠がどうのこうのって生徒がいただろう。親と相談して病院に一度連れて行こうって話になったんだよ。もしかして、本当に妊娠してたら申し訳が立たないからって」

と正直に答えた。ニュアンスは違うにしろ、そこまでは本当の話だ。

「でも、どうして久紀さんが車出すの？その女の子のご両親だって車ぐらいあるんじゃない？」
たしかにここまでは想定のうちだった。ここで私は初めて嘘をつく。

「いや、車は持っていない家なんだ。ご両親が車の免許を持っていないらしい」

「じゃあ、バスとか電車とか……」

よほど不満なのか、夕子の口ぶりが変化してくる。

「その子のお母さんの知り合いがやってる産婦人科があるらしいんだよ。高校生だし、事情が事情だから、近い産婦人科よりもそこに行きたいそうなんだ。そこがちょっと電車やバスじゃ行きにくいところらしくてな」

「……まあ、そういうことならしょうがないけど……」

まだ口を尖らせていたが、

「今朝は駅まで送ってやろう」

と私が言うと、

「ホント？」

と目を輝かせた。

産婦人科が茜の母親の知り合いが経営していること、そこが電車やバスでは分かりにくいというのは本当だった。あの電話から少し二日ほど経ってから茜の母親から電話があり、産婦人科の知人に事情を説明して予約を入れておいたので、都合はいいかという事後確認のような内容だった。茜の予定はどうかと聞いてみると、それについては本人も承諾しているということだったので、ほぼ強制的に病院へ行く日取りは決まった。

学校から車を走らせ、待ち合わせ場所である茜の自宅から程近いという駅のロータリーに車を

停車させた。車を知らないのでは分からないだろうと思い、あらかじめ聴いておいた茜の携帯電話に電話を入れる。時計を確認すると、約束の十二時半を少し回ったくらいだった。

「はい、もしもし？」

コールがぷつと切れる音がした後、聞きなれない茜の声が耳元でざわつく。電話で聞く声と、日ごろ聞いている声はまた違って聞こえた。そして、あの耳元の囁きを思い出して耳の奥が熱くなるのを感じた。

「ああ、先生だ。もう駅前にいるのか？」

一瞬の間のあと、何とか搾り出した言葉。

「はい。あの、今入ってきた黒い外車がそうですか？見えてるんですけど」

「ああ、じゃあ今外に出るから」

電話が当たたまま運転席を出ると、同じように電話を耳に当てたまま歩いてくる白いコートの女が見えた。艶のある黒髪は胸の辺りまでの長さがあり、毛先はゆるくウェーブがかかっている。ピンク色の小さなバッグを肩にかけ、白くて長い脚はキャメル色の膝丈まであるブーツで隠れていた。

「先生、おはようございます」

そう話しかけられるまで、私は彼女に見惚れていたのだろう。そして、その声を聞くまで、彼女が茜だということを認識できなかった。

「あ、ああ……おはよう」

まだぼうっとした頭で返事を返すと、茜は一度首を傾げてから微笑んだ。

「今日はよろしくお願いします」

何なのだろうか。この、込み上げて来る背徳感は。

ろくな返事も出来ずに、私は彼女を車へ乗るよう促した。

茜を助手席に乗せ、国道をそれた脇道へと入る。病院までの道のりは、茜の母親がインターネットの地図で出しておいてくれたものを使っていた。

「保険証は持ってきてるか」

「はい、大丈夫です」

念のため確認すると、茜はわざわざバッグの中から小ぶりの財布を取り出し、一度確認してからそう返事をした。財布は二つ折りのベージュ色をしたエナメル材。高校生が持つにしては少し質がいいような気がした。よく見ると、財布に付いた飾り（チャームというのだろうか）とバッグのものと同じロゴのものが付いている。ブランド物かもしれない。だが、私の知っている高級なブランドのものとは違うようだった。

「あれから、溝端とは話をしたのか」

急に核心をついたために驚いたのだろう。茜は小さく「あ」とも「え」とも取れぬ声を出して私を振り返った。そして、少し黙ってから、

「いくら話しても分かってもらえないんです。もうこれ以上付き合えないって言っても聞いてもらえなくて」

「……そうか」

「指輪も返したし、アドレスも削除したし、もう本当にやめようって言っても、そんなことは気にしないでいいから、もう少し考えてくれって……」

少し気にするように右手の薬指をさすった彼女が痛々しく映る。あのとき、私の前ですりりと抜いて見せた指輪は、まだあの指に感触を残しているのだろうか。妙な想像を働かせて、動悸が早くなるのを感じた。

「ねえ、藤川先生は、お付き合いしてる人、いるんですよね」

思わぬ質問に私は思わず彼女を振り返った。すると、

「先生、信号赤！」

と前を指差され、危うく横断歩道に突っ込む手前で急ブレーキをかけた。

「あ、ああ……すまないな」

ブレーキを踏む足に余計なほど力をかけながら笑ってみせる。その笑顔は引きつっているに違いない。茜はそんな私を見て少し寂しそうに、

「やっぱり」

と呟いた。

「でも、そんなことを話した覚えはないが」

「はい。先生から直接聞いたことなんてありません。でも、一度職員室の外で電話をしてるのを立ち聞きしちゃいました。今日は遅めに帰るから、晩御飯は先に食べてて良いって。先生結婚してないし、ご両親もいないって話だったし、じゃあ彼女かなって」

そんなことまで一つ一つ覚えている茜に、私は少し感心していた。教師のプライベートな出来事など、生徒にとっては一時の話題にはなるがすぐに風化されていく。

「でも安心してくださいね。多分それを知ってるのは私だけだから。友達はみんないなかったし、先生も周りに人がいないと思って電話してたでしょ」

ちら、と横目で彼女を見ると、悪戯っぽい表情を浮かべて前を向いていた。なぜか私は、脅迫されているような気分になっていた。

「どんな人なんですか、彼女さん」

青信号でアウディを滑らかにスタートさせると、茜は楽しそうに尋ねてきた。一体何を考えているのか分からない。一瞬どう話そうか迷ったが、

「はつらつとして、元気な女性だよ。美容師をやってる」

という、茜は「美容師さん」と含むように復唱した。

「何歳ぐらいの人なんですか？」

「うん？今年で三〇だよ」

「じゃあ、一九歳違うんですね」

「いや、正確には二〇だ。俺が今年で五〇だからな」

「あ、そっか。年の差ですね。今流行の」

「流行ってるのかは知らないが、まあそうだな」

誘導尋問のように茜の言葉につられて夕子のことが語られるのが不思議で仕方がなかった。だが、夕子と二人で茜の話をするときの嫌悪感はまったくない。むしろ、どこか感情というものが吹っ切れている。まるで他人事のようだ。

「もう長いんですか？」

「五年経ったからな。そこそこ長いな」

「へえ……」

意味ありげな相槌。そして、茜は少し考えてから、

「じゃあ、私が割って入るのは難しいのかな」

と言って、ふふと小さく笑った。その意味を汲みあぐねて、一瞬私の思考がとまった。

「ねえ、先生。私、あの時言ったこと。あれは、嘘じゃないですよ」

甘い囁き。車の走る音すら聞こえなくなる。響くのは茜の、子供のような女性のような不思議な響きの声だけだ。蘇る言葉の記憶。この数日間の非日常。心の中に澱のように溜まっていく、認めたくない感情。

「杉沢……お前」

くす、と茜が小さく笑いを漏らす。

「だって、もうずっと前から、先生の中に私はいるでしょう？」

心の中を見透かされたような気がして、私は言葉を失った。

病院についてからは、私は車の中で待つことになった。

「だって、先生。待合室に居づらいでしょう？」

一応付き添いとして行こうと車から降りた私に、茜はそう言って苦笑した。すでに母親からは連絡が付いているので、それさえ受付で説明すれば診察してもらえるという手はずらしい。

「検査が終わったら呼びます。それまで車で待っててください」

そういわれて、私はエンジンを止めた車の中で待つことにした。駐車場はそれほど広くないが、私たちが入ったときには二、三台の空きスペースがあった。どうやらほとんどの患者が歩いてくるらしい。ベビーカーを引く女性や、妊婦が次々と中へと入っていくのを車の中からぼんやりと眺める。

「私、子供は二人かな」

突然、夕子の言葉を思い出して私は無性に煙草が吸いたくなかった。だが、茜がこの後また乗ることを考えると憚られた。それに、窓を開けて吸うのは外の患者たちに悪い気がした。

夕子との結婚は、それは行く末の妊娠、出産につながる。夕子はそれを意識してかしないでか、ある日そういったのだった。答えあぐねていた私に、

「でも、しばらくは二人でいたいですけど」

と苦笑したのだった。それは、否応なしに、いつまでもずるずると交際を続ける私に対する何らかの意思表示なのだと思わせた。

「焦らなくても大丈夫ですから」

そんな言葉とは裏腹に、やはり彼女の中にはある程度の人生の設計図が描かれているのだろう。私のことを思っている言葉なのだろうが。

五年、五年という月日は長いようで短い。そして、きっとお互いを知ろうという気持ちは薄まり、互いを知ったような気になり、何かを見失っている。そんな気がする。

だから、惑わされるのだ。

私は病院を睨んで、そして苦笑した。結局、煙草は吸わずに何か飲もうと、駐車場脇の自動販売機でブラックコーヒーと、少し迷ったが温かいミルクティを買って車に戻った。腕時計を確認すると、ぼんやりしているうちにすでに三〇分ほどが経過していた。

それから、コーヒーを飲みつつ待つこと十五分。病院の出入り口から茜が手招きするのが見えた。慌ててコーヒーをドリンクホルダーに置いて車を出る。

「第二診察室です」

茜の先導で院内に入ると、診察を待つ患者が並ぶ受付で訝しげな目をされた。だが、私は平静を装って茜の後ろについていった。おそらく、こうしていれば父親と娘に見えるだろう。慌てる必要も、後ろめたく思う必要もない。

「失礼します」

第二診察室、とプレートの掛かった診察室へ入ると、柔和な顔立ちをした小柄な中年女性が白衣を着て座っていた。診察台と、簡単な机、患者用の椅子が二つ。

「はじめまして。羽生と申します。付き添いの先生でよろしかったですね？」

「はい。藤川と申します。はじめまして」

羽生と名乗った女医は、一度黙ってまじまじと私のことを見てから苦笑した。

「すいません。勝手に女性の先生だと思っていたものですから。杉沢からは先生の性別までは聞いてなくて。なにぶん、こういう場所ですから」

「ああ、ええ……そう、ですね」

私はどう答えたのか迷い、結局しどろもどろになりつつそう答えた。

「まあ、おかけください。茜ちゃんも」

「はい」

その呼びなれた感じに、こういった形ではないのだろうが羽生と茜には面識があったように思えた。羽織っていたコートを脱いでから、勧められた患者用の椅子に座る。

「事情は杉沢からほぼ、聞いています。大変ですね、先生も」

どう説明されたのかは詳しく知らないのですが、付き添いが茜の言い出したこととは言わないでおくことにした。無難に「生徒の相談でしたから」と答えると、

「いまどき珍しいですよ、そこまでしてくれる先生は」

と保護者の顔つきで笑った。

「杉沢とは大学時代の友人で。茜ちゃんとも小さい頃は何度も顔をあわせていましたから懐かしかったですよ。茜ちゃんが幼稚園に入る前に、杉沢は引っ越しちゃったのでほとんど連絡もなかったんですけど」

そう言って茜を振り返る羽生の表情は母親のものだ。

「だからといっっては、ちょっとあれですけど。今回のことはびっくりしましたね。でも、ご安心ください」

そう言って、羽生は一度茜に笑いかけてから、

「大丈夫。茜ちゃんの言うとおりの、妊娠はしていませんでしたよ」

と微笑を崩さずそういった。私の中で燻っていた嫌なものが溶けていく。

「そうでしたか。じゃあ、これでちゃんと報告できるな、杉沢」

隣の茜もほっとしたように肩を落としてから微笑んだ。それは私が見てきた茜の表情の中で一番等身大とも思えた。

「ただ、先生。これは私が口を出すことではないと思うんですけど」

羽生は少し厳しい口調でそう切り出した。安心したのもつかの間、私たちの表情が同時に強張る。

「私は私立の女子高だけですが、時々高校生の性交渉についての問題について生徒たちに指導することがあるんです。今の高校生はたしかにそういったことに対して自由ですが、自由すぎて誤った妊娠、そして中絶をして子供が二度と産めないような体になってしまった子もたくさん見えています。もちろん、実際にそういった子達を見ている我々医師が指導するのは当然です。でも、日ごろから先生方たちもそういったことに対する意識付けをされているのか、いつも思うんです」

そう言って彼女は壁のポスターを指差した。先ほどまでは目に入らなかったが、そこには「大切な将来に、大切な人の子供を」と大きな字で書かれ、避妊具を使うことや、興味本位での不特定多数との性交渉の危険などが書かれていた。

「日本では年々、エイズの発症者も増えています。学校の先生方の指導も、大切だと思いますよ」

釘をさすように、羽生にそういわれて私はポスターから視線を移す。横で茜が、ひどく不機嫌な顔をして座っていた。

病院の駐車場を出てしばらくすると、

「これ、飲んででもいいですか？」

とドリンクホルダーにそのままになっていたミルクティを指差した。もうしばらく経つのでぬるくなっているだろう。

「あったかいのを買ったんだけどな。新しいのをどこかで買うか？」

だがそれより先に茜は缶を取ると、プルを開けて両手で包むようにしてミルクティを飲んだ。

「ぬるいです」

「そうだろう」

「でも、これがいいです」

そうやってまた一口飲むと、小さく「おいしい」と微笑んだ。道が悪いので車がはねるたび、白いコートにミルクティが飛ばないものかと心配になる。

「じゃあ、家まで送るから、道を教えてくれるか」

とりあえず、私は病院を出てからは待ち合わせ場所だった駅に向かって戻っていた。茜の家に近いという話だったので、駅まで戻ればあとは茜の道案内で戻る予定にしていたのだ。

しかし、私のそれに茜は黙り込んだ。ミルクティを両手に包み、それにじっと視線を落としている。私がそれに驚かなかったのは、その茜の行動をなんとなくではあるが予想していたからだ。

「先生、海が見たいです」

突然のそれには面食らったが。

「海？こんな時期に？」

「私……家に帰りたくないんです」

少し唇を尖らせてそう言ってから、茜は困ったように笑った。自分でわがままを言っているのを自覚しながら、困らせているのを楽しんでいるようだった。

「……少しだけだぞ」

私は、右の予定だったハンドルを左に切った。

この時期ともなると、日差しは暖かいが風はまだ冷たい。海風ともなればなおさらだ。だが、そんなことなど気にするでもなく、砂浜を茜がゆっくりと歩いている。革のブーツなのでさすがに波打ち際まで行くのは憚られているのか、海にそってゆっくりと散歩していた。

一方、私は駐車場から砂浜へ降りる階段の途中に腰掛け、そんな茜の姿を遠巻きに見ている。逆光でシルエットになった茜がどんな表情をしているのか分からないが、波が日差しを浴びて輝く中にゆっくりと歩く茜の姿はまるで海外のリゾート地か何かを写した写真のようだった。今日は比較的風も穏やかで波も少ない。そのせいか、日本でも指折りのサーフィンの地であるこの海でも、サーファーの姿はあまり見られなかった。

ここは、私と夕子の始まりの海でもある。始めて夕子と二人で出かけた場所もこの海だった。そこで私は一度目の告白を受け、それを断ったのだった。それから一年、夕子と何度となく会い、そしてまたここで夕子から告白を受け、私はそれを受けた。五年前、夕日の沈みかけた海辺で夕子が嬉しそうに笑った姿は今でも覚えている。

「先生」

回想の夕子と、いつの間にか戻ってきていた茜が重なって我に返った。彼女の手には、どこで買ってきたのかブラックコーヒーとカフェオレの缶。

「先生はこれでよかったですか？」

「ああ、ありがとう。払うよ」

「いいんです。診察代、あまったから」

飲み物でおなかいっぱいになっちゃいますね、と笑って茜は私の右隣に座った。駐車場には私たちの車しかない。誰も降りてはこないだろうし、誰も上がってはこないだろう。

「先生、私……」

ぽつん、と呟くように茜が言う。私が振り返ると、彼女はまっすぐ前を見つめたまま、大人びた憂いの表情をしていた。急にその表情が艶っぽく思えて、私は鼓動が早まるのを感じた。

「私、一年生の頃からずっと、先生のことが好きでした……」

突然の告白。それまでの思考が一瞬でホワイトアウトする。

「でも、先生は私のことなんて全然気にしてくれなかったですもんね。他の子たちが平気で先生に話しかけていて、とてもうらやましかった。それに……」

太陽の下で輝く海を遠い目で見つめながら、茜はそう言ってふっと笑った。魅力的な彼女の横顔に、私は目が離せないでいた。

「私は穢れた子だから、きっと先生みたいな人とは絶対無理なんだって、思うようにしていました」

「……穢れた子……？」

妙な言い回しが引っかかる。私が鸚鵡返しに尋ねると、茜は一つ首を縦に振った。

「私、母親に無理やり売春させられているんです」

背筋からつま先まで冷たいものが走る。しかし、冷静な部分ではあの母親と茜の態度の理由が分かった気がしていた。

「私が幼稚園に入る前に離婚して、母親と私と二人暮らしになって、正直お金が必要だったのはわかります。ただ、私が体を売らなくてはいけない理由の一つも分かりませんでした。でも、まだ小さかった私は言われるまま売春をして、嫌がれば怒鳴られ殴られてを繰り返すうちに、もう反抗する気すらなくなりました」

「じゃあ、夜の徘徊は……」

「そのせいです。夜、駅前でお客さんを取って、ホテル行って」

その寂しい微笑が、様子を回想しながら話しているのか自虐的なものへと変わっていく。

「今までは家で、うちの母親がお客さん呼んで、私の部屋で売春してたんですけど。うちの母親に男ができて。家で私たちがそんなことしてるのばれるとせつかくの再婚の話もなくなるとかで、学校が終わってからすぐに着替えさせられて、駅前でお客さん捕まえさせられるんです」

「今日の病院のことは……」

「たぶんそれは、私が溝端君以外の子供が出来たらまずいと思ったんじゃないでしょうか。もしくは、他の人の子供を妊娠したことを私が溝端君のせいにしちゃったら問題になると思ったのか。推測はいくらでも」

ふわりと冷たい風が私たちの頬を撫でる。だが、もうすでに寒さは感じないほど、私の体のほうが冷たく冷え切っていた。

「だから、私は先生みたいなすごく素敵な人を好きになる資格なんてない、穢れた私を好きになってくれる人なんていない。そう思って、あきらめようとしていたんです」

でも、と小さく茜は続けようとして黙った。私はすでに、何か言葉をかけられるような思考状態ではなかった。ただひたすら、彼女の次の言葉を待っていた。

「半年前、溝端君にばったり出くわしてしまったんです。お客さんと、ホテルに入るところで」客と二人で路地に入る茜と、それを後ろからつける溝端の姿が目に見えかぶ。ばったり、というのは不適切な想像だが、私にはそうにしか思えなかった。

「彼、学校と親には黙っているから、代わりに付き合っしてほしいって、言いました。私が拒否したら、そのときはこのこと学校にばらすって。ご丁寧に写メまであつて」

進路相談室での言葉を思い出す。茜はたしかに「溝端君とは付き合っていない」と言った。それは、こういう意味だったのか。

「……でも、指輪は？」

ふっと思い出し、右手の薬指にはめられていた指輪を思い出す。

「契約の証、だそうです。恋人ごっこがしたかったというか……ようは、セックスをしてみたかっただけみたいでしたけど」

生々しい言葉が茜の口から出てくるごとに、私は耳をふさぎたくなった。信じたくない、という気持ちよりも、より彼女を「女」として認識してしまうことを恐れていた。彼女の肌を、それを目的として、きっと私ぐらいの年頃の男たちが触ったであろう現実が否応無しに私を襲う。

「このことは、母親には話していません。だから、正直溝端君のお母さんから電話があったときには驚いたんだと思います」

「溝端に妊娠したと嘘をついたのは？」

「そうだったら、そろそろ解放してくれるんじゃないかと思って……さすがに、ちょっとひどかったかもしれないですけど、でも私は脅されて無理につき合わされているだけでしたから。早く解放してほしい……」

小さく鼻をすする音。それがひどく可愛らしくいとおしく、だからといって何も出来ない私の不甲斐無さを浮き立たせる。そんな私をよそに、茜の独白は続く。

「そうしたら、突然今まで無理に付き合わせてすまなかった。これからは大切にするから、学校も辞めて働いて真面目に君と付き合いたいなんて言い出して。こんなに嫌な辛い目に遭わせておいて、そんなことはむしが良すぎるって、思わず彼のことをひどく罵っていました。何を言われてもしようがないけど、もうそんな売春なんてさせないし、絶対に俺が守るから、だからお願いだから別れないでくれって」

彼女の声が徐々に涙声へと変化する。それに気づきながら、私は頭の芯が痺れたように麻痺してきていた。一体何を聞いているのだろうか。私は、茜と溝端のことなど、聞きたくない。

「私、もうこれ以上売春なんてしたくないです。溝端君とだって、もう何も考えたくない。だって、私が好きなのは……」

麻痺した感覚に、私の手に触れるぬくもりだけが伝わる。それが、私の手に重ねられた茜の手のひらのものだとして理解するまでに数秒を要した。

「先生、私……帰りたくない。あの母親の家にも、溝端君のところにも」

あの鋭い強かな瞳に、今は切なくなるほど弱弱しい光と零れそうな涙。小ぶりの唇を噛み切りそうなほど強くかみ締め、何かに耐えていた。

そして、私は、耐えていた何かをおそらく、振りほどいた。

「先生……」

両腕できつく抱きしめた彼女の体は驚くほどに華奢だった。茜は最初驚いたように体を硬直させたが、

「何も言わないでくれ、何も……」

私のその言葉に、力を抜いて体を預けてきた。柔らかな髪感触、ほのかに香るアカネの匂い、わずかに伝わる肌のぬくもり。抑えていた衝動が、今にも爆発しそうだった。

「先生……」

腕の力を少し緩めると、私に体を預けたまま茜が顔だけを上げた。頬を濡らす涙が痛々しい。切な過ぎるほどの微笑み。

「お願い……先生。ずっとこうしていて……」

波音だけが、私たちを包んでいた。見つめあい、言葉にならぬ何かを伝え合い、そして、私たちは唇を合わせ、何かを願った。

夢のような出来事から数時間後、茜を家まで送り届け、私は自宅へ戻っていた。連絡どおり、夕子はまだ帰宅していなかった。それだけが救いで、私は深くため息をついてからコートとスーツのジャケットを脱ぎ、ソファーに無造作に放って座り込んだ。煙草を吸う気力もない。唇に残る茜の感触が生々しく蘇るたび、それを煙でごまかしてしまいそうで吸う気になれないのだ。

とうとう私たちは、何かを越えてしまった。そう感じた。

夕子に合わせる顔がない。しかし、それは茜とのことを後悔しているわけではなかった。むしろ、私は夕子に対する後ろめたさよりも、茜への想いが強くなっていることに罪悪感を覚えていた。

その罪悪感とともに、私の想いを正論付けさせようと言い訳を考える。夕子と付き合いだしたのは、彼女の想いに根負けした部分もあった。たしかに、一年間いろいろな彼女を見てきて惹かれた部分もあったが、それは想いではなくいいところがあると思っただけだ。茜に抱くような複雑な想いは、はっきり言えば皆無だったといえるだろう。茜は私に好意を寄せていた。そして私も、同じように彼女に惹かれていた。お互いに惹かれあい、しかしそれはある意味で赦されないものであったから故の熱情へと変化していた。二人の思わぬうちに。

ぼんやりとしているうちに時間は容赦なく過ぎていた。夕飯を食べる気も起きない。時間が経つごとに、今夜彼女を家に帰してしまったことを後悔して始めていた。帰りたくない、といった彼女を諭し、家に帰すという仕打ちが悪魔のように感じられてきた。

携帯電話が着信を知らせたのは、十時を十分ほど回ったところだった。もう数時間も同じ姿勢でいたことになる。私は自分の時間の使い方に疲れながら、ジャケットに入れっぱなしだった携帯電話を取った。予想通り、着信は夕子からのものだった。

「あ、遅くなってごめんなさい！今駅の改札の前」

「そうか、今まだ家なんだ。これから出る」

「分かりました。じゃあ、ここで待ってます」

「ああ」

なんともいえぬ後味の悪さを残して電話を切る。先ほど脱いだジャケットとコートをまた羽織り、家を出た。

車に乗り込み、スタートさせたところでまた着信があった。何かあったかと表示を見ると、それは夕子からではなく、茜からだった。嫌な予感がして、車を路肩に停めて通話ボタンを押す。

「もしもし？」

少しの沈黙。サーという砂嵐のような音がかすかにしている。

「もしもし？杉沢？」

すると、向こうでかすかな、

「先生……」

という声がした。その声のかすれ具合がひどく気に掛かった。

「おい、どうした？何かあったのか？今どこだ？」

自分の声がひどく狼狽している。だが、それを気にする余裕もなかった。またかすかな声で、
「学校……」

とぼつんと茜が答えた。

「学校？こんな時間になんでそんなところに！」

「……溝端君が、話を聞いてくれるって、呼び出されて……」

「溝端！」

思わず舌打ちしそうになって、私はぐっとその衝動をこらえた。

「溝端もそこにいるのか？二人でいるんだな！」

だが、その言葉に返事はなく、代わりに嗚咽が漏れてきた。何かあったには違いないだろう。とにかく、二人きりにさせておくわけにはいかなかった。

「今すぐ行くから！学校のどの辺りにいる？」

「……進路相談室から見える、大きな桜の木の下です」

「わかった」

電話を切って助手席へ放り投げる。自宅から学校までは車で飛ばせばすぐだ。私は路肩から急発進した。

学校へ着くと、職員用の駐車スペースには一台も車がなかった。この時間だ。当たり前である。私はラインを完全に無視して車を止め、進路相談室の窓へと走った。職員玄関から進路相談室までは外を走ればかなり近い。

進路相談室の窓の前まで来て、窓を背にしてまっすぐ真正面を向いた。そこから見えるのは、この学校が創立時からあるという桜の木だ。毎年三月から四月へ掛かる頃になると、一面桜色になるほど大きいものだ。今年も徐々に蕾が膨らみはじめていると聞いていた。

そこに、今夜は黒いシルエットが二つ並んでいる。一つはまっすぐ、まるで枝にぶら下がっているように見えた。そして、もう一つはその脇に、やはりまっすぐ、こちらは土から生えているかのように微動だにしていなかった。私の歩調は、意識していないのにゆっくりと、その二つのシルエットを確認するかのように歩いていく。

あと少しで二つのシルエットがはっきり見えるかという距離まで近づいたとき、雲の隙間から月の明かりが徐々に広がった。銀色のその光は、ゆっくりと、まるでそのときを楽しむかのようにシルエットへと光を与えていった。

枝にぶら下がっていたのは、太いロープで首をくくった溝端だった。

土から生えていたのは、それをぼんやりと見つめる茜だった。

私はその場に立ち尽くし、何をしてもいいものか悩んだ。妙に頭は冷静だった。溝端を下ろさなくてはと思ったが、その顔つきからすでに息がないことはわかったし、茜に何か声をかけなくてはと思ったが、その言葉だけが思いつかなかった。

どれくらいそうしていたのだろうか。最初に動いたのは茜だった。

「ねえ、藤川先生。私が殺したんだと思う？」

振り返った茜は私を見て、そう言った。唐突な質問に私はひどく狼狽した。挑戦的な彼女の瞳が

、私を射抜いている。

「何も、心配することはない」

声が震える。かろうじて保っている理性の糸が、頼りないものなのだとすぐに自覚する。しかし、茜のひどく寂しそうな悲しそうな微笑を見て、私は思わず彼女を抱きしめていた。

「大丈夫だ。私が何とかする」

「先生……」

茜が私の中で嗚咽を漏らす。彼女がどうして泣いているのか、私には分からなかった。溝端が死んで悲しいのか、自分のせいで死んだと思って責任を感じているのか、今の私にそれらを想像させるだけの理性はもう残っていない。

「とにかく、ここを早く離れるんだ」

私はコートで茜の体を包んでその場から離れようとした。だが、彼女は思いもよらぬ力で私を突き飛ばした。そして、目に涙をいっぱい溜めて、

「やっぱり、ダメ……」

と笑った。

「茜！」

「私、やっぱり先生とは一緒にいられない……」

彼女の右手がコートのポケットへと入る。そこで、私は彼女が別れたときと同じ服装であることに気がついた。それまで、気が動転していたのかまったく目に入っていなかった。私は、彼女の瞳だけを見つめていたのだと、やっと冷静になってきた頭で気がつく。

ポケットから、彼女の手が引き抜かれると、そこには月の光を浴びて光るものが握られていた。それが剃刀だと気がつくまでに、時間が掛かった。

「私、今日溝端君が別れてくれなかったら、これで彼のことを殺そうと思ったんです。でも、ここにきたら彼、こうやって首をくくって、もし俺と別れるならここで目の前で死んでやるって。だから私……」

くしゃっと茜の表情が曇る。それまでの笑顔は消え去り、涙が頬を伝って首筋へと落ちていく。

「私、先生と一緒にいたいって。先生も私のこと受け入れてくれたからって。これ以上溝端君とは付き合えないって……」

溝端の足元を見やると、小さな踏み台が転がっていた。激昂した溝端が台の上から茜に掴みかかろうとする。それをかわそうとして逃げる茜をなおも追いかけようとして、怒りのあまり首にかかった縄を忘れ、踏み台を蹴る溝端。四肢をばたつかせ、やがてその動きが止まる。見たわけでもないのに、そんな光景がありありと浮かぶ。

「先生……私、本当に少しの間だったけど、先生と一緒に過ごすことができて嬉しかったです……」

その言葉が、私の耳に引っかかった。それは、彼女と言葉を交わすのが最後ののような、妙な錯覚を呼び起こす。

「茜……？」

私が一歩踏み出すと、茜は持っていた剃刀を自分の首筋に当てた。

「やめろっ！」

「先生、私……先生のこと、愛していました」

「茜っ！」

月の明かりが、斜め横に切断される。生暖かい何かが私の顔や、首筋や、手に降りかかる。

それはほんの一瞬の出来事。

だが、私の世界を奪うには、十分すぎる時間だった。

「茜……」

崩れるように倒れた茜。彼女の全てを、赤いものが綺麗に染め上げていた。あの強さを秘めた瞳は閉じられ、長い睫を赤い飛沫が雫になって縁取っている。抱き上げると暖かく、だがぐにやりと不自然に体をしな寄せた。顔の汚れを拭いてやると、口元が微笑んでいるような気がして、そしてまた「先生、嘘よ」と目を開けてくれるような気がして、そう思ったら初めて何かがこみ上げてきて、私は彼女の体を抱きしめながら泣いていた。みっともないほど嗚咽を洩らしながら泣いて泣いて、私の世界は完全に崩壊した。

そして最後の最後まで、茜が何故私の腕の中で泣いたのか、それだけを考えていた。

あれから、もう数年の時間が過ぎていた。

私は茜の幻想に取り付かれたまま、もう何年もこの場所にいる。真実は今でも分からない。茜の口から語られた出来事が、真実だったのかですら。

進路相談室から眺める景色は、数年たった今でも変わらないのに。

茜へのこの、背徳感の色濃く漂う、しかし確実な劣情は変わらないのに。

「ねえ、知ってる？あの桜の話」

「あ、七不思議ってやつ？」

「えー、なにそれ？」

「あのね、学校内の桜は大体四月の始めくらいに咲くのに、あの桜だけは一本だけ早く咲くんだって。三月の終わりくらいに」

「そんなの七不思議でもなんでもないじゃん」

「でも、その桜ってね、一番早く咲くのに一番遅く散るんだって。しかも、夜になると桜の木の下に、うちの学校と同じ制服を着た女の子が立って『先生、ただいま』って言うんだって！」

まことしやかに囁かれる噂。

茜に逢えるのならば、たとえそんな幻想でもいい。

今年も桜の季節がやってくる。

「茜、また……今年も帰っておいで」

私はそっと、内ポケットにジャケットの外から手を当てた。

「先生、今日からこれは、先生が持っていて」

銀色に光る小さな指輪。

「私と先生の、絆の証」

「先生、愛してる……」

毎年、どの桜よりもいち早く咲き誇り、そしてまるで春が去るのを惜しむように、遅くまで狂い咲く美しい大樹。

『先生、ただいま』

「茜……」

私の想いもまた、狂い咲く。

(完)

闇の章 第二話 電子的恋愛事情

カズが入室しました

カズ) 久しぶり！

mimi1021) あ、カズくんだ～☆久しぶり

カズ) mimiさん、久しぶりwあれ、mimiさんだけ？

mimi1021) うん。

mimi1021) 私ももう少し待って出ようと思ってた。

カズ) そっか。

カズ) でも、mimiさんだけで俺ちょっと嬉しいかも。

mimi1021) えー！

mimi1021) なんてw私も嬉しいよ♪

深夜一時。パソコンの前で船木一道はにやけた頬を一度叩いた。細い文字入力画面に「今にやけた（笑）」と打ち込んでエンターキーを押す。

カズ) 今にやけた（笑）

白い背景色に青い文字で先ほど叩き込んだ文字が出る。するとすぐに、

mimi1021) 恥ずかしいじゃん！やめてよー

と、今度は薄いピンク色の文字で返信されてきた。また頬がにやけてきていることに、この時点で一道は気がついていない。

一道がこの「劇的恋愛ネットワーク」通称「劇ネット」にハマり出したのは二ヶ月ほど前だ。友人である細井道孝のこの言葉がきっかけだった。

「劇ネットの女はすぐヤレるぜ」

彼女いない歴五年。その彼女とも結局三ヶ月もしないうちに別れた一道としては、どうしても今年は夏までに彼女ゲットを目論んでいた。なぜなら、細井を含む友人グループの中で彼女がいないのは自分だけだったのである。

「ヤレたってそっから先だろ！」

「バカ！ヤっちまってからのほうがことが運びやすいだろ。それまで行くのにドキドキ青春するような歳じゃねーよ！」

今年で二六になる一道は、そう言われてそれもそうかと納得するような男だった。

「でも、劇ネットって何だよ」

「出会い系サイト」

それは分かる、という突っ込みを返す前に、

「表は『ドラマのような劇的恋愛をお助けします！』みたいな陳腐なこと書いてあるけどさ、けっこうリアルに裏サイトっぽいことしてるぜ、してるやつは。登録して顔写真とかプロフィール公表してさ、気に入ったらチャット申し込みすんだけど。すげーすげー！」

何がすごいのか一道には想像がつかなかったが、とにかく出会いの場としては最適なんだと細井に言われて、その日のうちに一道は会員登録を行っていた。顔写真は任意で、別に自分の顔じゃなくても似顔絵を載せたり、ペットの写真などでも良かった。プロフィールは本名とメールアドレス、年齢、性別、住所（県と市までだが）は必須項目で、ネット上で使用する名前は本名かハンドルネームかを選ぶことができる。ハンドルネームで迷ったが、無難に「カズ」と日ごろから使われているニックネームにすることにした。それらを入力すると、今度は好みの女性のタイプを尋ねられる。これを登録しておく、自分のプロフィールなどを管理するためのマイページというところに、登録されている女性の中から好みのタイプをランダムに表示してくれるという。一道は肌の項目は「色白」、髪の色は「黒もしくは落ち着いた茶色」、ヘアスタイルは「セミロング」と「ロング」、体系は「細め」とチェックし、備考欄には「自分よりも年上か同年」と打ち込んだ。あとは仕事や趣味、好きな食べ物、休みの日の過ごし方など無難な質問に任意で答え、最後に「この情報で登録しますか？」という質問に「はい」を選択してOKをクリックした。画面に「登録が完了しました。ご登録いただいたメールにご登録内容を送信しました」と表示されて、案外簡単に一道の「劇ネット」体験は始まった。

仕事から帰ってきて、まずはパソコンを開く。劇ネットにアクセスして、登録時に決めたIDとパスワードを入力し、マイページにログオンする。マイページにはアクセスカウンタ機能や、メッセージボード、ツイッター機能もあったりして、男女問わず交流することもできた。数日経つと、フォローしたりされたりという交流ができ、やがてメッセージボードに「今度チャット申し込みさせてください」とか「チャットできる時間教えてください」という女性からのメッセージも残るようになってきた。だが、まだチャット機能に関しては使う気がしなかった。一道自身が、どうもこうしたバーチャルな場所で出会いを求めること自体に抵抗を持っていたからである。かといって、登録した以上何かチャンスを掴まなければという想いにも駆られていて、ある日経験者である細井に相談すると、

「じゃあ、個人ページの一対一チャットじゃなくてさ、交流チャット見てみれば？」と勧められた。

マイページには個人チャットとして一対一の入室枠二名までしか入室できないチャットルームが常設されている。入室の際には、そのチャットルームを管理するマイページの管理者が決めた入室パスワードが必要だ。入出の時間を決め、メッセージボードなどを使ってパスワードのやりとりをし、時間になったら二人で入室してチャットを開始する。

しかし、そのチャットが苦手、もしくは複数の人間と交流したいという者向けには交流ページが設けられており、そこでは何室もチャットルームがあって好きなチャットルームに十人枠で入室することができる。もちろん、パスワードを設定することもできるので、オープンにしない場合は入室予定者にパスワードを伝えて交流チャットルームで複数の人間とチャットをすることもできる。部屋に名前をつけて、たとえば「二〇代限定」とか「男子禁制」、「恋バナしましょう」という簡単な入室者向けの紹介もできる。わからないのは「無言部屋」というやつで、一道も一度興味本位で入ってみたら本当にただひたすら無言で時が流れていたのに驚き、慌てて退出したことがあった。

一道が初めて入ったのは、無難な「二〇代限定、共学（笑）」という紹介がついたチャットルームだった。共学（笑）というのが男性、女性関係なく、という意味であることは察しがついた。入室すると、男五名、女三名という計八名が一道を出迎えた。チャット自体は初めてではなかったのに、挨拶してから話題に混じり、なんでもない仕事の話や趣味の話をして、その日は入室者一名とメッセージのやり取りをした。それは残念ながら男性だったのだが、劇ネット利用が長いので何かあったら相談に乗ります、という言葉をもらっていた。

それからいろいろなチャットルームに入室しては知り合いを増やし、メッセージでやりとりをする、という劇ネットのシステムには慣れ始めた。初心者です、と最初に言っておくと皆の対応もそれなりに優しくなる。これだけしている分には出会い系サイトというよりは普通の交流サイトのようなが、一道があるとき率直な感想をそう述べて、

「そこが劇ネットのいいトコなんだよ。まあ、怖いトコでもあるけどな」と細井は意味深に言った。

登録から一ヶ月。順調にフォロワーも増やし、メッセージボードにも知人からのメッセージが残るようになり、チャットルームの出入りにもなれてきた頃。それは、一道の頭からすっかり「女性との出会いを求める」ということが抜けてきた頃だった。チャットルームでちょっとした出会いがあった。

チャットルームの説明は「真剣に出会いを求める人向け」と書かれていた。真剣、という言葉がネット上ではあまり意味を持たないの是一道もよくわかっている。冷やかすつもりはなかったが、真剣さを求めたわけでもなく、流れで入室してみた。中には男二人、女二人の計四名が話していた。ちょうど男女一対一で割れる数。要はネット合コンみたいなもんか、と一道が退出しかけると、

ピロキ) あ、退出しようとしたでしょ
と男を示す青い色で名前が書かれたピロキが話しかけてきた。

聡子) 別にいいよー。人数かんげーないから
続けて女を示すピンク色の名前の聡子がそう書き込んできた。一瞬迷ったが、一道は、

カズ) 合コンとかじゃなくて？
と打ち込むと、

Slilm7) 全然！
と今度は青い文字。

カズ) じゃーお邪魔します！
ピロキ) いらっしゃーい！

Slilm7) ども。
聡子) こんばんはー

そして最後に……

mimi1021) こんばんは。よろしく
と、mimi1021と名乗る女との出会いがあった。

カズ) mimiさんってさー

mimi1021) ??

カズ) いつもさー

mimi1021) うん

カズ) 最初だけさー

mimi1021) 最初？

カズ) チャット一人だよねー

mimi1021) あー…

mimi1021) 早すぎかな、私（泣

カズ) いや、あの、

mimi1021) うん？

カズ) もしよかったらさあ

mimi1021) なーに？

一道はそこで一瞬迷う。果たしてこれから自分が打ち込むことが、相手に拒否されないか少し不安だった。その間、チャットルームの画面には、

mimi1021) どうしたの？

mimi1021) え、まさかの寝落ち??！（笑

とmimi1021から言葉が並んだ。声に出して一度唸ってから、

カズ) 寝落ちって！（笑

と答える。

mimi1021) あ、起きてた！

冗談めかす彼女の言葉に苦笑いする。

カズ) どーせ二人だからさ、この部屋

mimi1021) うん

カズ) ここ抜けてさ

カズ) 俺のチャットルーム来ませんか

一道は画面を睨んだまま指を止めた。心臓がバクバクと信じられない音を立てている。いつもならすぐに返事を返してくるはずのmimi11021からの打ち込みがまだこない。

だめか、と思いかけた瞬間。

mimi1021) そうしょっか

夢のような返信。一道は自分では気がついていなかったが真っ赤な顔をして、

カズ) じゃあ、パスワードはmimiさんで

と打ち込むと、

mimi1021) 私のナンバー？

と返信されてくる。パスワードは数字でしか設定できないせいだ。

カズ) そう。IDの

mimi1021) あ、わかったwすぐ用意できる？

カズ) うん、もう、今すぐ！

mimi1021) じゃあカズくんのページ開いて待ってる

カズ) じゃあ、待ってて！すぐだから

慌ててチャットルームを退出し、自分のマイページに戻って個人チャットルームを使用可能にする。パスワードの入力を要求され、記入ボックスに「1021」と打ち込んでOKを押した。

カズが入室しました

ポン、という電子音の後、個人用チャットルームの画面がアップになる。少しすると、また同じような電子音がして、

mimi1021が入室しました

と表示された。

カズ) いらっしゃい（笑

mimi1021) お邪魔しますw

カズ) 初めて個人チャット使う

mimi1021) え、本当？

カズ) うん、マジで

mimi1021) じゃあ私が初だ♪

カズ) mimiさんが初☆

mimi1021) 嬉しい！ありがと。。。

画面上のやり取りに代わり映えはない。ただ、枠が十人から二人だけになっただけで、一道は不思議と安心していた。誰にも邪魔されない、という安心感だ。それを自覚して、mimi1021と二人だけで会話ができることが純粹に嬉しかった。

mimi1021) 初ならちょっと頑張ったでしょ？

カズ) 何を？

mimi1021) 私のこと誘うの

図星で一道は慌てた。

カズ) そんなことないよ

mimi1021) あ、誤字！慌ててる？

カズ) そんなことないよ

mimi1021) 打ち直してもダメ～

そんな何気ないやり取りが一道は楽しかった。他のIDの持ち主とは少し距離感があるのに、mimi1021とはその感じがまったくない。最初に話したときも、自然に会話になじんでいた。気が合うのかな、と一道は一人呟いてから、妙に照れて頬を両手でごしごしとこすった。

カズ) そういえば

mimi1021) ??

カズ) mimiさんのその数字ってなに？

mimi1021) 1021のこと？

カズ) 生年月日かなー？なんて

mimi1021) 当たり。

mimi1021) あ、生年月日非公開にしてたっけ

カズ) うん。

mimi1021) 設定ミス！

mimi1021) 年齢非公開にするときかな

カズ) 年齢は出てたよ？

mimi1021) えー！！プロフィールなんてチェックしてないし！

大慌てする顔文字が出て、思わず一道は吹き出した。

mimi1021) mimiさん可愛い

思わず書き込んだ自分の発言に一瞬固まる。思わず、ではあったが、その言葉の重要性に一瞬で気がついた一道はどうしようかと焦った。

mimi1021) もー、チョー焦った。やめてよー（泣

mimi1021)のその返事にほっとして、

カズ) mimiさんでもそんなことあるんだねー

と打ち込んだ。

mimi1021、女性、年齢は二七歳、仕事はOA機器を扱う会社の事務。好みのタイプは年下で、猫顔よりは犬顔の動物好きが好き。mimi1021のプロフィールページから知っている、一道の知る情報はそれだけだ。だが、チャットを繰り返すうちに、少しとぼけた感じで、砕けた口調が可愛い女性だということが分かった。

カズ) 犬顔ってどんな顔？

mimi1021) びっくりした！

mimi1021) 突然？

話の腰を折って突然の質問にmimi1021も驚いた様子だった。だが、プロフィールの話が出てきたので、一道は思わず一番引っかかっていた疑問を尋ねてみた。

カズ) プロフィールの好みのタイプ

カズ) 犬顔って書いてあったでしょ

mimi1021) あー、あれ！

mimi1021) 見てたんだ（笑

カズ) 俺って、犬顔かなーって

mimi1021) えーとね

mimi1021) 俳優さんだと

カズ) うん

しばらく時間が空いて、出てきた回答が、

mimi1021) キムタクみたいな？

と返ってきた。

カズ) えー！チョー面食いじゃん！

mimi1021) 違うよー！キムタクが好きなんじゃないもん！

カズ) ホントー？じゃあ好きな俳優さんでいる？

mimi1021) 西島秀俊とか

カズ) この前の連ドラ出てた！犬顔？

mimi1021) うん、犬顔

カズ) じゃー、向井理

mimi1021) 犬顔かなー

カズ) キムタク出たから中居正広

mimi1021) 猫！

カズ) チョー即答（笑

mimi1021) 竹之内豊は犬で、反町隆は猫

カズ) あ、だんだん分かってきた

カズ) 藤木直人は犬でしょ

mimi1021) 当たり！

カズ) 松潤は猫だね

mimi1021) ニノくんもね

カズ) 相葉が犬

mimi1021) どっちかといえばそーかなー

mimi1021) ていうか、なにこの会話（笑

カズ) mimiさんの好みのタイプの話

mimi1021) 犬顔限定じゃん！

mimi1021の発言の後で、二人でほぼ同時に同じ大爆笑の顔文字が表示されて、一道は思わず一人で声に出して笑っていた。そして一道は、会ったことはおろか、見たこともないmimi1021の、やはり自分と同じように画面の前で笑う姿を勝手に想像していた。この時間だからパジャマだろうか。少し長めの茶色の髪は邪魔にならないように結われていて、色白のきめ細かい肌が見える。よりリアルに想像して、やはり照れて一道は首を振った。

mimi1021) 分かってきたところで

mimi1021) カズくんは犬顔？猫顔？

カズ) 俺〜は多分猫

mimi1021) えー！じゃあダメじゃん

カズ) あ、うそうそ！犬！

mimi1021) なんて☆カズくんなら猫顔でもいいよ

時々、こうしてmimi1021から少し一道を意識したような発言が出る。その度、一道は彼女に期待していいものか悩む。年上の女性だから、手玉に取るのも手の内か、と半信半疑でその言葉を受け止めてしまう。

カズ) mimiさんはどっち？

そして、半信半疑の言葉を打ち消すための新しい質問で場を埋める。一道の常套手段になってきていた。

mimi1021) 私は猫顔

カズ) ネコ目？

mimi1021) 目つきキツイみたい（汗

カズ) 俺可愛いと思う

カズ) 猫っぽい顔の女の人って

一道はあえて、可愛いという単語を使ってみた。心臓は相変わらずバクバクと音をたてている。

mimi1021) ありがと☆

チャットルームの空白が突然埋まらなくなる。どういう話題でつないだものかお互い悩んでいるのが分かる。一道が何か書かなくては、と焦り始めた時だった。

mimi1021) 私、カズくんに会ってみたいな
突然のそれに一道が固まる。そして、次の瞬間、
「劇ネットの女はすぐヤレるぜ」
という細井の言葉を思い出して慌てて顔をこすった。

カズ) 俺に？
確認してみる。一道の心臓が、耳の奥までせり上がって音を立てている。

mimi1021) うん
確かな手ごたえ。だが、それは一瞬にして否定される。一道の中で天使と悪魔が戦っている。天使が「これはきっと冗談よ」と囁けば、悪魔が「いいじゃん、いっちゃえよ」と耳をつつく。軍配は。

カズ) 俺もmimiさんに会いたい
悪魔に上がった。

mimi1021) 本当に？
カズ) いや、むしろ俺が本当に？だよ
mimi1021) じゃあ、アドの交換しよう☆
カズ) うん
mimi1021) メッセージで私のアド送るね
カズ) じゃあすぐ返信するよ

少しの間があき、

mimi1021) 今送ったよ☆
とチャットルームに書き込まれた。一道がマイページをチェックすると、メッセージに受信メッセージが一件とあった。開くと、タイトルには「mimi1021です」、内容には「ケータイのメアドです」と書かれた数行後に、携帯電話のメールアドレスが書かれていた。一道は自分の携帯電話のメール新規作成画面を開き、同じように自分の名前と「よろしくおねがいします」と書いて送信した。

カズ) 俺も今送った！
mimi1021) 来たー♪
カズ) 打ち間違ってたなくてよかった（汗
mimi1021) 大丈夫☆大丈夫♪
mimi1021) 名前、カズくん登録していい？
カズ) いいよ～。mimiさんはミミさんでいい？
mimi1021) うん、いいよ☆
mimi1021) カズくん、次の日曜日は予定ある？

いよいよネット上から現実世界へとシフトすると思うと、一道の心はそれまでの不安よりも期待のほうを上回っていた。

カズ) 全然！なにも！

mimi1021) 即答！（笑

mimi1021) じゃあ、日曜日に会おうか☆

カズ) いいね！どこで会う？

mimi1021) 渋谷とかどう？

カズ) OK！ハチ公前でいい？

mimi1021) うん。時間はどうしようか

カズ) そーだなー

カズ) 十一時頃でどう？昼飯食べませんか

mimi1021) いいね☆

カズ) あ、写メ交換する？待ち合わせ分かんないからさ

すると、mimi1021からの返信が止まった。何かあったのかと待っていると、

mimi1021) 写メはやめない？

mimi1021) 会ってからの楽しみ♪

と返信されてきた。それもそうか、と一道は少しにやける。

カズ) 当日着ていく服装とかで判断する？

mimi1021) じゃあ、前日にメールで報告はどう？？

カズ) OK！楽しみw

mimi1021) 私も！

カズ) じゃあ、今夜はこれくらいにしておきますか

mimi1021) そうだね。

mimi1021) じゃあおやすみ☆

カズ) おやすみ♪また今度

mimi1021) 次は土曜日かな？

そのあとウィンクする顔文字が表示され、

mimi1021が退出しました

と表示された。一道は少し名残惜しい気もしたが、チャットルームを閉じた。だが、次の瞬間、携帯電話が鳴ったので慌てて開いてみると、

『今夜はありがとう。土曜日またメールしようね』

とmimi1021からのメールが着信していた。一道は、

『俺のほうこそありがとう。またメールします』

と少し悩んでからメールを返信した。チャットとそれほど変わらない内容なのだが、メールのやりとりとなると緊張していた。

『楽しみにしてます。おやすみ☆』

『おやすみなさい』

一道は一人、部屋で小躍りしてから、ふと考えて細井にメールした。内容は劇ネットで知り合った女と会うことになった！という簡単なものだったが、一人で喜びをかみしめるよりも「よかったな！」と言ってくれる人間に報告したかった。というよりも、それは自分の幸せを誰かに自慢

したいという欲求だったわけだが。だが、その日細井からの返信はなかった。

翌日、一道が帰宅している最中に細井からメールの着信があった。昨夜のメールから全く連絡がなかったのでどうしたのかと思っていたところで、内容を見ると、

『やったな！うまく決めろよ！』

と書かれていた。簡単なものだが一道の心は一気に昨夜に戻り、

『細井のおかげだよ！ありがとう』

と返信する。

『いつ会うんだ？』

『日曜日。渋谷で待ち合わせなんだよ』

『王道だな。お前、失敗すんなよ』

『するかよ！あ、渋谷でうまいメシ屋ある？昼飯食えるところ』

『なんだよ！しょっぱなから俺頼りかよ！』

だが細井はそう言いながらも、駅からほど近いイタリアンレストランの場所を教えてくれた。ランチメニューが女性向けに量は少なめだが味はよく、デートの昼食で失敗したことがない、という細井の自信の店ということで一道は一人盛りあがった。

『成功したらメールくれよ』

『成功しなくてもメールするよ』

『なんだそりゃ。そうだ、一つ良いこと教えておいてやるよ。成功しなかったときのことを考えてだ……』

一道はそのあとの文面をたどりながら、少しだけそれを心のどこかに引掛けておこうと決めた。

土曜日、仕事が終わってすぐ携帯電話をチェックするとmimi1021からのメールが入っていた。タイトルは「明日の服装が決まったよ」との内容。写真が添付されており、ノルディック柄の白い帽子が写っていた。

『明日はこの帽子をかぶっていきます。白いから分かりやすいでしょ？』

一道はまだ服装を決めかねており、その返事は家に帰宅してからにしようと会社を出た。

帰宅してから小一時間、とにかく着られる服の全てを取り出して一道は悩みに悩み、最終的に黒いコートと、赤と黒のギンガムチェックのシャツ、白いタンクトップ、ジーンズと無難な格好を選んだ。そして、メールでコートとチェックのシャツを取った写真をmimi1021に送信した。

『返事遅くなってごめん。明日はこの服装で行きます。分かりづらいかな？』

食事をしようとキッチンに入ると、すぐにメールが返信されてきた。

『大丈夫。すぐ分かると思うよ。明日楽しみにしてるね』

『俺も楽しみ。また明日』

簡単にメールを返信してから、鍋で湯を沸かしながら明日のプランを練った。

翌日、一道は少し早めに家を出た。渋谷へは電車で五分ほどだ。服装は昨日の通り、スニーカーを履いて電車に乗り込む。携帯電話を取り出して、もう一度昨日のメールの写真を見た。帽子を食い入るように見つめて頭に叩き込んでから、携帯電話をジーンズのポケットに戻した。朝からメールは一件もない。

渋谷で電車を降りハチ公前に行くと、一道と同じように待ち合わせをしているような人間がたむろしている。携帯電話を片手に周囲をうかがうもの、時計を気にしているもの、男女様々だがほとんどは若く見える。一道は一度携帯電話を取り出して時間を見た。約束の十一時十分前。にわかにそぞろ立つ心。きよろきよろとあたりを見回すが、ノルディック柄の白いニット帽をかぶった女は一人もない。ときどき白い帽子をかぶった女が通りすがすが、大体は一道を無視してどこかへと消えていった。五分前ならばまだ来ていない可能性もある。周りを気にしながら、時間も気にしつつハチ公前に立つ。

しばらくして、とんとんと肩を叩く者があった。振り返ると、白い帽子をかぶった女がそこに立っていた。顔の真ん中に上向きの大きな鼻がある。目は細く、そばかすとニキビの目立つ白い肌。厚ぼったい唇は真っ赤に口紅が塗りたくられている。下膨れのおかめみたいだ、と一道は思った。

「はい？」

愛想笑いを浮かべて首をかしげる。一道は、道か何かを尋ねられるのかと思ったのだ。もう一度よく見ると、真新しい白いジャケットには値札が付いている。中年女性の着るような花柄のワンピースで太った体を覆い、太く短い脚を無理やりブーツに突っ込んでいた。一道は心の中でそっと、ブーツがかわいそう、と呟いた。むしろ、よくその足が入るブーツがあったものだと感心するべきか、とも思った。

「こんにちは」

突然あいさつされ、

「こんにちは」

と返すが先が続かない。

「あの、どうされたんですか？」

しばらく悩んでから一道が、やはり愛想笑いのまま尋ねると、

「私mimiです」

と女は帽子を指さした。ゆっくりと視線を帽子にやってから、一道は愕然とした。

ノルディック柄の白いニット帽。

「カズくん、でしょ？」

目の前の彼女が携帯電話をかざす。それがスローモーションに見えて、一道は一瞬、自分がドラマの中にいるのではないかと、ひどく非現実的な想像を膨らませた。そんな一道の目に飛び込んできたのは、自分が昨夜送信したメールに添付した写真とまったく同じもの。今現在身に着けている服装と、まったく同じ服が写っている。

一瞬、他人の振りをしようと考えたが、彼女はそれを一気に封じてしまった。

「mimiはニックネームで、本名は三つの石に、英語の英が美しいで三石英美。ミで始まってミで終わるから、ミミなの」

一道の中で漢字が変換され、と同時に描いていたmimi1021像が全て崩れた。少し長めの茶色い髪は、黒くて毛先の開いたぼさぼさのロングヘアーに変換され、猫目の少しセクシーな二重の目は、細いおかめのような一重のたれ目に。すっと通った綺麗な鼻筋は団子鼻に。薄くて形のいい唇は、そこだけが別の生き物のような赤いナメクジ二匹に。白いきめ細やかな肌はそばかすとにきび跡だらけの肌に。細身で長身な、だけど少し肉感的な体系は……。そこまで変換されて、一道は眩暈を覚えた。

「カズくんの本名は？」

目の前の英美はご機嫌な様子だった。身長は一道よりも頭一つ分くらい低い。上目遣いで英美がそう尋ねたことに、一道は吐き気を覚える。

「ふ、フナキカズミチ……」

やっとのことで出た自分のフルネームを、言ってしまったあとで後悔した。

「カズミチくん。漢字はどう書くの？」

「スキーのオリンピック選手の船木に、漢数字の一、道路の道」

「ふうん。船木一道くん」

英美の赤いナメクジがぞろぞろと動いて名前を呼ぶと、一道の背筋に悪寒が走った。今すぐ帰りたい、と心の中のもう一人の一道が涙声で叫ぶ。

「今日はよろしくね、カズくん」

心の叫びが危うく喉までせりあがってくるのを一道は抑えて愛想笑いを浮かべた。その表情が見れたものではないことを、本人は気づいていない。

昼食はスペイン坂の途中にあるイタリアンレストランのランチメニューにした。細井が教えてくれたところだ。本当は英美を連れて入ることを一道は心の中で拒んでいた。だが、他の店を知らなかったし、何より相手が英美とはいえ昼食の店選びに戸惑っている姿を見せたくなかったのだ。しかし、一道は深く深く後悔していた。隣に英美を連れてここまで来るときもひどく恥ずかしかったのだ。そして、信じたくなかった。俺が、こんな女と一緒に歩いているなんて、と。

「ん！おいしい！」

恐ろしいほどの自己嫌悪に襲われて、食欲もほとんど湧かない一道の横で英美は運ばれてくる料理いちいちにそう声を上げる。男か女か判別つかない中性的な低い声はひどく掠れていて、やけに耳に引っかかる。

「ここ、すごくおいしいね。こんなにおいしいイタリアン食べたの初めて！」

オリーブオイルがたっぷりかかったトマトとモッツアレラチーズのカプレーゼを口に運んでから英美がにっこりと微笑む。真っ赤な唇はオリーブオイルでグロスを塗ったようにぬらぬらと光っている。それが、ぬめりをまとった赤いナメクジに見えて一道は思わずフォークを皿に置いていた。ナポリタンは皿に半分以上残っている。

「カズくんて小食なんだね。サラダもパスタも全然食べてないし」

「あ、まあ……ね」

「だからそんなに細いんだあ。いいなあ。羨ましい！」

一道の気のない返事をよそに、英美はカルボナーラを次々平らげていく。スプーンが用意されているが、それは使わないようだ。フォークにぐるぐると白いソースがたっぷりと絡みついたパスタを一口分よりも大きく巻きつけ、口元でぐいぐいと中へ押し込み咀嚼する。顎が動くたびに顔も一緒に縦に激しく動くのは何故なのだろう、顎だけを動かして食べられないものだろうか、と一道は不快に思った。ただ、それが可愛いと思っているのだろうか、英美はちらと一道の様子を窺い、彼が自分を見ていると分かるとより激しく顔を縦に振りながらカルボナーラを口の中で解体した。前髪が、それにあわせて前後するのでなんだかよくわからない生き物のように見えた。

最後に運ばれてきたデザートは店オリジナルのデザートピッツァというものだった。薄くて丸いピザ生地には桃のコンポートと砂糖漬けにしたオリーブの薄切りが綺麗に盛り付けられ、その中央にはバニラアイス、上からははちみつとシナモンが降りかかっている。甘党の一道は一瞬状況を忘れて思わず目を奪われた。が、運んできた店員が衝撃の一言を残して場を去る。

「こちらはお二人で切り分けてどうぞ」

かちや、と置かれた専用のカッターと二枚の小皿。二人で取り分ける、という一言がこんなに残酷に響いたことはないだろう。今、この目の前にいる、この女と、一枚のピザを分け合うなんて。一道が哑然として皿を見つめていると、

「私に取り分けてあげるね！」

と英美が率先してカッターを取った。そのとき、開いたワンピースの袖がふわりとバニラアイスを掠めたのが見えた。

「あっ！」

思わず一道が叫ぶと、英美はすでに小皿の一枚を片手にピッツァの切り分け作業に入っていた。英美はその小さな叫びにウィンクして、

「大丈夫、こういうの得意なんだから」

とまた作業に戻る。何が得意か！と叫びたくなかったが、

「いやっ！そうじゃなくて！」

危うくスルーされそうになったことに一道は慌てて声を上げていた。英美の長い髪が皿をかすめる。

「どうしたの？」

「俺……甘いもの、苦手で……」

苦渋の決断だった。

「一人で、食べられる？」

その言葉に、英美がぱっと顔を輝かせる。

「え、いいの？本当に？」

口調は遠慮気味にそう言っていたが、顔はもういっぱい喜びで溢れていた。

「いいよ……」

「ありがとう！じゃあ、いただきまーす！」

名残惜しい気持ちをぐっところえて、器用に巻いたピザ生地を一口で口に放り込む英美の姿を恨

めしげに見つめる。口の端に付着したバニラアイスが白くて汚らしい。甘い桃とシナモンの香り、バニラアイスがほんのり溶けて、はちみつと混ざり合いながら生地にしみこみはじめている。絶対にうまい、うまいに決まってる……。一道は心の中一人ごちる。

「んーっ！おいひい！」

言葉にならぬ英美の叫び。今日この瞬間以上、英美の、いや人間の言葉が憎く感じたことはない。だがどうしても、あの袖の触れたバニラアイスを口に運ぶなど考えることすらできなかった。

「ねえ、本当に食べないの？」

拗ねたように英美が言う。その手にはしっかりと小皿とフォークが握られている。口の端のバニラアイスがまだ残っている。一道の視線が英美に移るや否や、英美は待ってましたとばかりにフォークを握った右手の薬指で、口の端のバニラアイスをちょんと拭った。分厚い唇をつんと尖らせて。一道は、苛つく自分の心を何とか静めようと努力した。

「いいよ、全部食べて」

極力口調には気をつけているのだが、やはり突っぱねたような口調になってしまう。思わず英美の様子を窺うが、彼女は別に気にした風でもなく、

「そう？じゃあ食べちゃお」

と可愛らしく言って、また小皿にこんもりと盛り始めた。こんな相手にでも、自分の態度が相手を傷つけていないか気にしてしまう自分に自己嫌悪を抱きつつ、周囲の目がやけに気になっていた。

レストランを出てからはすぐにカラオケボックスに行った。英美はそのあと買い物に行きたかったらしいが、一道がカラオケに行こうというと、

「二人きりになれるしね」

とやけに嬉しそうだった。

だが、これは一道の、正確には細井の作戦だった。それは、あの日メールで細井から提案されたものだった。

『もし相手が良くなかったときは、飯のあとにカラオケに行け。多分あそこのメシ屋なら一時間もありや食い終わるだろ。十一時に約束して、歩いて大体一五分、飯食って十二時ちょっとだな。あのメシ屋から歩いてすぐのところにカラオケがあるから、そこに誘うんだ。時間は一時間にしておけよ』

今のところ、その作戦は成功している。時間の指定も大体細井が言ったものと合致していた。そして、一時間で受付をしてそろそろ予定時刻が回る頃だ。気分よく歌う英美の横で、一道は携帯電話を取り出し時間を見た。

「あっ」

時間を確認すると同時に携帯電話に着信があった。それは細井からのものだった。英美もそれに気がついたのか、歌うのをやめて図々しく携帯電話を覗いて来た。

「電話？」

「あ、うん。友達。ちょっと出てきていいかな」

「うん、いいよ。待ってる」

彼女は明らかに気分を害したようだがそういった。もうすっかり彼女気分らしいが、一道はそれは気にせずさっさと席を立った。その電話の鳴動が、天の助けのように思えた。

「もしもーし。どーだー？今どこだー？あそこのデザートピッツァ最高だったろ！」

能天気な細井の声は、今や一道を救うたった一つの蜘蛛の糸だ。

「細井、助けてくれ！」

「なんだよ、急に。なんかあったのか」

緊迫した一道の声に細井の声が緊張する。が、事情を説明すると細井は電話の向こうでひとしきり笑い転げ、

「それが出会い系サイトの怖いところ！お前も悪いわ、それ」

と息も絶え絶えに言った。

「なんだよ！だって……」

「それさー、きっと女の作戦だぜ。ゼッテーいつもすっぽかされてたんだって。だから、先回りして相手のこと見つけて、違えますって言われる前に証拠突き出してさあ行きましょ、ってやつだよ」

細井はまだおかしいのか語尾を笑いで濁らせながらそういった。だが、言われたほうの一道はショックで言葉がなかった。

「しょっぱなから怖い女に捕まったな、お前」

「……」

無言のままの一道をさすがに心配したのか、

「さあ、仕方ね一な。俺の作戦を実行しよう！」

と声高に言った。

「電話、終わったの？」

部屋に戻るなり英美が上目遣いでちょっと睨んできた。だが、その顔もあと少しまでだと言うと我慢できた。一道はとびきりの愛想笑いを浮かべ、

「終わったんだけどさ、ちょっと急用できちゃって」

と頭をかいて見せた。

「えー、ひどいよ」

「ごめん、でも断れなくてさ……」

「じゃあこのあとは？」

「すぐにさっきの電話のやつのところに行かなくちゃいけないくて……」

「じゃあ私も一緒に行っていく？」

そんな英美の言葉に、一道は一瞬緊張する。だが、

「ごめん、ちょっと深刻でさ……」

と言葉を濁す。これは細井の入れ知恵だ。

「深刻って、どんな？」

「それは……」

そのとき、抜群のタイミングのよさでまた一道の携帯電話が鳴る。

「もしもし？」

「おい、早く来てくれよ！どうしても落ち着かなくてさ！」

「いや、それがさ……」

「おいおい、そっちももめてんじゃ洒落になんねえよ！ちょっと相手に代われよ！俺が説明するから！」

電話の受信音量は最大。これも細井の作戦の一部だ。相手にわざと聞こえるように音量を上げ、細井は大声で叫ぶ。

「あのさ、ちょっと代わってくれって」

「え？」

英美の顔に明らかに戸惑いの色が浮かぶ。だが、渋々と言った様子で英美は携帯電話を取って耳に当てた。あとで携帯電話を拭かなくては、と一道は心の中で思った。

「もしもし……？」

「ああ、一緒にいる人？ちょっと一道早くこっちに寄越してくんね一かな。じゃないとマジでやばいんだ」

「でも」

「でもじゃなくて！こっちは女がヒステリー起こして殺されかかってんだよ！」

「だけどカズくんが行かなくなったら別に……」

「あー、もう！俺が浮気してるってヒステリー起こしてんだよ！その時間一緒にいたやつ連れて来いってうるさいんだ！一道が来れば一発で話し済むんだよ！分かったろ！」

怒号でさすがに彼女も焦ったのか、英美は怖い顔をして携帯電話を一道に返した。

「ごめん、ちょっと外で話してくるわ。びっくりさせてごめん」

そう言って部屋を出ようとする、

「うん……」

とそれまでの怒りの様子はどこへ行ったのか、英美はおとなしく頷いた。だが、その様子がやけにしおらしく、嘘を突き通すことに少し罪の意識を感じた。

「もしもし？うまくいったか？」

「ああ、納得したみたいだった」

「迫真の演技だろ？」

一道の危機的状況は確かに先ほどの細井の名演技でうまく切り抜けられそうだ。

「ありがとう」

「貸しな、貸し。まー、俺も経験したからな、似たようなことはさ」

にやり、と笑う細井を想像して一道はため息をついた。そして、先ほどのしおらしい英美を思い出し、やはり罪悪感がじわじわと湧き出てきた。

「しかし、やけに食い下がってきやがったな。あーゆー女は怖いぜ、マジで。たいがい嫉妬深くてよ、妙な疑いかけられるんだ。別れるのも難しいし。もう二度と会わないほうが良いぜ、きつと」

細井に改めて言われて、短い時間の英美の行動や言動を思い出す。そして思い出せば思い出すほど、罪悪感よりもおぞましいほどの自己嫌悪がまた蘇ってきた。

「そうするよ。なんだかんだお前の忠告は全部当たってるし……」

「じゃあ、あとはうまいこと言ってさっさと帰れよ。あ、そうだな。まっすぐ帰らずに柏木のトコ寄って帰れ」

柏木とは細井と一道の共通の友人だった。だが、柏木は今仕事の都合で海外に出張中だったはずだ。それを言うと、

「郵便受けの裏に鍵があるから、それをできるだけ自然に取って、開けて勝手に入っちゃえ。あいつ出る前に言ってたろ。鍵はあるから自由に入ってもいいって」

たしかに、柏木はそれまで違う友人と部屋をシェアしていたのだが、その友人が彼女と同棲をするから、と出て行ってしまっただけで、一道ら友人に部屋を自由に使っていていいといていたのだ。

「でも何で柏木のうちなんかに……」

「バカだなー。お前、今俺んところに来る予定になってんだろ？そのまま家帰ったら嘘だってモロバレだろ」

「あ、そうか。って、え？」

それはある可能性を示唆していることに、一道はやっと気がついた。その可能性とは……。

「それって、別れたあとにつけられるかもしれないってことかよ！」

愕然としてそう叫んだ一道に、

「まあ、そこまでは分からないけどな。ただ、さっきの電話の感じじゃ粘着質だぜ。降りる駅ぐらいまではチェックするかもしれないぞ」

と細井はひどく涼やかに言った。

「とにかく、俺の直感にしたがって悪いことはないと思うぜ」

さきほど、一道自身がそう言ったばかりだ。

「分かった……念のためそうする」

電話を切ってから、自分のしたことに今更ながら後悔した。

カラオケ店の精算を済ませ、英美とはそこで別れることにした。一道は早く彼女から解放されたかった。

「じゃあ、終わったらあとでメールちょうだい」

すっかり彼女のような物言いに吐き気を覚えたが、

「できたらするよ」

と返し、じゃあ急ぐから、と足早に駅に向かった。振り向くことは怖くてできなかった。

山手線に乗り、渋谷を出てから新大久保で降りて駅前の雑踏を抜けるとすぐに柏木のアパートが見えてくる。向かう足取りは一道自身が思うよりも早かった。すぐ後ろに彼女がいるような錯覚を覚えているためだろう。アパートの二階、角部屋に行くと表札には「柏木」と出ている。玄関横に備え付けの郵便受けの下を探ると、細井の言ったとおり、ガムテープのような感触と、そこに鍵のような凹凸があるのを感じた。自然にそれを剥がすと、ガムテープに張り付いた鍵が手のひらに残った。

「おい、大丈夫か……？」

鍵をゆっくりと回しながら、一緒にドアノブをまわす。かちゃりと鍵のあく感触がして、ドアノブが半分くらい回ったところでドアがゆっくりと開いた。一道は振り返らないように、そして周囲を見回さないようにして部屋に入った。

一道の心に、やっと生きた心地が戻った。

その日の夜、柏木の家でしばらく過ごしてから一道が自宅に戻ると、タイミングを見計らったように英美からメールが来た。

『あのあと大丈夫だったの？メールがないので心配です』

そのメールで、昼間の出来事が一気に蘇る。一道は携帯電話をベッドに放り投げ、自分は座卓とセットで買った座椅子に座り込んだ。一人暮らしをして二年目。給与もそれなりでそこそこ暮らしている。この部屋に恋人を呼んだら……と想像して心を躍らせたこともある。それを思い出して、一道は落胆でいっぱいになった。

しばらく呆けていると、突然携帯電話が鳴り出して一道は大げさなほど驚いた。恐る恐る携帯電話を開くと、そこには細井の文字。

「もしー？もう家ついたか？」

「ああ、ついた」

「無事帰れてよかったな」

皮肉なのか本心なのか、どちらにせよ一道に今の細井の声は安心を抱かせるものだった。あの窮地を救ってくれたのは細井なのだ。皮肉としても感謝しなくてはならない。

「細井のおかげだよ、ありがとう」

「おいおい、皮肉で言ったんだぜ」

やっぱりそうか、と一道は一人ごちたが出てきたのは苦笑だった。

「ま、とにかくお前がなんとかならいいや！早く次の女捜せよ」

「いや、もう劇ネットはやめるよ。今回でもう懲りた」

「マジかよ？だってまだ一回目だろ。たまたま初めからはずれただけで、当たりの女は五万というぜ？」

「はずれの女も五万だよ、どーせ」

一道が口を尖らせると、電話の向こうで「しょーがね一なー」という細井の声がした。

「そんなお前にいい話」

「なんだよ、もう出会い系はやめてくれよ」

「違う違う！明日合コンあんだよ。有名女子大卒OL五人」

「マジで！」

「メンツ足りねーんだ。お前出れる？というか、出られること前提で電話したんだけどさ」

「行く行く！」

「じゃあ明日の……」

約束を取り付けて電話を切ると、すでに一道の心から英美のことは消えていた。携帯電話が鳴動していることにも気がつかなかった。

「ユカリちゃんて趣味ダイビングでしょ？俺も前にやってたんだよ」

翌日の合コンはかなりレベルの高いものだった。有名女子大卒のOLで、品はあるがそこそこ合コン慣れしている女が集まっていた。男は一道と細井共通の大学時代の友人たちで合わせて五人。すでに終盤へ差し掛かり、五人の男たちは誰狙いかをすでに定め、二次会への打ち合わせ済みである。女性陣もそこそこ男性陣を気に入ったらしく、二次会へもつれ込むのは容易そうだった。一道は最初から本城ユカリというブティック店の店長を狙っていた。

「えー！そうなんですか！じゃあ今度茅ヶ崎あたりいきませんか？」

「でも結構前だからなあ。大学時代だし」

「茅ヶ崎なら私の行ってるお店があるし、そこでちょっとした講習も受けられるんですよ。経験者向きとか、初心者向きとか。それに一回出たらすぐに思い出しますよ！」

セミロングの茶色い髪の毛先にはゆるいパーマが掛かっており、肌の色は白くきめ細かい。それをうまく引き立てるような化粧。顔立ちも上品そうで、そこそこに整っている。スタイルは抜群だ。細井と狙いがかぶったが、昨日の一件もあってかもめずに譲ってもらえた。

「そうかな？」

「きっと！だから一緒に行きませんか？なかなか友達とはスケジュールが合わなくて」

友達とは、のところでユカリは一道の耳元でそっと囁いた。それがやけに新密度を増したような気がして一道の心が躍る。

「じゃあ、絶対あわせるから今度行こうよ。お店紹介して」

「やったあ。じゃあ、早速メアド交換しませんか」

自然な流れで携帯電話のメールアドレスと番号を交換する。そのときふと、一道の脳裏に昨日深夜に気がついたメールの着信が浮かんた。

『どうして返事くれないの？まだもめてるの？』

背筋を這う悪寒。一瞬で青くなると、

「船木さん？大丈夫ですか？」

とユカリがそっと覗き込んできた。その手が、一道の腿に載せられている。

「あ、ごめん……」

「すごく青い顔してますよ。飲みすぎました？」

すっと差し出されたのは水だった。こういう気配りがユカリはうまい。さきほども、でしゃばるでもなくそれぞれに料理を取り分けてさりげなく配っていたのはユカリだ。

「ありがとう。ちょっと飲みすぎたかな」

そんなことはないのだが、ごまかして差し出された水を取ると、

「もし辛かったら……」

とユカリが顔を寄せてきた。口につけかけていたコップを少し離すと、

「このあと抜けちゃいませんか、二人で」

と、先ほどのように耳元でユカリが囁いた。手に持ったコップを落としそうになる。慌てて振り返ると、上目遣いのユカリが微笑んでいた。

男女合わせて八名はすっかり出来上がり、二次会のカラオケには大はしゃぎで消えていった。
ある程度冷静だった細井は、

「あとはうまくやれよ」

と一道に囁いて二次会へ行った。明日仕事が早いから、というユカリを一道が送る、という形で二次会を断り、二人は飲みなおすためにバーへと入った。そこは、ユカリの知っている店だという。

「こんばんは」

中年で、よく整った上品な髭をたっぷり蓄えた男性バーテンダーもユカリの姿を見つけると、すぐにそう言って自分の真正面を指してどうぞと言った。バーテンダーの真正面はよほどの常連ではないと座れないのではなかったか、と一道はあるテレビ番組で言っていたことを思い出す。バーにくるのは初めてだったのでやや緊張気味だった。

「こんばんは。ごめんなさい、今日は彼と一緒になの。隅にするわ」

ユカリの後ろに立っていたので、バーテンダーからは一道の姿が見えなかったらしい。ユカリがそう言って一道の姿を見せると、バーテンダーはにっこり微笑んで、

「そうでしたか。ではどうぞ」

とカウンターの一番奥まった席を指した。だがそれよりも、ユカリが自分のことを「彼」と言ったことに一道は喜びを感じていた。

「今夜は何を？」

「彼にはノンアルコールでさっぱりめを。私はソルティドッグにするわ」

「かしこまりました」

他に客は見当たらない。二人で貸しきっているかのようだ。バーテンダーが魔法のように飲み物をステアし始めるのを、一道は夢心地で見つめていた。男性の太い指で繊細に氷をくるくると回す姿は見ていて気持ちがいい。

「もしかして、こういうところは初めてでしたか？」

先ほどの合コン会場とはまったく違う雰囲気をかもし出すユカリが微笑んで言う。

「あ、うん。実は……」

「ここは私のお気に入りの場所なんです。マスターもいい人だし。よかったらこれからも一緒にきませんか」

それはこれからに期待してもいい、ということだ。先ほどのダイビングの約束よりも、それはぐっと新密度を増す。

「私、もっと船木さんのこと、知りたいな」

頬杖をついてちょっと首をかしげたユカリに魅了されていた。

それから一ヶ月。その日、一道はユカリと一緒に茅ヶ崎でダイビング講習を受けていた。経験者向けの講習で、ユカリは講習を受けずとも十分上級者だったのだが、一道に合わせて一緒に講習を受けてくれたのだ。ユカリの行きつけのショップに行くと、

「ユカリちゃんの彼氏ならおまけしてあげるよ」

と講習代もだいぶ安く済んだ。

一道とユカリが交際してから二週間ほどが経過していた。

「気持ちいい！」

一通り講習が終わり、船にあがって一道は思わず叫んでいた。冬も近いので海水はだいぶ冷たいが、それでも久しぶりにもぐって見る海の中の景色はとても綺麗だった。

「さすが船木さん！講習受けなくても大丈夫だったんじゃない？」

一緒にあがってきたユカリも気持ちよさそうだった。海中のコミュニケーションを取り合いながら、よりユカリとの距離も縮まった気がする。

「いや、感覚は残ってるけど覚えてないもんだなーって」

「そうですか？結構すいすいっちゃってびっくり！」

ユカリはノーメイクの素肌に水滴をつけてにっこりと笑った。俺の目に狂いはなかった、と一道は改めて思う。

「今日はこの辺にしておきましょう。慣れてないと案外きますよ」

講師の男性がそう言って、一道の肩の辺りを叩く。

「そうですね。明日が怖いです」

と一道が返すとユカリが笑った。

ショップに戻ってひとしきり今日のダイビングの感想を話し、ショップの店長という男とも親しくなったところで、

「このあたりにおいしいシーフードのお店があるんですよ。お昼に行きませんか？」

というユカリの提案で昼食となった。ショップから歩いてすぐのところに、個人営業のレストラン。ダイビングをしたあとは必ずここで昼食か夕食をとるのだという。

「こんにちはー」

ユカリが入って声をかけると、中から中年の女性が出てきて二人を出迎えた。

「あら、ユカリちゃん久しぶり！なあに、彼氏？」

「うん。うふふ」

ユカリが嬉しそうに、しかし恥ずかしそうに笑うのを見て一道も少し照れる。中年の女性はそんな二人を見て笑顔を浮かべ、

「じゃあこっちどうぞ」

と奥まったボックス席に通してくれた。

「今日はシーフードサラダをオリジナルドレッシングで……」

さすがに慣れた様子でユカリが料理を頼んでいく。中年女性も大体当たりがついているのか、メ

モも取らずにそれを聞き終え、

「はい、じゃあちょっと待っててね」

と言って奥へと消えていった。中でユカリの注文したものを叫ぶ声が聞こえる。厨房に調理人がいるのだろう。

「あっ、ごめんなさい！いつもの調子で頼んじゃって……」

「いいよ、俺シーフード全般好きだし」

「でしょう？だから絶対ここに連れてきたかったの！とってもおいしいから」

たった二週間の付き合いの中で、ユカリが自分の好みを把握していることに一道は顔をほころばせていた。

先ほどの中年女性が戻ってきてレモン水を出してくれた。それを飲みながら今日のダイビングのことや、バーのマスターのことで盛り上がる。渋い中年男性だったが、あれでダイビングをするという話が出たときは一道も驚いた。

「結構いろんなところに行ってるみたい。この前話を聞いたら、宮古島まで行ってきたんだって」

「へえ！いいなあ、宮古島。綺麗だろうね」

「私も一回は行ってみたいな」

「俺も。いつか二人で行こうか」

「本当に？嬉しい！」

ぱっとユカリの目が輝く。それが嬉しくて、

「うん。絶対行こうね」

と一道も返すと、彼女はとても楽しそうに笑った。

次々と料理が運ばれてくると、ユカリはそれを小皿に一つ一つ一道に取り分けてくれた。シーフードサラダに、ホタテの貝柱とえびのグラタン、パエリア、あさりたっぷりの海鮮スープ。おまけでスモークサーモンやホタテ、いくらなどが乗ったカナッペも出てきた。品数は多かったが案外するすると進み、気づいたときにはほとんどを完食していた。ユカリもスタイルはいいが、なかなかの胃袋を持っているのだ。

「あー、おいしかった！ここ、すごくいいね」

デザートには近海で取れた塩を使った塩バニラアイスが出てきた。それを味わいながら言うと、ユカリは自分のことのように喜んだ。

「シーフード好きで甘党の船木さんにはぴったりでしょ？」

「よく甘党だってわかったね」

「食事したときにデザートを見て喜んでいたでしょう。それに、メインディッシュを食べるときとデザートの時の顔が全然違うもの」

一道はこの一ヶ月の間に食事や例のバーに行ったことを思い出す。たしかに、デザート付きのコースメニューを頼んで一緒に食べたことがあった。そのときの表情を細かく見ていたということだ。ユカリが自分のことをみていてくれているということを再確認し、一道は喜びで心の中で小躍りした。

「このあとはどうしようか」
一道の提案に、
「少し海でも歩きましょうか」
とユカリが微笑む。

レストランを出て、先ほどのショップの前を通り過ぎて海岸へ降りる。風は冷たいが、サーフィンやウィンドサーフィンを楽しむ者の姿もあった。一道とユカリのように、寄り添って歩くカップルの姿もある。有名な海岸だけに寒空といえども人の数も多い。

「こうやって船木さんと海にこれるなんて嬉しいです」
ユカリが横を歩きながら言った。それに一道が振り返ると、ユカリも一道を見上げていた。
「最初は社交辞令かと思ったから」
「合コンのとき？」

「そう」
そのとき、ずっとユカリから腕を絡めてきた。一道の右腕に暖かいユカリの腕が密着する。湿った冷たい海風の中、そこだけが暖かい。

「船木さん、大好き」
ユカリの声が海風に乗る。一道はここ数年感じたことのないときめきを感じていた。と同時に、細井に心から感謝した。

「ユカリ……」
彼女に視線を移し、抱きしめようとした瞬間。

一道の背筋に這う湿った悪寒。総毛立つその気配にユカリの背後へゆっくり視線をやると。
二人の遠く遠く後ろに、ぽつんと立ち尽くす人影。膝の辺りが黒くゆらゆらと揺れているのは着ているワンピースの裾が海風にたなびいているせいだ。黒い髪が、風にふわりふわりとなびく。

「船木さん？」
ユカリの声と、
「カズ君……」

英美の声が耳の奥に蘇った。

自宅に戻ってからも一道の心は落ち着かなかった。あの海岸で見かけた姿は、絶対に英美だった。初めて渋谷で会った日と同じワンピースを着た英美。この一ヶ月、ユカリとの交際に夢中で、英美のことなどすっかり忘れ去っていたのだ。メールにも返信していないし、劇ネットにもまったく顔を出していない。なのに何故、自分たちがいた場所が彼女に分かったのか。

「粘着質だぜ」
細井の言葉が蘇る。もしかしたら、すでに自宅の場所も把握されているのかもしれないと思うと落ち着かず、慌ててあきっぱなしだったカーテンを閉めた。

忘れ去っていたのも無理はない。初めて英美と会った日を最後に、英美からのメールも途絶えていたのだ。一道はそれに少し安堵さえ覚えていた。向こうもきっと、あれが最後だと思ってメールをしてこないのだと。

だから、砂浜で英美を見たときの恐怖は、一道にとって未知のものだった。黒い髪をたなびかせ、遠くからこちらを窺う姿は同じ人間とは思えぬ何かをまとっていた。だが、あれが本当に英美だったのかを確認しようとは思わなかった。メールをしたらどんなことになるか想像するのも恐ろしかった。

翌日、寝不足のまま出勤し、眠気に襲われるまま昼休みを迎えた。同僚に誘われて昼食をとり、帰ってきて一服していると携帯電話が鳴ったので取り出す。着信を見ると、ユカリからのメールだった。

『今夜またあのバーで待っています』
簡単な待ち合わせメール。一道は、
『分かった。じゃあ、今夜は七時頃に行くよ』
と返信した。ユカリからの返信はなかった。

約束の七時ちょうど、一道はバーへと入っていた。マスターがいつもの笑顔で、
「こんばんは」
と出迎えてくれる。
「こんばんは」
一道もそれに返事を返して店内をぐるりと見回す。が、ユカリの姿はまだなかった。
「待ち合わせですか？」
マスターのそれに、
「ええ。彼女はまだ？」
と尋ねるが、
「見えていませんね」
という思った通りの言葉が返ってきただけだった。
「そうですか……」
「どうされますか？」
「あ、じゃあ、ジントニックを」
「かしこまりました」

しばらくするとジントニックと小皿に盛られたミックスナッツが置かれた。一人でいることがま
ずなかったのも、少し落ち着かない。

だが、ジントニックを飲み終わる頃には昨夜の寝不足がたたってか眠気に襲われ始めた。バー
のカウンターで居眠りなど恥ずかしく、一道は何とか睡魔と闘いながらミックスナッツを口に
運ぶ。かり、と口の中でナッツが弾けると睡魔が一瞬だけ飛ぶような気がした。

約束から一時間ほどが経過した頃。突然一道のスーツのポケットの中で携帯電話が鳴った。静
かな店内に不似合いな電子音が激しく響き渡り、一瞬にして睡魔が吹き飛ぶ。マスターは、
「大丈夫ですよ」

と笑ってくれたが、周囲の人間の嫌な視線を感じた。慌てて外に出て携帯電話を開くと、ユカリ
からの着信だった。何かあったのだろうかと思ふ気持ちで通話ボタンを押す。

「もしもし？どうかした？」
だが、電話の向こうは無言のままだった。
「もしもし？ユカリ？」

一道が声をかけても、やはり無言のまま。嫌な汗がこめかみを流れる。

「ユカリ！もしもし！」

すると、くすくすと笑い声が聞こえてきた。

「ユカリ……心配かけ」

「カ・ズ・くん」

頭のとっぺんから足先までが冷水を浴びたように冷たくなっていく。この、正体不明な声。それは……

「み、み、みみさん……？」

「うふふ。久しぶり。メールもくれないし、どうしてるのかと思ったら、こんな女と会ってるなんて」

それはそばにユカリがいることを意味している。それがどんな状況であるかを、一道は意外と冷静に判断していた。

「ユカリは……？」

「ユカリだって！私のことはさんづけのくせに。一体何様のつもりなの？」

刺激しないほうがいい、という判断が頭をよぎる。

「ミミさん、あの、一体どういう状態なのか教えてくれないか」

比較的落ち着いた声で一道が言うと、電話の向こうでくすくすと笑う声が聞こえた。一道の脳裏に蘇る英美の姿。黒髪を震わせながら、二重顎を震わせながら、笑う姿を想像してぞっとする。

「そんなの、カズくんが一番知ってるんじゃない？あ、そうだ。写メ、送ってあげようか」

「写メ？」

「無様だよー。この女のこんな姿、もう見れないと思うし」

そんな声の後、向こうでカシャ、という電子音がした。おそらく、自分の携帯電話で写真を撮ったのだろう。

「電話切ったら見てみてね」

そう言って、電話が切れた。

「もしもし！」

電話が切れた後も携帯電話を耳にあてたままにしていると、耳でけたたましいメールの着信音がして一道は慌てて内容を確認した。件名、内容は空白の英美からのメール。添付されていたのは……

「ユカリ……！」

そこに映っていたのは、ぐるぐるに両手を縛られ、口にガムテープを貼られ、殴られたかしたのかパンパンに腫れあがったユカリの顔だった。一道の喉の奥から呻き声が上がる。

そして、その写真を確認したのを見計らったようにまたユカリの番号から着信があった。

「もしもし？なかなか面白い写メだったでしょ？」

「お前、ユカリになんてこと！」

「だって誰が悪いのよ！」

思わぬ英美の剣幕に押され、一道は一瞬で言葉を失った。次に聞こえてきたのは、なんとも不快

感を呼び起こす英美の猫撫で声だった。

「ねえ、カズくん。この女のこと助けたいでしょ？」

ざらざらと鼓膜に引っかかる声が一道に吐き気を呼び起こす。だが、かろうじて、

「ユカリに何をしたんだ」

と尋ねると、

「写メ見たでしょ？」

と、さも当然のように言っただけだ。

「私の質問に答えてくれない？」

「ユカリを早く解放しろ！」

「だから！助けたけりゃ私の話聞けって言ってんだよ！」

激昂した英美が髪を振り乱しながら携帯電話に叫ぶのを想像して、一道は恐怖に慄いた。無言でいると、

「あ、ごめんね……でも、カズ君が怒鳴ったりするからだよ？」

とまた例の甘い声で囁くように言った。

「カズくん、この女のこと、助けてあげる。その代わり、また私と一緒にデートしよう。ううん、今度はゆっくり一日、二人だけで過ごしたいな」

思い出される一ヶ月前の悲劇。胃の収縮が一道を襲う。ひどい眩暈と混乱。

「カズくんのおうちで一緒に過ごそうよ。そうしたら私、パスタを作ってあげるから。カズくんのおうち、とっても片付いてて綺麗でびっくりしちゃった。もしかして、この女が片付けにきたりしてないよね？」

「……！」

英美は、一道の部屋に侵入したことをさらりと告白した。そして、その言い方で現在地がどこかも分かった。分かった瞬間、一道は通話を切って走り出していた。タクシーを捕まえ、自宅へと急ぐ。座っていることが、何より自分のことを苛立たせた。

自宅前に到着すると、一道はタクシーの運転手に料金以上の紙幣を掴み取って渡し、転がるようにして外へ出た。エレベーターを待つ余裕はなかった。急いで階段を駆け上がる。自宅のドアは、やはり鍵は掛かっていなかった。乱暴に開け放つと、そこには英美が立って笑っていた。

「おかえり、カズくん」

その一言が無性に腹立たしく、

「どけ！」

と一括して英美の体を押しのけ、廊下を走ってリビングへ入る。そこにユカリの姿はない。寝室にも姿はなく、キッチンを覗き、最後に浴室へ入って一道は総毛立った。自由を奪われぐったりとしたユカリが、冷たい浴室のタイルの床に放りだされていた。写真では分からなかったが、足首もガムテープで頑丈に縛られていた。

「ユカリ！」

慌てて一道は駆け寄り、口のガムテープを外してやると、かろうじて息をしていることが分かってやっと生きた心地が戻ってきた。

と同時に、英美に対する怒りが爆発した。

ユカリを抱き起こしたまま振り返ると、そこにはすでに英美が立っていた。顔には薄気味悪い笑みを浮かべている。あの日と同じ黒いワンピースに白いジャケット。少し違うのは、その白いジャケットに、ユカリのものと思しき血痕がいくつかできていること。そして、値札が取れていること。

「ねえ、カズくん。パスタ作ったんだけど」

「ふざけるな！何をしたんだ、ユカリに！」

浴室なので声がひどく反響する。それが静まった頃、英美はにやりと、一道を見て笑った。

「見て分かるでしょ？お仕置きしたのよ」

「……お仕置き？」

「私のカズくんに手を出すなんて。なんて不埒な女」

英美の顔面が醜く歪む。それでなくとも整っていない顔がぐしゃりと潰れたような表情になった。そして、分厚い唇から白いものが吐き出され、それがユカリの顔に当たった。

「クソ女」

一道の怒りが限界に達した。ユカリを抱きかかえ、そして立ちふさがる英美を思い切り蹴り飛ばした。分厚い肉の弾力を感じたが、次の瞬間には英美は廊下まで吹き飛んでしりもちをついていた。

「痛いっ！」

英美が腹部を押さえてのた打ち回る。黒い髪の毛が別の生き物のようにそれに合わせて蠕動し、ばたばたと嫌な騒音がした。だが、一道はそんな英美に向かって、先ほど彼女がユカリにしたように唾を吐きかけた。絶叫していた英美の動きが止まる。

「お前みたいなブス！最初から相手になんかしてねーんだよ！彼女面しやがって、気持ち悪い！」

もう一度、廊下の隅へ追いやるように蹴飛ばして、ユカリを寝室へと運ぶ。手首と足首の拘束を解いてやると、うっすらと目を開けた。腫れ上がった紫色の瞼が痛々しく、一道はユカリを抱きしめ、

「ごめん……」

と謝った。胸の辺りでごそごとと何かが動くのに気がついて体を離すと、

「……ふな、きさん……怪我は……？」

とユカリが長い指で一道の顎に触れた。

「俺は大丈夫。それより、君が……」

一道の言葉にユカリは切れた唇を持ち上げて、

「良かった……」

と言ってまた目を閉じた。どうやら痛むのか、目を開けているのは辛いようだった。

「ユカリ……」

一道の泣きそうな声に、ユカリがまたゆっくりと、細く目を開ける。だが、ユカリの視線は一道を通り越して、一道の背後に彷徨い、大きく見開かれた。

「船木さん、後ろ……！」

弱弱しいその声に一道が振り返る。背後には、鍋を抱えた英美が立っていた。

「離れなさいよ」

鍋が一気にひっくり返ると、一道の背中一面に熱さとも痛みとも取れぬ激しい衝撃が走った。思わずユカリをかばうように抱きかかえるが、彼女は腕の中で、

「熱い！」

と小さく叫んだ。

「うおおおっ！」

獣のような咆哮を上げて一道が床に転がる。ユカリは自力で動くこともままならず、一道に下ろされた仰向けのまま、転げまわる一道を横目で見ていた。床に広がる熱湯と茹で上がったパスタ。床を這いずる一道と、無抵抗のユカリを冷たい目で見下ろしている英美。

「おいしい？」

英美が一道に向けて鍋を投げつける。ごつ、という嫌な音がして鍋は一道に当たって跳ね返り、壁にぶつかって小さな穴を開けた。

「そうだ、ソースはね、カズくんはきっとミートソースがいいと思って」

のた打ち回る一道を置いて、英美が一度キッチンに戻り、次にミートソースの入っている深目のフライパンを持ってきた。そして、

「どうかな？ミートソースもちゃんと作ったんだよ」

とそれをひっくり返した。一道の頭に赤いものが一気に落ちると、頭皮に、耳に、額に、そして顔全体に、うなじに、熱いものがねっとりと絡みつきながら落ちてきた。一道の喉から絶叫が迸る。それを見て、英美は嬉しそうに微笑んだ。ユカリの腫れ上がった目からは涙がこぼれている。

「ねえ、カズ君。だあいすきだよ」

ユカリが小さく「やめて」と呟いた。だが、一道と英美にそれは聞こえない。一道の耳は、先ほどのやけどで耳の奥では金属音のようなものが響いていた。

「愛してるよ、カズくん。これで私だけのものだね」

英美の手にはいつの間にか握られた包丁が、ぎらぎらと光り輝いていた。

Slim7が入室しました

Slim7) お待たせ

聡子) 遅いよー！罰金十万円

Slim7) うわ、ビミョー！妙にリアル！

聡子) マジ遅いし！

聡子) もう三十分も待ってたんですけどー

Slim7) ごめんごめん

聡子) 仕方ないなー

Slim7) じゃあ報告します！

聡子) あ、話題そらした！

Slim7) じゃあ報告なしでもいいの？

聡子) それはダメ！

Slim7) 分かってて言う俺（笑

聡子) ヒドスギ！（笑

Slim7) いやー、マジうまくいったわ。ドッキリ！

聡子) マジで！

Slim7) うん！まんまと（笑

聡子) あはは！

聡子) びっくりしたんじゃないの、カズ君（笑

Slim7) そりゃもう。

Slim7) 電話するなり「助けて！」だぜ（爆

聡子) チョーウケる！

Slim7) 聡子の友達マジサンキューだよ

聡子) いい子でしょー（笑

Slim7) てかそんなにひどいのかよ？

聡子) うん！

Slim7) うん！て（汗

聡子) だって小学生の時からだもん

聡子) ぱっと見マジヤバだよ

Slim7) ま、その友達のおかげで大成功！

Slim7) 名前も拝借しちゃってゴメンネゴメンネー！（笑

聡子) mimi1021がSlim7と同じ人なんて思いつきもしないだろーね（笑

Slim7) 友達大変だったんじゃないの？

聡子) 別にー

聡子) チャット記録見せて、この人になりきってっていったら喜んでた

Slim7) ヤバくね？それ

聡子) まー、あいつは生まれつきヤバイ

Slim7) 怖！チョー怖！（笑

聡子) つか何でドツキリなんてやったの？

Slim7) うるせーんだよ。彼女ができねーのほしーの

Slim7) あいつ昔からウザい

聡子) 怖！チョー怖！（笑

Slim7) 結果いい女ゲットしやがったしよー

聡子) えー！なにそれ

Slim7) 合コン誘ったんだけどさー

聡子) 合コン？

Slim7) 引き立て役に呼んだら一番いい女とられた

聡子) 自業自得（笑

Slim7) マジありえねー

聡子) あ、そういえばさ

Slim7) ???

聡子) あのあとあの子からメール来て

Slim7) 友達？

聡子) そう。なんかね、付き合うことにしたって言ってたよ

Slim7) は？一道と？

聡子) そう！あいつの思い込みっばいけど

聡子) カッコよくて優しくかったんだって。カッコいいの？カズくん（笑

Slim7) 下の中

聡子) 中ってところが優しさ！

Slim7) マジかー！

聡子) まさかマジで付き合ってると思ってんのかな

Slim7) だとしたらヤバくね？

聡子) だーかーらー

聡子) あいつは生まれつきヤバイから（笑

Slim7) あの合コン女と一緒にいるとこ見たらどうなるかな

聡子) あいつチョー嫉妬深いからなー

聡子) 殺しにいくかもね

Slim7) マジか！

聡子) じょーだん（笑

Slim7) ヤベー！（笑

（完）

第三話 織姫の憂鬱

「なあ、いいだろ？俺たち付き合ってもう三ヶ月だぜ？」

長谷川仁志はそう言って、恋人の市川瑞穂に擦り寄った。だが、瑞穂は頑として譲らず、
「絶対、ダメ」

と一言で、ぱっさりと仁志の期待を斬った。そして、

「あんまり言うならもう会わないから」

と横を向いた。

「ごめん、ごめん。じゃあ、我慢するよ……」

仁志が拝むように両手を合わせて瑞穂に頭を下げると、彼女はその様子をちらりと目だけで振り返り、

「分かったならよし」

と仁志の頭を撫でた。

二人の悶着は、仁志が「瑞穂の家に行きたい」という発言から始まっていた。交際を始めて三ヶ月。瑞穂は年恰好の割に身持ちが固く、ようやくこの前キスに至ったばかりだ。仁志は三二歳、瑞穂は二八歳。三ヶ月前に友人のセッティングした合コンがきっかけで交際し始めた。瑞穂は真剣に結婚について考えているが、仁志は将来についてなど考えていなかった。むしろ結婚なんかして身を固めてしまってからには遊ぶものも遊べない、とまだまだ独身貴族として楽しむつもりだ。瑞穂はどうやらそこが気に入っているらしく「仁志がきちんと結婚を考えてくれるならそういうことをしてもいい」と言っていた。つまり、仁志が目的を果たすときには結婚を真面目に考えろ、という条件がつくことになる。今までの仁志なら嘘でもやけで「結婚考えるから！」と押し切ってしまったのだが、今回の瑞穂に対してだけはそれが出来なかった。なぜか瑞穂には仁志の押しが利かないのだ。それでも付き合い始めて二週間ほどぐらいまでは乗りと押し切りでいってしまえ、と仁志も散々仕掛けたのだが、瑞穂はその度「ダメ」「無理」「絶対イヤ」と譲らない。やがてこの攻防戦にも飽きた頃、彼女の方から「キスぐらいならいいよ」とのお許しがあり、仁志は再度闘争心を燃やした。結果的に言えば、瑞穂の作戦が効いたのだ。鉄壁のガードは時に崩し甲斐のある代物だが、仁志のような男には隙がなさ過ぎて崩せない。もしかして崩せるかもしれない部分を教えてやると、飽きてきた心にも熱が戻るというわけだ。

だが、仁志ははなから瑞穂から離れる気はなかった。なぜなら、彼女は以前モデルの仕事をしていたくらいスタイルもルックスも抜群なのだ。結婚さえ言い出さなければ、仁志にとって瑞穂は最高の女なのである。そして、ガードが固くなれば固くなるほど、どうしても彼女を自分のものだけにしたいという欲求は深まっていった。それも、瑞穂の作戦が功を奏しているという結果だ。

完全に瑞穂がイニシアチブを握る中で、それでも仁志は瑞穂との時間が好きだった。彼女とは趣味も一緒に、歳も離れすぎず近すぎず、仁志もそこそこ二枚目の顔立ちをしていたので似合いのカップルといえばそうだろう。瑞穂と並んでいる自分、が仁志は好きなのかもしれない。

「あ！そうだ。今週末ロードショーだよ。アンジーの最新映画」
デザートを食べ終えてから、思い出したように瑞穂が言った。二人の趣味は映画鑑賞なのだ。気になる最新映画は必ず見に行くようにしている。二人は映画の趣味も合い、三ヶ月の間、週末はほとんど映画館で映画を見て過ごしているくらいだ。

「あー！今週だったっけ？じゃあ『ビッグフォレスト』とカブるじゃん。」

「そうなんだよねー。レイトショーと昼で分けて観る？」

「じゃあ、アンジーをレイトで観るか」

「OK」

「そういえば『トワイライトゾーン』のシリーズが今年ロードショーって今朝やってたな」

「私キネマ旬報で見たよ。一のやつから十年後の設定だって」

映画の話でひとしきり盛り上がり、瑞穂を自宅のマンション前まで送った頃には十時を回っていた。明日は瑞穂の仕事の都合で会えなかったのも、また会える日をメールするというにことにした。

「またねのチューぐらい、いいだろ？」

仁志がそうねだと、

「もう！」

と言いつつも、軽く触れるぐらいのキスをしてから、

「バイバイ」

いつものように笑顔で手を振ってエントランスへと消えていった。

瑞穂を送ってから、仁志はコンビニに寄ってビールを二本とつまみを少し買い、帰路に着いた。思い出される瑞穂との会話、唇の感触、そして「絶対、イヤ」という頑固さをにじませる言葉。ここまで拒絶されると、自分の何がイヤなのかと不安になってくるものだ。疑心暗鬼に溺れつつ、仁志は夜道をゆっくりと歩いた。

仁志のアパートは、瑞穂の自宅の最寄り駅から五駅のところにある。悲しいかな、瑞穂が住むマンションの方が仁志のアパートよりも都心に近く、駅に近く、家賃が高い。しかし、仁志はまだそのことを瑞穂に打ち明けてはいなかった。さすがの仁志にも見栄はある。仕事はそこそこなしているし、給料も安くもなく高くもなく、そこそこの生活ぶりではあるが、引っ越すのは面倒なのだ。年季は入っているが大家の夫婦もよくしてくれるし、近所もそう煩いことを言う住人がいるわけではないので生活しやすいこともあった。こんな夜更けに仁志が音を鳴らして階段を上ろうが、たしなめに来る者はいなかった。

仁志の部屋は二階の角部屋だ。階段を上がりきって左手に伸びる通路の突き当たりまで進むと左側にドアがある。静まった通路。上下五部屋ずつで計十部屋。入っているのは大家の一家と中年夫婦、仁志とそう歳の変わらぬ男が一人、二人、あとは子供のいる若夫婦が二組だ。若夫婦といってもすでに四〇は過ぎているだろうか。このアパートにはほとんど若い女という存在がない。

だから、最初その女を見た瞬間、仁志はまるで、織姫が降り立ったのかと思った。

明るすぎない、しかし艶のある長い茶色の髪、綺麗な切れ長の瞳、すっと通った高い鼻、少し

厚めで肉感的な唇、白い肌、白い首。そして、なんと言ってもそのスタイル。引き締まるところは引き締まり、出るところはしっかりと出ている。仁志の目を奪ったのは、ぴったりと体にフィットするタンクトップで隠された豊満な胸だった。ジーンズ素材のホットパンツ、サマーブーツ。

ぱち、と彼女と目が合った。すかさず、仁志はにっこりと微笑んで見せた。すると、女の方も微笑んだ。通路のフェンスに寄りかかるようにしていた彼女がす、と姿勢を直す。恐らく隣人の客だろう、と仁志は察した。隣人は男の一人暮らしで、時々挨拶を交わすくらいではあるがなかなか二枚目であることは知っている。今まで女を連れ込んだところは見ることがないが、仁志には面識のない女がここで待っているということは隣人の客だと察するのが妥当だろう。

「こんばんは」

今度は女の方から声をかけてきた。姿勢を正すとずいぶん背の高いことが分かる。仁志はそこそこ標準身長だが、その仁志とあまり変わらない。ヒールのせいでもあるのだが、それでも女性にしてはだいぶ高いように思えた。瑞穂より少し大きいくらいだろうか。

「こんばんは」

仁志もそつなく挨拶を返す。見ると、彼女の首筋にはうっすらと汗が浮いていた。長い時間待っていたのだろうか。視線に気がついた彼女は、手に提げていたバッグからハンカチを取り出して首筋に当てた。

「暑いですね。ずっとここで？」

「ええ、いつ帰ってくるか分からなかったから」

彼女のそれに、仁志は少し違和感を覚えた。だが、何に引っかかりを覚えたのかはわからなかった。

「あの、間違っていたらごめんなさい。あなた、長谷川仁志……くん？」

不測の事態に仁志は一瞬言葉を吞んだ。うまくいったら「暑いから中で待ちませんか」と誘い込もうと考えていた言葉がそれは見事に弾け飛ぶ。

「えっと……」

かろうじて出た言葉も何の意味も成していない。動揺する仁志を見て彼女は苦笑した。

「やっぱり覚えてないよね。私、有希。第一高校の三年B組」

「第一高校……？あ、同級生！」

仁志が叫ぶ声に、有希は嬉しそうに笑った。

買ってきたビールをグラスにあけて有希に渡すと、

「ありがとう」

と鈴の音を転がすような心地よい声が響いた。ぐちゃぐちゃの部屋の中に、急に花が咲いたような奇妙な感覚。有希はぼうっとする仁志の前で、

「あー、おいしい！」

と一口含んだビールを喜んでいた。

片付けていない部屋に上げ、ビールを振舞ったものの仁志は未だ有希のことを思い出せないでいた。というのは、高校時代、女子生徒の名前は特に気になる生徒以外苗字でしか記憶していな

いせいだった。これだけの美人を気にしていないわけがない、と心の隅で思いつつ、しかし高校を卒業してからはだいぶ経っているので顔と名前が一致しない者も当然いるだろう。それに、今でも特に親しくしている数人の友人以外は、ほとんど顔も思い出せないくらいだ。下の名前で名乗られたところで、覚えているはずもない。

「……どうしよう」

居間でくつろぐ有希には聞こえない声で、仁志は思わず呟いていた。あの時、

「あー！有希！久しぶり」

と勢いで言っしまい、今更「苗字を教えて」など言えるわけもない。

「ねー、仁志くんもこっち来て一緒に飲もうよ」

「あー、うん！ちょっと待ってて」

仁志は慌てて、柿の種といかさきを皿に並べた。それを居間に運び、テーブルに並べる。

「ありがとう」

ビールを片手に有希が言うのを仁志は上から見ている。彼女の胸元が気になって仕方がない。もう一本のビールをグラスにあけると、

「久しぶりの再会に乾杯しよ」

と有希はグラスを掲げた。戸惑いつつも、

「じゃあ、乾杯」

と仁志もグラスを掲げ、二人のグラスが会って音を立てた。

「仁志君、変わんないね。高校の頃からカッコよかったもんね」

有希はそう言っいかさきをつまんだ。そして、

「学園祭のミスターー校グランプリ、準優勝でかなりしょげてたの思い出しちゃった」

と笑った。確かに、仁志は高校三年生の秋、学園祭のイベントの一環で毎年行われるミス、ミスターー校グランプリという大会で初めて上位五名に選出され、準優勝した。しかし、優勝した相手が一年生で、しかもモデルをしているということを聞いてかなり落ち込んだのだ。友人からはそんな相手に準優勝したんだから健闘した方だろ、と慰められたものの、そんな相手にかなうはずもなかったのだと自覚して恥ずかしい思いをしたものだ。それでも学校内での人気は急上昇し、三年生の後半にかけては人生最大のモテ期というものが到来した。仁志の女癖の悪さは、その辺りからも来ていると言えるだろう。

「あれから一度もモテ期はこないけどねえ」

その頃の事を思い出しつつ仁志が苦笑してビールを傾けると、

「そう？今でもカッコいいと思うよ、私」

有希はそう言っにっこりと微笑んだ。

楽しそうな彼女とはよそに、仁志は少し引っかかりを覚えていた。というのは、何故今更有希が自宅を訪ねてきたのか、真意を測りかねているからだった。今でも親しくしている友人でも、この住所を知っている人間は限られているし、その中には女の友人は含まれない。ということは、その親しい友人の中に、有希とも親しくしている者がいるということだ。脳裏にその友人たちの顔を並べ、過去的话题を思い出せる限り思い出してみるが、有希の話題など上ったかどうかすら分からない。

「ねえ、有希って……さ」

恐る恐るそう口に出してみるが、どう尋ねていいのかわからない。黙り込んだ仁志に首を傾げた有希は、

「あ」

と思い出したように言って苦笑した。

「もしかして、私がどうやってここを知ったのか、ってこと？」

図星だった仁志は一瞬ぽかんとしたが、

「そ、そうそう！」

と慌てて首を縦に振った。

「いや、俺ここのことあんま教えてないからさ。誰に聞いたのかなー、って」

取り繕うように言ったがあまりの早口に自分でも驚く。だが、仁志のそんな挙動不審ぶりに気がついているのかいないのか、

「井上くんに聞いたの。実は私もこの辺り住んでるんだけど、時々仁志くんっぽい人を見かけるから、もしかして、と思って確認したら大当たり」

と楽しそうにピースサインを作って笑った。

「ああ、井上かあ……」

仁志の脳裏に並んでいた友人たちの顔が一気に一つに絞られる。確かに井上とは高校時代から仲がよく、未だに連絡を取り合って時々飲みに行くほどだ。自宅にも何度か遊びに来たことがある。彼から有希のことを聞いたことはなかったが、井上は学生時代クラスのムードメーカー。誰とも親しく話せる彼ならばないことはないだろう。

「ねえ、有希って同窓会は来てた？」

クラス全体の仲が良かったせいか、同窓会はたびたび行われていた。節目となる二〇歳、二五歳、三〇歳。今まで三回の同窓会が催されている。仁志はその三回とも参加しているのだが、そこで有希の姿を見なかったのはおろか、話題にすら上っていなかった気がしていた。

「ううん、私同窓会は行ってないの。というか、やってたの？」

「え？」

「同窓会があったこと自体初めて知ったんだけど……」

そこで仁志は考える。参加していない同級生はたくさんいた。二〇歳の頃の同窓会では留学生としてアメリカやイタリアに行っているとか、二五歳のときは仕事で来られない者も多くいた。だが、はなから同窓会の話が持ちかけられない同級生などいたのだろうか。

「あ、なんか怪しんでる？」

仁志の心を見透かしたように有希が笑ってまたいかさきをつまんだ。図星だったので言葉が出ない。

「私、卒業してすぐに海外に行ってたせいかも。行方不明者リストとかに載ってたりして」
同窓会の案内があるたび、行方不明者の所在確認についても連絡があった。しかし、有希の名前が挙がっていただろうか。あまり注意して見ていないこともあり、行方不明者について仁志はあまり記憶していなかった。

「でも、ごめんね。急に来たりして」

有希の声色が急に寂しそうなトーンになる。仁志は頭を振って、

「いやいや、全然！むしろ大歓迎」

「本当？じゃあ、また来てもいい？」

上目遣いでねだるように見られると、仁志は自分でも気がつかないうちに頷いていた。その脳裏に、瑞穂が全く存在していなかったといえは嘘になる。

「じゃあさ、連絡先交換しようよ。今度来るときはメールして。こんなビールとつまみじゃ味気ないじゃん」

「ありがとう！会えただけでも嬉しかったのに、また誘ってもらえるなんて夢みたい！」

バッグから綺麗にデコレーションされた携帯電話を取り出して、有希はとても嬉しそうに笑っていた。仁志の頭からは、その笑顔で瑞穂のことが一瞬離れた。

翌日、会社に出勤してパソコンに向かってしているとポケットの中で携帯電話が震えた。社内で私用の携帯電話を使用するのは限度を超えなければ可、となっているので取り出して確認する。着信していたのはメールで、差出人は有希となっていた。

『おはよう！昨日は遅くまでありがとう。久しぶりに仁志君と話せてすごく楽しかったよ。今はもう工作中かな？私はこれから仕事に向かうところだよ。またいけるときに連絡するね！また上がり込んじゃいまーす』

仕事は美容師をしていると昨日のうちに聞いていた。大きな美容室で美容師が何人もいるため、予約が入っていない日の出勤時刻は本人任せなのだそうだ。

『おはよう！メールありがとう。俺はもう工作中。でも今日は新規の仕事がないから気楽にやってたところだよ。俺も昨日はすごく楽しかった。また来れる日分かったらすぐ教えて！部屋の掃除しておくからさ（笑）次に会えるの楽しみにしてるよ！』

仁志は思いのほか心が躍るのを感じながらそう書いて返信し、携帯電話をポケットではなくキーボードの横に置いた。有希からの返信があるような気がしたからだ。しかし、それきり返信はなく、仁志は昼休みを迎えた。

「えー！じゃあ、その女上げちゃったんすか！家に」

昼休み、仁志は会社から程近いラーメン屋にいた。後輩の磯部が「いいラーメン屋を見つけたから行きませんか」と誘いに來たからだ。磯部は仁志の三年後輩なのだが、仕事はなかなか優秀で、愛想のよさと要領のよさから上司にも同期からも好かれている。入社してきたときに仁志が仕事の大きな指導をしたため、それ以来ずっとこんな調子で昼食をとったり飲みに行ったりと交流している。

「じゃあ、瑞穂ちゃんはどうなったんすかあ。もしかして二股！」

瑞穂と知り合うきっかけとなった合コンに、仁志は人数あわせで磯部を呼んでいた。レベルの高い合コンの中で瑞穂は一番人気だった。もちろん、磯部も瑞穂狙いだったのだ。だからこそ、有希を自宅に上げて飲んだことをさらりと仁志が話すと磯部は素っ頓狂な声を上げ、そして瑞穂のことを出して責めた挙句、

「だからイケメンは得なんすよ……俺なんて面白い話するしかないじゃないっすか」

とラーメンを運んでいた手を止めて泣きまねをした。

「お前だって並のやつらに比べりゃいい顔してるじゃないかよ。面白い話なんてするから、そこそこ売れてるイケメン芸人みたいな扱いになるんだって」

ずるずるとラーメンをすすってから仁志が言うと、

「しゃべらなきゃ先輩みたいな人に瑞穂ちゃんとられちゃうんですよ！」

と磯部が反論する。

「しゃべっても結局最後は俺がゲットしたじゃんか」

う、と喉が詰まったような声を出し、唇を突き出してから、

「そうですけどお……」

と磯部はまた泣き出しそうな顔でラーメンをすすった。

「ま、二股かけるつもりはないしよ。そもそも、家に上げて酒飲んだだけだぜ？浮気になるかよ、そんなの」

「なっ！浮気ですよ、十分！」

「手出したならわかるけどよ、そんなことくらいじゃ今時浮気にならないって」

仁志のそれに、磯部は小さな声で「これだから女ったらしは……」と呟いた。仁志にもその声は届いている。

「余計なお世話だ、バカ」

すでにラーメンを平らげた仁志は、そう言って磯部の頭を小突いた。そしてカウンターに二人分のラーメン代を置き、店を出た。

「あっ、先輩！ちょっと待って！」

まだ食べ終わっていない磯部は慌ててラーメンをすすり、

「ごちそうさまでした！」

と叫んで店を飛び出す。一方仁志は店の前の喫煙スペースでのんびりと煙草を吸っていた。

「先輩、置いていかないでくださいよ！」

「別に置いて帰ってないだろ？俺は煙草が吸いたかったの」

紫煙をうまそうにくゆらせながら仁志が笑う。磯部もポケットから煙草を取り出したが、仁志が吸い終わって立ち上がったのを見て慌てて煙草を戻した。

「先輩、ごちそうさまでした。俺が誘ったのに払わせちゃって……」

「あー、いい、いい。気にすんな。次はおごりな」

帰社がてら、二人は瑞穂について話していた。瑞穂が三ヶ月経ってもなかなか進展させてくれないこと、完全に瑞穂の手にイニシアチブがあること、だからといって仁志には別れるつもりがないこと……。その締めくくりに、

「でも、俺は先輩のやってくるのがわかんないっす」

と磯部は苦笑していた。

午後からは部署ごとの会議があり、仁志は退屈しのぎに隣に磯部を座らせ、何かとちょっかいを出しながら会議をやり過ごした。はなから真面目に会議に参加するつもりは毛頭ない。それでも、新企画の立ち上げについて二週間後にまた新しい会議があることについて発表があると、そこについては詳しくメモをとった。仕事は好きだが会議は嫌いなだけなのだ。

その日は定時で上がることができ、仁志は早速磯部を含む数人の後輩を誘って飲みに行くことにした。結局、定時になるまで有希からの連絡はなく、その間に瑞穂にも誘いをかけたがあつさりとは断られ、その結果の飲み会になったというわけだ。

その日はひとしきり盛り上がり、三件ほどはしごをしてお開きとなった。酔いに酔った磯部を自宅まで送り、仁志も帰宅した。布団にたどりついたときには午前一時を回っていた頃だった。

ふと思いついてポケットから携帯電話を取り出すと、メールが一件着信していた。有希からかと思いついてみると、それは瑞穂からのもので、

『八時からなら空いたけど、まだ予定入ってない？』

というものだった。時間は七時三分。一件目でかなり盛り上がっている最中だったときだ。そのあとに着信がないところを見ると、仁志からの返信がないことに連絡するのを諦めたのだろう。こういうときの彼女はひどく淡白だ。そして仁志も返信するのが面倒で、メールの画面を開いたまま布団に転がった。瑞穂からの返信よりも、有希からの返信がなかったことが少し残念で、明日にはまたメールが来るだろうか、と思っているうち、酔いも回って眠りについた。

それから数日、有希からのメール、電話はなく、その間は瑞穂と共に過ごした。休日には朝から映画館や彼女の買い物に付き合い、外食して夜には別れる。いつものデートと同じような繰り返しだ。やはり自宅に上げてもらえることはなく、だからといって仁志はあえてねだることもしなかった。いざとなれば有希がいる。仁志の中に、そんな考えが浮かびはじめていることは確かだった。だが、この数日有希から全く連絡がないことは不安の一つだった。

「ちょっと！どうしたの？」

そういわれて我に返ると、瑞穂の眉が釣りあがっている。今、仁志はよく二人で来ているオープンカフェにいた。映画館の帰り、昼食を軽くとりとうつったのだ。

「ああ、ごめんごめん。なんだっけ？」

すっかり有希のことで頭がいっぱいになっていた仁志が笑って頬を掻くと、

「ちょっと仁志……最近いつも話聞いてないよね？」

そう言って彼女はさらに眉を吊り上げた。

「最近新しい仕事が始まってさ。結構遅くまでやってんだ。疲れかなー」

「そうだったの。じゃあ家で休んだら？私帰るから」

仁志の言い方が気に入らなかったのか、瑞穂はそう言ってまだ食べかけのランチセットをそのままに立ち上がろうとした。だが、さすがに仁志も困惑し、

「ちょっと待てよ。そんな言い方ないだろ」

と瑞穂の腕を掴む。

「仕事が忙しくて大変なら、休みの日ぐらいゆっくりしたいでしょ？人の話も聞けないくらい疲れてるなら私に合わせてくれなくてもいいわよ」

負けじと瑞穂はそう言って仁志の手を振り払った。騒ぎに気がつき始めて周りの客が注目し始める。

「ちょっと瑞穂、落ち着けよ。別にそんなこと言ってるわけじゃ……」

「私、話を聞いてくれないような人間とは一緒にいられないわ。帰る」

その、人間、という単語に仁志は妙に反応した。去っていこうとする瑞穂の後を慌てて追いかける。

「おい、ちょっと待てよ！そんな目くじら立てるようなことじゃないだろ！それになんだよ、その言い方は！」

通りすぎる通行人たちが二人を見ていたが、仁志はかまわず瑞穂の腕を後ろから掴んで怒鳴った。痛い、と瑞穂が小さく叫び、腕の力を少し緩める。

「なあ、機嫌直せよ。せっかく会えたんだから、こういうのやめようぜ」

だが瑞穂は振り返ると仁志をきつく睨み、

「いやよ！離して！どうせ他の女のことも考えてたんでしょ？私知ってるんだから！」

そう叫んだ。その瞬間、仁志の脳裏に蘇る有希の魅惑的な笑顔。

「そんなこと……」

そう言った仁志の声は、自分で思うよりも掠れていた。

「やっぱりね。どうせそうだと思った。こんなに早く浮気されるなんて思いもよらなかった！」

「浮気なんかしてない！それははっきり言える」

「それは？それはってなによ！じゃあ他の女のことを考えてたのは本当なんでしょ？浮気なんてしてないなんてよく言うわ！」

パン、と乾いた音がした。何かと思うと、仁志の左頬がじんと痛んだ。瑞穂は小さく、

「バッカじゃないの」

と言うと、呆然と立ち尽くす仁志を置いて去っていった。修羅場の様子を見た通行人たちが色めき立っている。

「あいつ……」

仁志の脳裏には、ある人物の笑顔が浮かんだ。

数分後、仁志は磯部の自宅アパートにいた。先日送っていったので、場所は覚えていたのだ。寝ているところに乗り込んだので、目の前の磯部はTシャツにトランクス、といういかにも先ほどまで布団の中でした、という格好で正座している。

「……ね、連絡先なんて入ってないでしょ？」

磯部の携帯電話のアドレス帳やメール、電話の着信、発信履歴を細かくチェックしていた仁志は、磯部のその言葉に、

「……みたいだな」

と返して、携帯電話を閉じた。正座していた磯部が安堵した様子で足を崩す。

「びっくりしましたよー。突然来て瑞穂ちゃんに話したろ！なんて」

瑞穂に有希のことが知られていたとなると、瑞穂と面識があつて、有希の一件を知っている人物ということになる。仁志が思いついたのはただ一人、磯部だった。有希との夜のことはかなり詳しく話してしまっている。磯部も瑞穂を狙っていたのは当然周知のことだったので、瑞穂に有希のことを話せば仁志の分が悪くなるのは目に見えている。それに磯部は仁志と瑞穂の仲がなかなか進展しないことも知っていた。瑞穂を狙っていて、この状況を逃す男はいないだろう。

だが、先ほど磯部が言ったとおり携帯電話の中には瑞穂との接点を示す証拠が一切なく、また磯部の話によると、

「ごめんね。長谷川君と連絡先交換しちゃったから」

と連絡先の交換を断られたというのだ。そのあともメールアドレスだけでも、としつこく食い下がったらしいのだが、のらりくらりとかわされて、結局電話番号はおろか、メールアドレスも教えてもらえなかったらしい。

「だから瑞穂ちゃんもよっぽど先輩のことをお気に入りだったんだなーと思って。それなら、しょーがないやと思って俺は潔く諦めたんすよ？なのにこんな仕打ち……」

両手で顔を覆って泣きまねをしてみせる磯部に、

「あーあー、もう！悪かったよ。俺の勘違いだ」

と仁志は頭を掻いた。それを聞いて磯部が顔を上げる。その顔はぺろ、と舌をちょっと出していた。

「瑞穂ちゃん狙うなら今がチャンス！」

磯部のそれに、

「馬鹿野郎」

仁志も拳を握ってみせる。

「しかし、変な話ですよー。だって、先輩と、その……」

「有希？」

「そう！有希ちゃん！と、あとは俺しかその話を知らないわけですよーね？」

「ああ」

「じゃあ誰が瑞穂ちゃんに話したんでしょ。もしかして、瑞穂ちゃんが有希ちゃんとは違う女と勘違いしてるんじゃないっすか？」

そういわれて仁志はこの数日のことを振り返ってみるが、特に有希以外との女性との接触はなかった。当然、同僚の女性と仕事の話ぐらひはするが、それ以外に食事をしたり、遊びに行ったりするようなことはしていない。

「あとは、ケータイ見られたとか」

「それはないな。常に身につけてるから」

「いや、わかんないっすよー。女っていつどこでどんな手使って見てるか分からないし」

そういう磯部もいつの間にかスウェットのズボンを穿き、冷蔵庫から取り出してきたらしいコーヒーの缶を仁志に差し出した。悪いな、というと、実家からなぜか滅茶苦茶送ってきたんです、と磯部が苦笑する。

「それに、俺ケータイロックかけてるもん」

「うわ、それアヤしいっすね」

磯部が思い切り眉をひそめるので、

「どっかで落としたら怖いじゃんかよ」

と言いつつ、

「常に身につけてる割に落とすんですか」

と今度は呆れられた。

「まあ、いいや。ケータイが関係ないなら、そうだな……考え付くのは、有希ちゃんと先輩の共通の友達に有希ちゃんがしゃべったとか」

「共通の友達ならいるけど……瑞穂のことは知らないぜ。だいたい前に連絡とって、それからしばらく会ってないし、連絡もしてないし。近くに住んでるわけでもないし」

「そうですかー。じゃあ……いや、でもこれって怖いな」

そういいながら、磯部はにやっと君の悪い笑みを浮かべていた。

「なんだよ」

仁志が尋ねると、

「いやー、でも……」

と焦らすように磯部が首を傾げる。

「いいから、言えって！」

「えー、そうですか？ いや、これは想像すると怖いですけど。たとえば、瑞穂ちゃんと有希ちゃんが友達だったとしたら……？」

その言葉に仁志も想像を膨らませる。たとえば、として。瑞穂と有希が友人同士で、瑞穂に新しい彼氏が出来たという話を聞いた有希は、瑞穂の話を聞いているうちにそれが同級生であることが分かる。もし学生時代、有希が仁志に思いを寄せていたとしたら、これは仁志に会える絶好の機会であると同時に、瑞穂から仁志を奪って自分の恋人にしてしまう機会でもある。仁志の自宅は瑞穂も知らないから、仁志と親しかった同級生に連絡を取り、自宅を調べて押しかける。それが瑞穂にばれれば、仁志と瑞穂の仲は破綻。うまくいけば有希は仁志と恋人同士に……。

「……怖」

「だから言ったじゃないですか。まあ、ということは俺と同じことを先輩も考えたんでしょう

けど」

ぐい、と磯部はコーヒーを飲み干し、机の上に空き缶を置いて立ち上がった。二本目を取りに冷蔵庫へと向かう。

「でも、ほぼ可能性はゼロでしょうけどね。そんな回りくどいやり方しなくたって、瑞穂ちゃんに紹介してもらって、同級生ですよーって盛り上がって、連絡先交換して瑞穂ちゃんと内緒で会っちゃえば成立ですから。俺はその可能性よりも、いきなり自宅に押しかけてくるってところが結構怖いと思いますよ」

改めてそういわれると、確かに怖いと思える面も出てくるものだ。何より、仁志はまだはっきりと有希の学生時代の姿を思い出せていない。そんな女性をすっかり信じて、勝手に自宅を調べられていたことも忘れて家に上げ、酒を振舞い、連絡先の交換をしたのだ。

「おお、怖！」

「今更ですけどね」

磯部の苦笑。だが確かに彼の言うとおりの、今更なのだ。

「有希ちゃんとは連絡取ってるんすか」

「いや。家に来て、次の日向こうからメール来て、俺が返信して、そのまま」

「じゃあ結構経ちますよねー……」

テレビの脇に置いてある卓上カレンダーを見て磯部が呟く。

「このまま音信不通になっちゃうのが一番いいんじゃないっすかね。あ、自宅知られてるからそうもいかないのか」

「……本当に危なくなったらここに居候するわ」

「やめてくださいよー！」

二本目の缶コーヒーに口をつけていた磯部がそう叫んだ。

精神的な疲れからかぐったりとして仁志が帰宅すると、家の前に人影があった。それは、言うまでもなく有希だった。慌てて携帯電話を取り出してみるが、連絡はどこからも入っていない。

「あ……」

有希も仁志に気がつき、初めて会ったときのようにフェンスにもたれていた体を正して笑った。しかし、その目が最初に会ったときとは違っていた。見るからに真っ赤に充血しているのだ。それに少し目の周りが腫れている。

「ごめんね……連絡もせずに押しかけちゃって……」

慌てて近寄ると、彼女はそう言ってまた笑った。だがその笑顔はどこか痛々しい。

「いいよ、入って」

「うん……」

家の中は相変わらずごちゃごちゃしていたが、それでも少しは掃除をしたほうだった。いつ有希が来てもいいように、少しずつ片づけをしていたのだ。仁志は、いつもは自分が座る座布団を有希に勧めて流しへ行き、ぶら下げてきたビニール袋の中から缶コーヒーを出してコップに注いだ。磯部が「お土産、というより厄介払いです」と寄越したものだ。磯部宅でコーヒーはたらふく飲んできたので、自分用には水を用意した。

「これ、良かったら飲んで」

コーヒーの入ったコップを差し出すと、

「ありがとう……」

と有希の華奢な手が両手でコップを包んだ。

「ね、どうしたの？」

しばらくの沈黙の後、口火を切ったのは仁志だった。黙ってコーヒーを口に運んでいた有希の手が止まる。

「泣いてたんでしょ。目」

「……っ」

出来るだけ優しく言ったつもりだったが、有希は一瞬体を震わせてからかすかに嗚咽を漏らした。両目からみるみる涙が零れ出す。仁志は慌ててティッシュを取って有希に渡した。

そうしてしばらく泣き続けたあと、

「……ごめんね」

と有希は小さく言った。

「言ったら楽になると思うけど……言いづらいなら、言わないでもいいし」

こんなときにかかる言葉が思いつかないというのはもどかしいものだな、と仁志は人生初の悔いを思う。だが有希は、

「ありがとう」

と寂しそうに微笑んだ。そして、

「……話したら、聞いてくれる？」

と言った。仁志の脳裏には、

「私、話を聞いてくれないような人間とは一緒にいられないわ」

という瑞穂の言葉が蘇っていた。

「そっかあ……」

仁志のそれに、瑞穂は小さくうん、と頷いて涙を拭った。

瑞穂がぼつりぼつりと話した内容をまとめると、ようは付き合っていた彼氏が二股をかけており、それが本命の彼女にばれて、今朝その本命の彼女というのが有希の家へ乗り込んできたのだという。あくまで本命、というのは彼女の自称なので本当の所は分からなかったが、その彼女は恋人と四年も交際しており、同棲期間は二年になるという。付き合いでいえば自分のほうが上だとか、見た目も私のほうが上だとかのたまった挙句、もうすぐ妊娠三ヶ月で、それをまだ恋人には打ち明けていないが結婚して子供を産みたいのだと泣きつかれたという。とにかく二人で解決する問題ではないから恋人も呼んで話をしようという、その必要はない、さっさとあんたが別れるといえぱそれで済むんだと怒鳴られ、結局脅されるままに「私は彼氏と別れます」という念書まで書かされたらしい。彼女が帰った後で恋人に電話をすると「そういうことなら……」と言われて電話を切られたという。

「なんか、一人でいたら、余計に考えちゃって、辛くて……一番に頭に浮かんだのが仁志くん、いてもたってもいられなくて……」

だが仁志は、まず有希に恋人がいたことにショックを受けていた。そして、まさか有希も同じ日に恋人に振られていたなんて、という驚きと共感。仁志の場合は、二股がばれて振られたわけだったが。

「私、結構軽く見られるらしくて、こういうこと結構あったんだけど……でも、今回の人はね、違うって本気でそう思ってたの。結婚しようって言ってくれたこともあったの。それなのに、やっぱり今までの人と一緒だったんだって、思ったら……」

そう言ってまた有希が目元を指で拭った。よほどショックだったのだろう。落ち着いて話し出したと思っても、またすぐに嗚咽を漏らし始める。

「ごめんね、こんな話……」

「いや、気にしないで。有希がすっきりできればそれでいいよ」

隣に座って仁志がぽんと背中を叩くと、有希は目元を真っ赤に腫らしながら微笑んだ。

「優しいね、仁志君。高校生の頃と変わんないや」

そのときすでに、磯部と話した会話の内容は仁志の脳裏から消えていた。今、仁志の中に溢れているのは、子供のように泣きじゃくる有希を力いっぱい抱きしめたいという気持ちだけだった。当然、瑞穂の姿など浮かぶはずもない。

「仁志君と付き合ったら、幸せになれそうだね」

そして、その一言が仁志を突き動かす。

「じゃあさ、試しに付き合ってみる？」

仁志がそう言うと、有希がゆっくりと仁志を振り返った。その目は驚きで丸くなっている。

「俺、初めて会ったときから、有希のこと、すごく気になってる」

両手で有希の肩をゆっくりと引き寄せ、その体を自分の腕の中へと収める。有希の体温がTシャツ越しに仁志へと伝わる。

「有希、好きだ」

「仁志くん……」

「俺と付き合って」

「……私も、高校生の頃から好きだよ……」

その言葉が仁志の中で何かを喚起させていたが、仁志はあえてそれに気づかない振りをした。

同僚や後輩たちとの飲み会のあと、仁志は磯部だけを誘って二件目の居酒屋へ入った。そこで飲みなおしながら、瑞穂に振られた日の夜、有希と交際することになったと報告した。磯部の目は丸からやがて三白眼へと変化した。

「なんだよ、お前。その顔」

「いや……あれだけ怖い怖いって言うておきながら、言った当日に泣きつかれて付き合っちゃうなんて、先輩……ある意味先輩が怖いっす」

酒が入ると多少口が悪くなるのは磯部の癖だ。しかし、付き合いも長いのでその辺りは仁志も許している。

「まあ、でも同級生だしよ。全く知らない女じゃねーし」

焼酎を口に運んでからそう言う、

「でも！全く思い出せないんでしょう？それって全く知らないのと同じよーなもんじゃないっすか！」

と磯部は焼き鳥の串を仁志に向けた。一件目でだいぶ出来上がっている様子だったので、仁志もさすがに少し心配になってくる。

「それに、瑞穂ちゃんとはちゃんと話し合っただけじゃないんでしょ？先輩は振られたと思ってても、瑞穂ちゃんはどう思ってるか分からないっすよ！」

「いや、あれは俺完全にふら……」

「じゃあ！」

磯部は可愛らしく小首を傾げて、そしてそれに似合わぬ邪悪な微笑みを浮かべた。そして、「俺に瑞穂ちゃんのメアド、教えてくださいよ」

と言った。思わず仁志は携帯電話の入っているポケットを触っていた。

「ほーらね。先輩はズルいんすよ！有希ちゃんとそういうことになっておきながら、瑞穂ちゃんのことも本当はあとからどうにでもうまくできると思ってるんでしょ？」

「そ、そんなことねーよ！」

「じゃあ、教えてくださいよ」

すでにどこからか携帯電話を取り出していた磯部は、戸惑う仁志の目の前にそれを突き出した。後輩の挑戦的な微笑みに、

「……分かったよ！」

とそれを取って、仁志は自分の携帯電話を取り出し、赤外線通信で瑞穂の全てのデータを磯部に送った。そして、瑞穂のデータを自分の携帯電話から消した。

「俺のは消した！」

言いだしておきながら、携帯電話を返された磯部は哑然とした様子だった。

「あとは好きにしろよ」

仁志はそう言いながら、心残りがあることをぬぐい切れなかった。

例によって泥酔した磯部を自宅まで送り、タクシーで帰宅すると、それを見計らったかのよう

にメールが届いた。だが、送信者の欄に名前の表示はなかった。仁志は胡散臭く思いながらもメールを開くと、

『あの日はごめん。私が言いすぎた。明日会えない？七時にいつもの居酒屋で待ってる』という内容が書かれていた。それだけで、瑞穂からのメールだということは明確だった。どう返信したものか迷い、そしてそのまま、仁志は布団に倒れこみ、眠った。

「お待たせ」

翌日、七時。仁志は結局、瑞穂が指定した待ち合わせ場所の居酒屋に出向いていた。瑞穂は先に来ていたが、運ばれてきていたビールには手をつけた様子ではなかった。

「来てくれてありがとう」

仁志もビールを頼み、運ばれてきた中ジョッキを口に運ぶと瑞穂もビールを一口飲んだ。

しばらく無言でビールを飲んだり焼き鳥に口をつけたりしていたが、

「ごめんね」

と瑞穂が小さく呟いた。それに仁志は顔をあげると、

「私、誤解してた。本当に浮気なんてしてないんだよね」

彼女は片手にしていたビールのグラスを机の上に置いて頭を下げている。

「……あ、当たり前だろ」

動揺しつつ、仁志は乱暴にそう言ってビールを飲み干した。

「瑞穂以外に女なんているはずないだろ」

「……うん……」

その夜、仁志は初めて瑞穂の部屋に泊まった。

「……で？」

その時の磯部の不機嫌さと言ったらなかった。だが、

「いや、だから……」

「より、戻ったんすね？瑞穂ちゃんと」

「……おう」

会社の喫煙スペース。磯部は吸った煙草の煙を盛大な声を上げながら吐き出した。そして、

「じゃあ有希ちゃんはもう関係ないんすね？」

と尋ねた。

だが、仁志は何も言わなかった。煙草を吸い、吐き、目を泳がせていると、

「これだから先輩は嫌なんすよ！もうっ！」

と金切り声をあげた。

「女みたいな声出すなよ！」

「だあって！何考えてんすか？マジで！今度有希ちゃんどうするんすか、もうー」

その仁志の二股に一番苦しんでいるのは磯部のようだった。そう言って髪をかきむしってから、

「あー、連絡しないでよかった。迷って得した」

と苦笑した。

「もう先輩が思うようにしたらいいんですよ。で、いつかどっちにも振られればいいんです！」

「なんだ、それ」

「自業自得……得してほしくないっすけどね」

磯部はそう言って二本目の煙草に火をつけた。

「まあ、そういうことだ。じゃな」

仁志はまだゆっくり腰を据えようという磯部を置いて、煙草を揉み消し自分のデスクへ戻った。

そこで携帯電話のバイブレータが鳴ったので開くと、

『今夜家に行ってもいい？』

と有希からのメールが入っていた。

「どうすんすか？」

その声に驚いて後ろを振り返ると、背後にいつの間にか磯部が立っていた。慌てて仁志は携帯電話を閉じた。

「馬鹿！」

「先輩ったら無防備」

磯部を追い払ってから、仁志はもう一度携帯電話を開いた。そして、

『大丈夫。部屋入ってていいよ』

と返信した。鍵はポストの下に貼り付けてあるのだ。

『ありがとう。じゃあ、晩御飯食べないで帰ってきてね。私が作って持っていくから』

その有希からのメールに、仁志はニヤニヤと笑っていた。

その日、有希が作ってきた夕食は肉野菜炒めに野菜サラダ、いんげんの天ぷらだった。

「あんまり料理得意じゃないの。あ、おみそ汁は作ってこれなかったからこれでいい？」

出されたのはインスタントの味噌汁だった。

「今度はうちで作ればいいよ」

お湯を沸かしてインスタントの味噌汁を作ってから簡単な夕食となった。肉野菜炒めは本人が言うほどまずくはなく、

「うん、うまい！手作りの晩飯なんて久しぶり」

と素直に喜ぶと、

「よかった！もっと上手になるように頑張るね」

と有希はぱっと笑顔になった。その笑顔は瑞穂にないはつらつとした明るさを持っていて、仁志はなぜかとても懐かしい想いに駆られた。

「私、食べるのはすごく好きだけど、食べるだけで作らなかったんだよね。お母さんのご飯、すごくおいしいんだ」

「じゃあお母さんに習えばいいのに」

「ダメダメ！すぐ太っちゃうんだもん。おいしくていっぱい食べるようになっちゃうから」

「ちょっとぐらい太ってたって有希は可愛いよ」

仁志が口いっぱい白いご飯を含みながらそう言うと、

「ありがと」

有希は少し困ったような顔になってから苦笑した。

それから夕食を一緒に取りながら、昔話に花が咲いた。厳しいが自分で作った数式の問題の答えを忘れる教師、定年間際のおばあちゃん教師の居眠り事件、生徒総会で大いびきをかいて赤っ恥をかいていた体育教師の話。それはどれも鮮明で、とても懐かしい思い出だった。

「なんだか同窓会みたい。相手が仁志くんによかった」

ビールを二本あけたくらいで有希は上機嫌だった。

それからしばらく昔話をして盛り上がり、有希はすっかり酔いつぶれて眠った。気持ちよさそうに寝息を立てる有希にタオルケットをかけてやりながら、仁志は自分が少しでも優しい男に思えて一人満足していた。

だが、次に聞こえた電話の着信音で仁志は現実に戻された。それは瑞穂からの着信だった。有希を起こさないように慌てて電話に出ながら部屋を出る。

「もしもし？」

「どうした？こんな夜中に」

「あ、用はないの。ただ、声が聞きたくて」

ツンデレ。仁志の脳裏にそんな片仮名四文字が浮かぶ。

「明日も朝早いんだろ？大丈夫なのかよ」

「……まあ」

煮え切らない返事。仁志としては早く電話を切って部屋に戻りたかった。有希が目覚ますことはないだろうが、万が一ということがある。

「ねえ、明日会えない？仕事終わってから」

唐突な誘い。だが仁志は、

「ああ、明日なら大丈夫。仕事もそんなに立て込んでないから、定時で上がれると思う」と滑らかに口にしていた。

「じゃあ、駅前で七時に待ち合わせにしよう。おいしいイタリアンレストラン、紹介してもらったの」

瑞穂が声を弾ませたのに「ああ、いいね」と適当に相槌を打ちながら、仁志は瑞穂ではなく有希の寝顔を思い出していた。

翌日、待ち合わせよりも三十分ほど遅れて仁志は駅前に行った。定時で上がれる予定だったのだが、時間ぎりぎりになってから同じチームの不手際が発覚し、その対処に追われて残業となってしまったのだ。瑞穂にはすでに連絡してある。彼女からは『七時にいなかったらコーヒー飲んで待ってる』と駅ビルの中にある大手コーヒーショップの場所指定を受けていた。

駅前のいつもの場所には姿がなかったので、仁志は指定を受けたとおり駅ビルの中のコーヒーショップに向かった。ガラス張りの少し狭い店舗なので、瑞穂の姿があればすぐに分かる。ガラス越しに中を覗くと、入り口に近い二人席に瑞穂が座っていた。携帯電話を片手にアイスコーヒーを飲んでいて、仁志の姿に気づいた様子はない。

仁志が中へ入って声をかけようと歩き出したとき、
「仁志君？」
と声をかけられた。慌てて振り返ると、そこにはチューブトップに白いシャツを羽織り、ホットパンツを穿いた姿の有希がいた。

「偶然！どうしたの？」
有希は嬉しそうに微笑みながら仁志の元へとやってきた。その姿を、周囲の男たちが羨ましそうに振り返る。当然だ。弾けんばかりの胸元、くびれた腰、すらりと伸びた細い足。仁志も思わず目を奪われていた。

「仕事帰り？」
「あ……ああ、そう」
「私も今仕事終わったの。仁志君の会社、ここの近くなんだ？」

「うん、その、通りの向こう側なんだけど」
「そうだったんだ！じゃあ、職場も近かったんだね。あ、私これから買い物してから帰るんだけど、良かったら一緒に行かない？」

「あ」
有希が仁志の腕を掴んだ瞬間、彼はやっと有希の胸元から視線を剥がし、何故自分がここに立っているかを思い出した。

「ごめん！今日は人と会う約束が……」
そう言ってコーヒーショップの窓ガラスを振り返ると、そこに針のような視線を感じた。それが、瑞穂からの視線だと気がつくまでひどく時間が掛かった。

「あ、やべ……」
「？」
だが次の瞬間、瑞穂はすっと立ち上がり、荷物と持って二人の方へとやってきた。面相はまるで鬼。仁志が凍りつくと、瑞穂はそれまでの形相をころりと笑顔に変えた。

「仁志、この人誰？」
顔は笑顔。声色もまるで猫なで声の優しい声。だが、全身から放たれる刺々しさは否めない。なぜなら、彼女は天使の微笑と声色で、すっと有希の鼻っ面を指差したからだ。

「これは……」

仁志がしどろもどろになっていると、

「あ、はじめまして。私、仁志君の同級生の有希っていいです。もしかして、彼女さん？」
思わぬ彼女の言葉に仁志はさらに動揺した。

「同級生？」

「はい。高校生の頃の。最近家が近くだってわかって、時々メールしたり……あ、もしかして、それって浮気になりますか？」

慌てた様子で有希は両手を振って、

「でも全然そんなんじゃないから安心してください！なんだかすいません！」

そう言って頭を下げた。

「じゃあ、私はこれで。お疲れ様でした」

有希は微笑んでその場を去った。

「ねえ、今の女が言ってたの、本当？」

呆気にとられていた仁志の横で、やはりまだ状況を掴みきれていないらしい瑞穂が呟く。

「あ、うん……」

そう答えながらも、仁志の脳裏にはあの泣きじゃくる有希の姿が蘇っていた。あの時も、二股をかけられて辛い想いをしたのだと、そう泣いていたのに。

同じ目に遭わせてしまった事への後悔の念が、仁志の心の中に澱のように溜まっていった。

結局その日は瑞穂と食事を取り、そのあとすぐに別れて帰路に着いた。瑞穂は有希が言ったことを信じたようで、それ以上の追求はなかったが、仁志の心を占めていたのは有希のことばかりだった。

自宅近くの駅に着いたところで、仁志は思い切って有希に電話をかけてみた。出てもらえないことを承知の上での行動だったが、意外にも五、六回目のコール音で、

「もしもし……」

という声がしたとき、仁志の心臓は緊張で飛び跳ねた。

「俺だけど……」

「……」

ゆっくりと歩きながら、無言の有希になんと声をかけたらいいか思案する。どんな言葉も、今の有希には届かないだろう。懺悔の言葉を垂れたところで、修復できないことは仁志も経験上、十分承知している。

「さっきは、ごめん」

ありきたりな言葉しか出てこなかった。

「彼女、いたんだね……」

その言葉は仁志の胸にひどい痛みを伴って突き刺さった。いつの間にか、瑞穂に黙って雪と交際し始めたことよりも、有希に瑞穂の存在を黙っていたことのほうが罪のように思えてくる。電話の向こうで有希がどんな表情をしているのか想像しただけで仁志の胸は痛んだ。

「あの時、私変じゃなかった……？」

「え？」

「彼女さんに嘘ついたとき。私、ちゃんと言えてたよね……？」

その言葉が、仁志のことを気遣っての言葉だと飲み込むまでは早かった。仁志は今すぐ有希を抱きしめてやりたくなった。自分が傷ついてまで、仁志のことを想って気遣っている有希の優しさが身に染みる。

「有希……俺、今すぐ会いたいよ」

「……」

「あいつとは別れる。今、俺は有希のことだけを愛してる……だから」

「じゃあ」

仁志の言葉を遮るように、震えた有希の声が携帯電話越しに洩れる。

「あの夜の言葉は……嘘じゃないの？」

一つ一つ確かめるようにはっきりと発せられる言葉。見えるはずもないのに、仁志はしっかりと頷いた。そして、

「嘘じゃない。俺は、有希のことが好きだ」

「……仁志君」

その声は、仁志の視線の先から聞こえた。聞こえたほうへ目をやると、そこに先ほどと同じ格好の有希が携帯電話を耳に当てたまま立っていた。目にいっぱい涙を溜めて。

「有希……！」

立ち尽くしたままの有希の元へと仁志は走った。そして、力強く彼女のことを抱きしめた。腕の中で有希は泣いていた。

「お願い。私を捨てないで……」

有希の言葉が、仁志の耳の奥を熱くした。

「……どういうこと？」

有希への想いを十分に思い知ったあの夜から数日後。結局、自分から連絡を入れられずにいた仁志の元へ瑞穂から食事に誘う連絡があった。いつもの居酒屋で食事をしよう、というメールに、仁志はこの誘いを瑞穂と会う最後にしようと思いついた。そして、仕事中からどう別れを切り出すか考えていた。

だが、考え抜いた結果、仁志の口から出たのは「別れよう」というごくシンプルな言葉だけだった。瑞穂も驚いたようで、「え？」と言ったまま一度押し黙り、挙句、

「……どういうこと？」

冒頭の言葉を発したわけである。

「別れたいんだ」

「うん、それは分かったよ。なんで？」

納得がいけない様子の瑞穂は、それに黙り込んだ仁志のことを訝しげな瞳でじっくり観察したあと、

「もしかして、あのときの女？」

女の勘というものは恐ろしい。仁志の一瞬の反応を突いて、

「やっぱりね」

とシガレットケースから煙草を取り出した。

「でも、あいつは悪くないんだ。あの時は俺を庇って嘘を吐いただけで」

「そういうの聞きたくないんだけど」

瑞穂は苦々しい顔でそう言って煙草に火をつけた。そしてゆっくり煙を吸い込んでから、

「じゃあ、あたしの方が浮気だったわけ？」

と仁志を睨んだ。

「いや、最初は瑞穂が本命で……」

「最初は？」

火をつけたばかりの煙草をもみ消し、瑞穂はぼんとテーブルを叩いた。個室の居酒屋のため他の客にじろじろと見られるような恥ずかしさはないが、彼女の初めて見る姿に仁志は驚いていた。

「ふざけないでよ。こっちが色々考えて付き合ってたのに、他に女作って、そっちに本気になったらハイ、さようなら？」

はっ、と小さく穿き捨てるように笑い「馬鹿にしないでよね」と水の入ったグラスを取った。

「ねえ、その女とはうまくいつてんの？私と別れるから付き合うって話になったわけ？」

瑞穂の口調が徐々に熱を帯び、刺々しさを増す。それに煽られるように、仁志の苛立ちも募っていく。

「ちょっと、聞いてんの？」

「……ごちゃごちゃうるせーな！そうだよ！お前より有希の方が本命になったからお前と別れたんだよ。お前と別れれば有希と堂々と付き合えるだろうが！それに、こっちが下手にでりゃいい気になりやがって。顔がいいだけでそんな態度とられりゃ男だって引くんだよ！」

ぴた、と瑞穂の表情が固まった。だが、次の瞬間、

「クソ男！」

仁志の顔面に勢いよく水がかけられた。そして、それを拭っている間に瑞穂はさっさと自分のバッグを携えて去っていった。

これでよかったのだ、と仁志は一人、煙草をふかした。

それから数ヶ月、仁志と有希の交際は順調に進んだ。会社帰りに飲みに行くことや、彼女の買い物に仁志が付き合ったりすることもあった。だが、今では会社帰りに有希が仁志の自宅に寄っていき、食事を作って二人で食べ、そのまま泊まっていく、という形が定着し始めていた。仁志が有希の自宅に行ったことはないが、

「仁志君の家のほうがなんだかくつろげるんだ」

という有希の言葉に舞い上がり、仁志の口から「有希の自宅へ行きたい」という言葉は少しずつ減っていった。

そしてその日も、仁志の自宅でしこたま食べて飲み、先につぶれた有希は仁志の布団の中で寝息を立てていた。

一方仁志は、翌日の午前中に取引先との大事な会議が入っていたため、量を加減していたせいも酔いは浅かった。手持ち無沙汰になってしまい、残っていたつまみに手を伸ばしかけるとポケットの中で携帯電話が鳴った。慌てて部屋を出て確認すると、着信は磯部からのものだった。電話をかけてくるのが珍しいので、深夜に掛かってきたことに何事かと訝しく思いながら、

「もしもし？」

と出ると、受話器の向こうでざらざらと妙な音がした。

「あ、すいません！こんな時間に」

「自覚があるならかけてくるなよ」

「いやあ、それが……」

困ったような声を出した磯部の後ろのほうで金切り声が上がった。それに思わず仁志は携帯電話を耳から話した。

「お前、何飼ってんだ」

「動物じゃないです。人間ですよ」

「人間飼ってんのか」

「冗談言ってる場合じゃないですって」

その間にも、ざらざらという妙な音と金切り声が上がる。不審に思った仁志は、

「お前、今どこにいるんだよ？」

と尋ねた。しばらくの間のあと、

「瑞穂ちゃんの家近くです」

という返事が返ってきた。

「……は？」

思わぬ返答に、仁志の口からはひどく間の悪い言葉が零れただけだった。確かに、瑞穂と別れた直後に磯部には報告をしてあったが、まさか瑞穂とそういう関係になっているとは露ほども知らなかった。

「あ、別に付き合ってるとかじゃないですから。瑞穂ちゃん、先輩に二股かけられてたの相当ショックだったらしくて。ほら、前に先輩から瑞穂ちゃんの連絡先教えてもらったじゃないですか。先輩が別れたって教えてくれたあと、少ししてからメールしたら食事もできてないって

うし、心配になって。で、ちょこちょこ会って食事したり相談に乗ったりしてたんですけど……」

歯切れの悪いところを見ると、瑞穂にその気はないのだろうが、磯部は十分その気があって近づいたということだろう。仁志はそう推測してため息をついた。

「で、それが何だって今の電話につながって来るんだよ。お前が面倒見てんだろ？」

「ああ、はい。そうなんです。今日も飲んで、そのまま瑞穂ちゃんのうちに送っていこうと思ったんですけど」

それは、既に瑞穂の自宅への行き来がある、という事実を仄めかしていた。あれだけせがんでもなかなか教えてくれなかった自宅を、磯部にはあっさりと教えてしまっている瑞穂を恨む自分がいることに仁志は気づいていない。

「急に先輩に会いたいって騒ぎ始めちゃったんです。酔ってるときによくあったんですけど、今日はひどくて。座り込んで叫び始めちゃって手がつけられないんですよ」

あの高飛車な瑞穂の風貌を思い出し、それを今の磯部の言葉に当てはめてみるがどうも想像がつかない。だが、よく耳を澄まして聞いてみると、その声は「仁志に会いたい」と叫んでいるようだった。あまりの絶叫に仁志の心が揺らぐ。別れるときですら、これほど取り乱していなかった瑞穂の本当の姿を知ったような気がした。

「先輩、何とかできませんか。瑞穂ちゃんち、知ってますよね」

「いや……」

「え、知らないんですか？」

「違う、そういうわけじゃなくて」

そういいながら、仁志は思わず後ろを振り返っていた。布団に包まって眠っている有希のことが思い出されたのだ。

「じゃあお願いしますよ」

磯部の泣きそうな声。逡巡していると、俄かに耳元で雑音がした。その中に「あ、ちょっと待って」という磯部の慌てた声が混ざる。

「おい、磯部？」

仁志が声を上げた瞬間、

「仁志……？」

聞き覚えのある声が耳元で震えた。

「瑞穂」

「ねえ、どうして私じゃだめなの？ どうして別れなくちゃいけなかったの？」

「瑞穂、お前酔って……」

「もう一回好きって言って。愛してるって言ってよ……私だけだって言ってくれたじゃない……私、信じてたのに……」

電話の向こうで嗚咽が洩れる。揺らいでいた心をさらに激しく揺さぶられて仁志は目を閉じた。磯部の携帯電話を握り締めたまま泣き崩れる瑞穂が目の前にいるかのように思えた。

「……っと落ち着いた？ 電話……てもらえる？」

雑音がして「もしもし」という磯部の声に変わる。

「大丈夫ですか」

沈黙していたせいか、磯部がそう尋ねてきたのに、

「……おう」

と答えると、電話の向こうでため息が零れた。

「先輩は知らないと思いますけど、俺が会うようになってからずっとこんな感じなんすよ。俺がこんなこと言うのはあれですけど、何とかより戻せないんですか？」

「お前、言っただろ？俺はもう有希と……」

そのとき、仁志の背後で寝言とも呻きとも取れぬ声がした。電話の声に反応したのだろうか。仁志が振り返ると、それまで背中を向けていた有希がこちらに顔を向けていた。

「だって、最初は瑞穂ちゃんが本命だったわけですよ？何とかして落としたって言ってたのに、どうしてそんなあっさり別れちゃうんですか。瑞穂ちゃんだって、この壊れ方って異常っすよ」

磯部の言うことも尤もだった。しかし、仁志は有希のあの日の涙が忘れられなかった。そして、前の彼氏と同じ傷つけ方をしてしまった自分のことも。

「……事情があるんだよ、色々」

気がつくのと、自分でも納得のいかない言葉を口走っていた。

「瑞穂ちゃんのこと、こんなにしても有希ちゃんと付き合いたい事情ってなんすか？」

半ば呆れたように磯部の言った言葉に、

「うるせーな！お前は何がしたいんだよ」

と思わず叫んでいた。電話の向こうが沈黙し、ざらざらという雑音がやけに耳についた。

「じゃあ、いいんですね？」

しばらくの沈黙のあと、磯部のそんな言葉が仁志の耳に届いた。

「何がだよ？」

売られた喧嘩をかうように、挑戦的な磯部の言葉に食って掛かる。

「俺、本気ですから。本気で瑞穂ちゃんのこと好きですから。今までは、瑞穂ちゃんが先輩のこと好きで好きでこんなにひどい姿になってるから我慢してましたけど、先輩がそういう態度なら、俺もう我慢しませんよ」

その言葉は心の底から発せられているのだろう。いつもの上辺だけの軽い口調とは全く違う、本気の声色だった。仕事でも、磯部がこんな風に話しているのを聞いたことがなかった仁志は、彼がいかに瑞穂のことを想っているかを感じ取っていた。

「もうこれ以上、瑞穂ちゃんが傷つくのは見ていられないです」

瑞穂がこんなにも想われていることへの嫉妬と、ここまで本気で彼女のことを愛することのできることへの羨望と、そこまで本気になれない悔しさが、ひどくどろどろとしたものへと変化していくのを仁志は一人噛み締めていた。

それから数日が経った。会社での磯部の態度に変わりはない。しかし、休憩中に一緒に煙草を吸うことや、昼食を一緒にとるようなことはなくなっていた。そのため、磯部が今、瑞穂とどの

ような関係にあり、どの程度進展したのかも全く掴めない状態だった。もう忘れようと思っても、そのたびに電話越しに聞いたあの叫び声と切ない嗚咽を思い出し苛まれる。有希への想いに変わりはない。だがしかし、瑞穂への未練を断ち切れずにいるのも確かだった。

「……志くん」

我に返ると、仁志の向かいで有希が怪訝な顔をしていた。

「あ、ごめん。なんか言った？」

「こぼしてるよ」

そういわれて見てみると、机の上に一口大の米粒が落ちていた。そこでやっと、仁志の自宅で夕食の途中だったことを思い出す。

「あー……」

自分で自分に呆れつつ、ティッシュペーパーの箱を掴む。そんな様子を見て有希が箸をおいた。

「ねえ、仁志君。何かあったの？最近様子変だよ」

有希のそれに、仁志の背中が一瞬寒くなる。

「別に、何もないよ」

「でも……」

「大丈夫だよ。ほら、食べよう」

米粒を処理して箸を取り、茄子の肉味噌炒めを頬張る。

「うん、今日もうまい！」

「……それ、さっきも言ってたよ」

誤魔化しているのをそれで察しながらも、有希は苦笑してまた箸を取った。

食事の片づけを済ませ、有希が作ったみょうがの梅酢漬けの細切りと肉味噌豆腐、きゅうりと蛸の酢の物で食後の酒を楽しんでいるときだった。

「ねえ、仁志君、今週末のことなんだけど」

「うん？」

「映画行かない？観たいのがあるんだ」

仁志はそれに思わず瑞穂のことを思い出していた。瑞穂とは映画の趣味があっていた。有希とも合わないことはないが、どちらかというところアクション系が好きな仁志に対して有希は文学作品の映画化などを好む。その点で言えば、瑞穂との映画のほうが楽しめていた。

「いいよ。何がやるんだっけ」

瑞穂と別れてからは、映画のチェックなどほとんどしていなかった。

「アクション映画なんだけど……ＲＣシリーズって、知ってる？」

「レジェンド・カー？あのカーチェイスの？」

それは仁志もよく観ている映画だった。シリーズ化されてだいぶ長く、今年最新作がやることはチェックしていたが今週末にやるのは知らなかった。だが、それよりも有希がそういった映画を観ることが珍しくて、仁志は思わず、

「有希もそういう映画好きだっけ？」

と尋ねていた。

「一番最初にやってたやつがすごく面白くて、それ以来全シリーズ見てるよ。俳優さんも渋くて大好きなんだ」

「そうだったんだ」

「じゃあ、週末は映画観て、ご飯食べる感じでいい？」

「そうしょうか」

仁志が一人過去の映画のことについて思い出していると、

「で、その日は……うちに来ない？」

有希のその言葉に、仁志の脳裏から映画のワンシーンが吹き飛んだ。

「え、いいの？」

「うん……たまには、ね」

そう言うてはにかむ有希がとても可愛らしく見えて、仁志は思わず微笑んでいた。

待ちに待った週末。仁志の心はそぞろだった。それは映画のことよりも、そのあとに控えている有希の自宅への訪問に対してだった。そのためか、この日に至るまでほとんど、というよりも全く、瑞穂のことを思い出すことはなかった。有希との新しい展開に、胸が躍っていたのだった。

「お待たせ」

その日は有希が仁志の自宅まで迎えに来た。Vネックの黒いセーターにピンクと黒のギンガムチェックのボックスプリーツ、その上に白いコートを羽織り、足元は膝上まである黒い革のブーツ姿。Vネックの襟元からは時折胸元が見える。

「じゃあ、行こうか」

仁志は目を奪われつつ、玄関に鍵をかけた。

映画の内容はなかなか面白く、観終わった後も夕食をとるレストランを探しながら映画の話題でひとしきり盛り上がった。また続きを匂わせる終わり方をしていたせいもあり、次の展開の予想で二人の話はおおいに白熱した。

映画館近くのディナービュッフェで夕食をとり、ゆっくりと話を楽しんでから二人は有希の家へと向かった。降りる駅はいつもどおり、仁志の自宅から最寄の駅だ。

「本当に近いからびっくりするよ」

有希のその言葉どおり、道筋は仁志の自宅へ行くときとほぼ同じだった。仁志の自宅を過ぎてから五分ほど歩くと、同じようなマンションが二つ並んだ場所へ出る。その左側のマンションを指差し、

「あそこの五階なの」

と有希が案内した。確かに目と鼻の先ともいえる距離だ。五階からならば、仁志が住むアパートも見下ろせるかもしれない。

エントランスを過ぎ、エレベータで五階まで上がると一番奥まで進んでいく。

「角部屋なの。両隣挟まれてるのってあんまり好きじゃなくて」

そう言って有希はドアを開けた。玄関には柑橘系のさっぱりとした香りが漂っていた。三和土の隅にはパンプスが二足、ブーツが一足並べられている。

「上がって、上がって。すぐにお茶……あ、ビールのほうがいいね」

有希の笑顔と柑橘系の香りに、仁志の胸が高鳴った。

ローテーブルにはビールと買っておいたらしいつまみ、そして昨夜のうちに準備してあったという有希手製の昆布ときゅうりの和え物、山芋の梅肉和え、大根とシーチキンの水菜サラダが並んだ。グラスにビールを注いでもらいながら、仁志は上機嫌だった。

「やっぱり有希の料理はうまいね」

ビールを片手に水菜サラダを頬張ると、有希は嬉しそうに微笑んで「いっぱい食べてね」と自分もビールを飲んだ。買ってきたつまみには手をつけることなく、仁志は有希が作ってくれたつまみで一杯目のビールを飲み干した。

「今日は泊まっていてくれるよね？」

二杯目のビールを有希が注ぎながら尋ねる。まだ一杯目だというのに仁志は上機嫌で、

「うん。今日は泊まっていくよ」

と声を弾ませた。

「嬉しい！ゆっくりしてってね」

有希のその声が、なぜかとても遠く聞こえた。

気がつくと、仁志は見覚えのない部屋で大の字に寝かされていた。背中には程よい感触。どうやらベッドに寝かされているらしいと気がつくのと、手足がその四隅に拘束されていることに気がつくのはほぼ同時だった。

「……っんだ、これ」

よく見ると、手首と足首にはめられているのは手錠だった。動くたびに、ベッドのパイプと自分の手首、足首を繋いでいる鎖がジャラジャラと音を立てるのは何かの冗談のようだった。

「あ、起きた？」

そんな声がして頭を上げると、足元のドアが開いていた。そこにうっすらと人影が見える。もちろん、それは有希のものだ。

「ごめんね。実はビールに睡眠薬入れたの。ちょっと強すぎちゃったかな」

そう言って有希はゆっくりと仁志の右隣にやってきた。そして、

「びっくりした？」

と笑った。

「何だよ、これ」

微笑む有希に向かって手を伸ばそうとすると手錠がまた音を立てた。それに、

「手錠」

と当たり前、と言わんばかりの言葉が返ってきた。それがなぜか、磯部を彷彿とさせた。

「いや、そういうことじゃなくて」

「あ、別に、なんか変なプレイとかそういうのじゃないから」

仁志はひどく混乱した頭で、そうでなかったらなんなんだ、と必死に想像をめぐらせていた。黙り込み、必死に思案する仁志を見て有希はとても楽しそうに笑っていた。

「私ね、仁志君と会えたとき、本当に嬉しかったんだ。高校生のとき、三年間ずっと憧れてたから」

彼女はそう言って、どこにあったのか革で出来た表紙の冊子みたいなものを取り出した。それは仁志にも見覚えのあるものだった。

「高校のときの卒業アルバム……？」

「そう。懐かしいでしょ？」

仁志の自宅にそのアルバムはなかった。就職と同時に一人暮らしを始める際、実家においてきたのだ。

「でもね、私、人生の中で高校生のときが一番嫌い」

懐かしそうにアルバムをめくっていた有希から零れたとは思えぬそれに仁志は目を丸くした。彼女はそういいながらも、微笑を湛えたままページに見入っている。

「本当に、何度死のうと思ったことか。楽しいことなんて一つもなくて、どうやって毎日過ごしているのか分からなかった。でもね、そんな私に、一度だけとてもいいことがあったの」

有希がアルバムを広げ、それを仁志の前に差し出した。上半身を上げることは出来ないで、首だけを持ち上げてそれを見る。ページは学園祭の時のものだった。

「一年生の時の学園祭。私、誰とも一緒にいられなくて……教室は出店になっちゃってたし、一緒に過ごしてくれる友達もいなかったから、一人で体育館にずっといた。演劇部が使ってる客席の端で、三日間ずっと、一人で」

視線は自然と、演劇部のステージを写したものへと移る。写真の中の演劇は三年生の頃に公演さ

れた物なので「タイタニック」だ。だが、一年生の時は……。

「シェクスピアだ。たしか「真夏の夜の夢」だった」

仁志の脳裏に蘇るおぼろげな記憶。確かに一年生の頃、出店の手伝いも終わり、暇になったからと演劇部の劇を見に行った。

「そう。私ね、三日間、ずっと一人で観てたんだ。でね、最後の日、最後の公演のとき、決めたの。この公演中に、誰とも話が出来なかったら、私死のうって」

ふふ、と有希の口から笑いが零れる。それがなんとも恐ろしく、仁志は青ざめた。

「でも、公演中に話す人間なんていないでしょ。それに、私なんかに話しかけてくる人なんて誰もいない。だから、私の自殺はほぼ九九パーセント決まっていたようなものだった。だから、公演も、これが本当に最後だって思ったら、なんだかすごく悲しいようなほっとしたようなで。私、いつのまにか泣いてたんだよね。客席の端っこで。そうしたらね、横からすって、ハンカチを渡してくれた人がいたの」

それが何につながるのだ、と仁志は大の字のまま考えていた。一年生のときの演劇。観た覚えはあるが、結末まで思い出せない。確かあの時、自分は途中で寝てしまったのではないか、という結論にたどり着く。

「返さなくていいから、使って……その人は、最後の最後に、そう私に話しかけてくれたの。だから、私は生きようって決めた。話しかけてくれただけじゃなくて、こんな私に自分のハンカチを貸してくれた。優しくしてくれた……だから、私が生きてここにいるのは、その人のおかげだったの」

す、と仁志の鼻面に何かが差し出された。それは、青いタオル地の小さなハンカチだった。

「覚えてない？このハンカチ」

鮮やかに蘇る記憶。暗闇の中、半分寝たような、半分起きたような状態で舞台上を見ている自分がいる。そんな横で、ぐすぐすと半ベそをかいている同級生に気づいて、仁志はポケットからハンカチを取り出した。

「返さなくていいから」

ただそれは、優しさからではなかったのではないか。横で泣かれているのはうるさくて迷惑で、返さなくていいと言ったのはそれによって付きまとわれるのが面倒で……。そしてそう思ったのは、眠かったことも影響していたが、何よりその相手によるものが大半を占めていたはずだ。あの時、仁志の隣に座っていたのは……。

「いや、違う……違うよ」

嫌な予感を抱きつつも、仁志は笑った。その笑顔は引きつっていたが、本人は気がついていない。ただ、それを見る有希の表情は、口元には笑みを湛えながらも目は笑っていなかった。

「あの時、俺の隣に座ってたのは、有希じゃない」

「……じゃあ、誰？」

「あの時、俺の横にいたのは……」

その同級生は、巨体を揺らして号泣していたのだ。まるで相撲取りのような体軀を、嗚咽に合わせて激しく震わせながら、何かを我慢しているかのように引きつった声を上げて泣いていた。そのたび彼女の制服が仁志の制服を擦って、肉が仁志の体に当たって、うるさくて、面倒で、迷

惑で……。

「豚沢……」

「久しぶり、仁志君」

有希はにこりと微笑んでアルバムを掲げた。そこには、仁志のクラスメートたちの写真が並んでいた。その中で、ひと際目を引く巨漢の女。仁志は突然思い出した。

豚沢有希。通称、豚沢。入学式のときからすでに巨漢の女子生徒で、豚沢という漢字を文字で誰かが「豚沢」と言ったのがそのまま三年間のあだ名になった。彼女は暗く、教室の隅で読書をしていて、太った体を何とか小さく丸めて常に一人で過ごしていた。授業で実験等をするときも一人で机に向かっていて。そしてそれが普通になっていて、教師も見て見ぬふり。クラスメートも陰湿ないじめをするようなことはなかったものの、しかしやはり陰口というものはあるもので、特に女子の中では酷い言われ方をしていたらしい。なんとか三年間耐え抜いて卒業したが、その後の行方は誰も知らなかった。同窓会に来るはずもない。誰も、彼女の事を誘うはずがないからだ。

「じゃあ、なんでこんなことになってるんだよ……」

命の恩人である、と先ほど有希はそう言ったのだ。この状況は、その命の恩人に対するものではない。うんうん、と小さく有希は頷いて、開いてあったアルバムを閉じた。

「それからの二年半、私はずっと仁志君に支えられていたの。一人でいたって、死ぬほど苦しかったって、仁志君の姿を見れば、思い浮かべれば、私は生きていけたの。だから、卒業式にそのお礼をしようと思った。だけど……」

有希の指先が仁志の頬を伝う。ぞくぞくと背筋に妙な感覚が襲う。

「ねえ、仁志君。豚沢がね、仁志君の第二ボタン、狙ってるらしーよ」

突然声色が変化する。誰かの真似をしているらしいことは仁志にも分かった。

「なんでだよ、俺の？」

仁志の脳裏に、卒業式後の光景が蘇る。同級生の女子と、後輩の女子に囲まれて、第二ボタンをせがまれていた。当時一年生の女子と付き合っていた仁志は、その彼女にあげる約束をしていたので第二以外のボタンをあげていた。

「さすが仁志君、あんな奴にももてるんだね」

それに、仁志はなんと答えたのだったか。

「俺は……」

「マジかよ、キモ！話したこともねーのに」

高校生の頃の自分と、有希の口元が重なる。あの時、確かにそう言ったのだ。仁志が、自分自身で。

「ああ……」

仁志の呻く姿を見て、有希は楽しそうに笑った。

「その場で死んでやろうと思ったくらい。でもね、これはチャンスだとも思った」

チャンス、と仁志が繰り返すと、有希はそう、と頷いた。

「だから、卒業してすぐ、私は死んだの。太った私は死んだ。そして、ダイエットして、生まれ変わった。でね、やっと機会が巡ってきた。あなたを」

微笑んだまま、彼女が取りだしたのは薄いビニール袋だった。そして、とても楽しそうに、その袋に少しだけ息を入れて膨らませた。

「殺す機会に」

目を丸くする仁志の顔に、有希は楽しそうに少しだけ膨らませた袋をかぶせて、床に置いてあったらしいガムテープで首のあたりをぐるぐると巻いた。仁志が手足をバタつかせると、呼吸に合わせて袋が縮んだり膨らんだりする。そのたびに袋の中が白く曇った。

「なんで……？なんで！」

慌てふためく仁志を、有希はとても満足そうに、そして愛おしそうに見つめていた。

「私ね、ダイエットした時に決めたの。仁志君に、一度でも好きだって言わせてやろうって。キモいっていった私を、好きで好きでたまらないって言わせてやろうって。だからずっと、仁志君のそばを離れなかった。ずっと、一緒にいたのよ。あなたには見えなくても、卒業した時からずっと……」

しゅうしゅう、と袋の中で自分の呼吸する音を聞きながら、薄いビニール越しに有希を見た。豚沢と呼ばれていたころの面影はない。今の有希はとても楽しそうに、満足げに笑っている。

「仁志君、大好き。私だけのものになってほしかったの、ずっと。これで、私だけのものになってくれるのね」

うっとり、有希は苦しむ仁志を見つめていた。

「た、助けて……」

「苦しんで、苦しんで、死んでね。だって、私もあれほど苦しんだんだから」

少しずつ、少しずつ呼吸が苦しくなっていく。しかし、そのたびに有希は美しく見えた。

「ねえ、分かる？一度は生きる希望をくれた人に、死ねと言われる絶望感と喪失感。でもね、一度好きになった人をあきらめるなんて、人生で初めて優しくしてくれた人をあきらめるなんて、出来なかった。私は……ずっとあなただけを愛してたの」

なのに……そう彼女は嗚咽を漏らした。

「あなたはいろんな女と……許せなかった。見返してやりたかった。絶対にあんな女たちよりも私のことを愛してるって言わせたかった……」

仁志の視界が揺らいでいく。その中で、有希は泣きながら、笑っていた。意識に白い靄がかかる。

「だから、嬉しかったんだよ。私のこと、好きだって言ってくれたこと。きっと重さは違うけど、たとうわべだけでも、あなたの言葉は、嬉しかった……」

仁志の意識が白濁した世界へと吸い込まれていく。その中で仁志は声を出すこともできなくなっていた。そんな中で、

「本当に愛していたんだ」

と、伝えきれずに、意識は途絶えた。

第四話 過去の使徒

「久しぶりー！」

煌びやかな晴れ着姿の友人たちの輪に加わった瞬間、星野小夜子はまるで高校生の頃に舞い戻ったような感覚を覚えた。当時から化粧をしていた友人たちはよりけばけばしく、まるっきり化粧っ気のなかった友人たちは別人のように華やかな姿をしていた。小夜子はどちらかといえばけばけばしいほうに入るだろう。

「ねえねえ、このあとの同窓会、行くでしょ？」

「行く行く！幹事誰？」

「クラス委員長だって」

「なつかしー」

高校を卒業してまだ二年しか経っていないのに、なぜか友人たちとの再会はひどく懐かしく、色々なことを思い出させる。

「あ、あれヒコじゃない？」

「あー！本当だあ！ヒコー！」

同じクラスメートで人気のあった男が紋付袴で登場すると、それに向かって女たちがこぞって手を振る。中には近づいてきて挨拶をする者もいた。

「小夜子、トーマくんには会った？」

高校時代、いつも小夜子とつるんでいた藤岡紀子と羽野朱美が近づいてきて言った。

「ううん。来てるの？」

「来てる、来てる。ただ……ね」

紀子が表情を曇らせて朱美を見ると、朱美もその視線を避けて困ったように眉根を下げた。

「なんかあった？」

「うーん、実は……」

朱美はそう言ってからしばらく悩んでいたが、

「山城と婚約したらしーよ」

と声を低くした。

「あ……そうなんだ」

小夜子は苦笑した。自分の淡い期待が、打ち砕かれたためだった。

トーマとは、同じクラスメートの小笠原冬馬のことで、小夜子が高校三年生の冬休み手前まで交際していた恋人だった。進路の違いや、入学当初から交際していたこともあっていわゆる倦怠期というものを迎え、一度距離をおこうと別れたきり、復縁することがなかった。卒業後、小夜子たちが三年生の時に教育実習生として一年実習をしていた女教師、山城清美と冬馬が交際している、という噂が流れ、それが在学時からだったとか、卒業を期に冬馬が告白したとか、清美のほうから手を出したとか、様々な憶測が囁かれた。だが、何一つ事実が分からないままこうして成人式を迎え、小夜子は内心あんな噂は嘘で本当は冬馬も自分のことを忘れていないのではな

いか、と思っていた。

「まさか今日の同窓会さ、山城も来るなんてことないよねー？」

「うっそ、ありえないでしょ」

「でもさ、うちの学年入って実習してたじゃん？」

「私、委員長に聞いてみようか」

朱美が「委員長一っ！」と叫ぶと、遠くにいたスキンヘッド姿の紋付袴が振り返った。クラスメートだと知らなければなるべく遠ざけたいような風貌の男が三人に近づいてくる。

「あ！星野さんだ！久しぶり」

「久しぶり！委員長」

「いやー、それやめてよ。俺いつまで委員長してんの」

風貌は怖いけど、中身はなかなか世話好きで、在学時から何かと頼りにされてきた。名前よりも「委員長」が板について、今でもやはり皆に委員長と呼ばれている。

「ま、挨拶はそこそこにしてさ。今日の同窓会って幹事、委員長だよな？」

「そうだよ」

「じゃあ、先生とか呼んでるのも委員長？」

「そう。手伝ってもらったけどな」

「もしかして、山城呼んでないよね」

「あー、その件」

小夜子と冬馬の交際についてはクラス全員どころか教師たちまで周知の事実だったので、委員長は一瞬小夜子を見て苦笑いしてから、

「呼んでないけどさ」

と言いくそうに答えた。

「けどさ、ってなによ」

姉貴分の朱美が委員長の横腹をつつく。

「ついてきちゃうかも」

「はあ？」

素っ頓狂な声上がる。

「誰についてくんの！」

間髪入れず聞いたのは紀子だ。委員長は言いくそうに頭を掻いてから、

「トーマだよ」

と言った。

「なんで呼んでもいないのにくっついてくんのよ！」

朱美の怒号が響くと、周りにいたクラスメートたちが四人を振り返った。

「ちょっと朱美！声が大きい」

小夜子のそれに朱美がう、と苦虫を噛み潰したような顔をした。

「ごめん……でもマジでなんで？」

「いや、さあ。二人が婚約した話、聞いた？」

委員長は小夜子に振り返って尋ねた。ついさっき二人に、と小夜子が答えると、

「その話を、同級生に伝えたいんだと」

と委員長も半ば呆れたように言った。

「なにそれ！ただ結婚自慢したいだけじゃん！」

朱美のそれに委員長と紀子が頷く。

「やめとこーぜって俺も説得したんだけどさあ。トーマがやけにノリノリなんだよ。そんな自慢話されたところで俺たち何にも言うことないっつの」

そしてちらりと小夜子を見て、

「それに、星野さんに悪くてさ」

とぼつりと呟くように言った。

「委員長、それってもしかして、私二股かけられてたってこと？」

小夜子の言葉に委員長はかぶりを振って、

「いや、わかんないけどさ！」

と慌てた様子だった。

「ちょっと、あんた何いってんの！」

朱美がすかさずまた委員長の横腹を突くと、

「いて！」

と叫び、委員長はそのままその場を退散した。

「小夜子、気にすることないよ」

紀子が微笑むが、

「大丈夫、大丈夫。もうすっかり忘れてたし！」

と小夜子が無理に笑うと、その微笑みはぎこちなく消えていった。

「あ、もう時間じゃない？」

気がつくと、周りのクラスメートたちがぞろぞろと移動を始めていた。成人式の開場が始まったらしい。

「中入ったら一緒に座ろ！」

その朱美の明るさが、小夜子にとっては救いだった。

「えー、前途洋洋、皆さんの前には、希望で溢れた新成人としての道が広がっていると同時に、今まで自分の責任というものの大きさを……」

長い長い市長の挨拶。だが会場はしんと静まり、肅々と指揮は執り行われていた。小夜子たちの市は、近年よく問題視される新成人による成人式の暴動などが少ない市として有名だった。小夜子がちらりと周りを見渡すと、あの委員長も隣のクラスメートと小声で話をしているようではあるが、静かに式に参加していた。委員長の周りにたむろするクラスメートは皆、なるべくなら関わり合いになりたくないような髪色、髪型、言動の男が多い。

「あ、トーマくん見つけた」

紀子が小声で小夜子の前方を指差す。小夜子よりもだいぶ離れているが、左斜め前にその姿を確認できた。横を向いて、隣のクラスメートと笑いながら話しているようだった。その横顔は、交

際していた当時とあまり変わっていなかった。

「懐かしいな……」

ぽつんと小夜子が言うと、

「あんな男、忘れちゃいな！」

と朱美が小声で、しかしきっぱりと言った。

「ま、ね」

小夜子が苦笑して返したそのとき、冬馬の少し右側で、やや遠目の席に座っていた男が振り返った。誰かを探すようにきよろきよろとしている。そして、ふと小夜子と目が合うと、彼はにっこりと微笑んで小さく手を振ってきた。

「なに、あれ」

朱美も気づいたらしく、しかめ面をして小夜子と同じほうを睨んでいた。

「うちの後ろじゃないの？」

二人の視線を追いかけてから、紀子がそう言って首だけで振り返る。だが、彼に気がついているのはどうやら小夜子たち三人だけのようだった。そして、男もまだ小さく手を振っている。

「うちの誰よ！」

朱美がにやりと笑って突っ込み、私？と尋ねるように自分のことを指差す。すると、男はずっと手を振るのをやめた。

「あ、失礼ね」

「私かな」

紀子が小さく手を振り返すと、男はかぶりを振った。

「じゃあ小夜子じゃん」

朱美と紀子に挟まれるように真ん中に座っていた小夜子は、二人に同時に振り返られて少し戸惑った。

「振り返してみなよ」

朱美につつかれて、小夜子が渋々手を小さく振り返す。すると、彼は嬉しそうに先ほどよりも大きく手を振って、満足げに前を向いた。

「何あいつ。知ってるやつ？」

「ううん、全然……」

「だよねー」

そのあと、彼が三人を振り返ることはなかった。市長の長い挨拶が終わると、次は市の教育長の挨拶が小夜子たちを苦しめた。

式が終わると、学校ごとにまた集まりができて会場の周りは煌びやかに彩られた。大体の者たちが、このあと高校、大学の集まり同士で同窓会を行うのがこの市の定番だ。

「はいー！こっち、こっちー！」

小夜子たちも委員長が学校の名前と元三年B組と叫ぶほうへと集まっていた。大体の面々が揃うと、

「じゃー、同窓会会場に移動しまーす！遅れたやつはおいてくよー」

と委員長の声が響くと、どっと笑いが起きた。

同窓会会場は、成人式会場に程近い居酒屋だった。本日貸切、と店の入り口においてある看板に大きく出ている。

中に入ると、すでに料理や酒など、席の準備が整っていた。店内は皆が入るといっばいいっぱいの狭さだ。だが、だだっ広いホールなどでやるよりも交流はできそうだった。上座にはすでに教師たちが並んでいた。担任、副担任、学年主任の教師が来ていて、

「お久しぶりでーす！」

という挨拶がしばらくの間繰り返され交わされていた。

「うちらはあとでいっか。これじゃ移動するのに一苦労じゃん？」

小夜子たちが陣取ったのは入り口に近いカウンターだった。理由は注文がしやすいし、こっそりはけるときのにも楽だから、という紀子の提案だ。二次会には参加せず、このあと三人だけで飲みなおそうと成人式の最中に決めていたのだ。しかし、ここからでは上座である一番奥に移動するまでだいぶ人のかきわけないと進めない。

「人口密度高すぎ。暑くて死にそ」

それだけでなく暑れ着姿の女にとってはこの暑さと密度は辛いものがある。賢いクラスメートは着替えてあとから同窓会会場に集合という形にしているらしい。式場で見た顔が、何人か消えているのはそのせいだ。

「うちらも飲みなおすときは着替えようね。このままじゃここで死ぬよ」

紀子が手で顔を扇ぎながら言ったのに小夜子と明美も頷く。

「はいー、挨拶はもう大丈夫ですかー？」

着々と乾杯までの準備は整い、ある程度のところで上座からクラスメートたちがはけた。委員長の呼びかけに、

「まだお酒ないよー！」

という声が少し上がる。

「じゃあカウンターの人渡してあげてー。カウンターならすぐ準備できるでしょ」

委員長のほかにも仕切りがうまいものがあるので、委員長の呼びかけにうまく答えて仕切るものが声を上げる。小夜子たちはまだグラスが行っていないクラスメートに自分たちのグラスを渡した。すかさず店員がそれを見て小夜子たちに新しいグラスを渡してくれる。

「やっぱカウンター正解だね」

グラスを受け取りながら紀子がしたり顔で言う。

「大正解！あそこの店員さんカッコいいし」

カウンターの中の店員に朱美が視線を送る。向こうもそれに気がついたのか、朱美に向かって微笑みかけてきた。朱美の目がぱっと輝く。

「全員行きましたー？」

「大丈夫で一す」

まもなくして酒が配り終わり、委員長から乾杯の音頭はクラスのムードメーカーだった男に託された。

「あいつ、高校生の時の方がカッコよかったよね」

座敷で立ち上がり、グラスを持って何か演説しているらしいクラスメートに紀子が遠い目をして呟いた。

「紀子、あいつのこと好きだったんじゃないかった？」

小夜子のそれに、

「昔のことよ」

とまだ遠い目のまま紀子は言った。

「昔って！まだそんなに経ってないじゃん」

「二年以上も前のことなんか十分昔だよ」

「今でもちょっと好きだったりして」

「ないない！」

紀子がかぶりを振るのと、

「それでは！」

という音頭が掛かるのはほぼ同時だった。三人も慌てて視線を戻す。

「かんぱーい！」

「かんぱーい！」

皆のグラスが高々と上がり、それまでしんとしていた空気が一転ざわめきが変わった。友人同士で固まり思い出話に花を咲かせる者もいれば、先ほど挨拶が済んでいなかった者たちは教師たちの周りに集まって順に酌をしている。

「あ！どんなもんかと思ってたけど、料理おいしいわ。意外！」

紀子が口に運んでいたのは鶏もも肉の香草焼きだ。他にもスズキの塩釜焼き、定番の焼き鳥、だし巻き玉子、ししゃもの炭火焼、サラダプレート、他にもどて鍋、海ぶどう、鮭のちゃんちゃん焼きなどもある。

「お兄さん！オーダー追加しても大丈夫ですか？」

朱美は目当ての店員を呼んでいろいろとこまめに追加注文していた。当然、店員に話しかけるのが目当てなのだが、それに気がついた委員長が、

「ちょっと羽野さん！俺に言ってよ、俺に！」

と懐具合を気にして叫ぶ。周りでどっと笑いが起きた。

「こうしてるとさ、なんかあの頃の教室に戻ったみたいじゃない？雰囲気といいさ」

焼き鳥を口に運びながらの紀子のそれに、

「そうだねー」

と小夜子は笑った。朱美は店員と話しこんでいるようだ。紀子の言葉は耳に入っていない。

「私、なんだかんだ高校生の時が一番楽しかったかも」

「私もそうかな」

小夜子は少し考えてから、紀子の言葉を肯定した。脳裏には冬馬の姿が浮かんでいた。

小夜子自身、冬馬と自分はいまうまくいっているものだと思い込んでいた。確かに進路の違いはあったが、小夜子は短大、冬馬は就職するというだけの話で、どちらかが県外へ出るから遠距離恋愛になるとかそういった話ではなかった。倦怠期というのも、お互いに興味がないというのではなく、ただ長いこと一緒に過ごしてきたために、なんとなく馴れ合いのような付き合いになってしまっていたということだけだ。あの日、冬馬から「少し距離をおいて考えよう」という言葉出るまで、小夜子はその先もずっと、冬馬と二人で過ごしていくことを心から信じていた。やっぱり二股かけられていたのかな、と小夜子は先ほどの委員長の言葉を思い出し、苦笑してグラスの酒を少しだけ飲み込んで笑った。

「あー！思い出し笑い！何か面白いこと思い出したんでしょ」

だいぶ酔いも回ってきたらしく、紀子がだいぶ饒舌になってくる。小夜子は苦笑して、

「逆逆！」

と返事をしてから席を立った。

「あれ、小夜子どこいくの？」

店員と話し込んでいた朱美も気づいて振り返る。

「うん、ちょっとトイレ」

「行ってらっしゃーい」

冬馬のことを思い出したせいか酔いが醒めてきていた。それに、よく考えてみればあまり飲み進んでいなかったのだ。クラスメートたちをかきわけて、店内の奥にあるトイレに滑り込む。中に入ると暖簾が二つあり、左が男性用、右が女性用と別れていて、手洗いの流しは一緒になっていた。

小夜子が用をたして出てくると、手洗い場で男が一人手を洗っていた。先に入っていたのかもしれない。少し離れて小夜子も手を洗うと、男も小夜子に気がついたらしく、少し顔を上げた。

「星野さん、だよな？」

ふとそう呼ばれて小夜子も顔を上げる。手を洗い終わった男は、取り出していたハンカチで手を拭きながら、

「あ、やっぱりそうだ」

と笑った。その屈託のない笑顔は少し幼い感じの残る顔によく似合っていた。

「あ、えっと……」

「覚えてない？」

覚えのあるような、ないような。決して人数の多いクラスだったわけではないので、全員の名前と顔をまだ覚えているつもりだった小夜子は戸惑っていた。凡庸とした風貌なので、記憶も曖昧なのかもしれない。

「俺、緑川。緑川良哉」

それにふと蘇る記憶。あれは紀子の言葉だったろうか。入学式の時だ。

「わー、私の好きな声優さんと苗字が一緒」

「苗字って！珍しいでしょ、緑川なんて」

それと同時に小夜子の口からは「あ」という感嘆符が洩れていた。

「思い出してくれた？」

「うん、緑川君」

「あー、やっぱり忘れてたんだね。じゃあ、さっき手を振ったのも俺だって気づいてないでしょ？」

「えっ？そうだったの？」

驚いて目を丸くすると、良哉は嬉しそうに微笑んだ。

「俺、すぐ分かったよー。星野さんのこと」

式中の時のように手を振り、

「星野さん、綺麗になったね。今のほうがすごくいい」

ととても自然に言って笑った。

「あ、ありがとう……」

言われたほうの小夜子が照れてしまい、少しはにかんで笑って見せると、良哉はそれが嬉しかったらしく同じようにはにかんだ。

「ごめんね、久しぶりに会っていきなり。でも、あの頃はトーマくんがいたからさ。あんまり話しちゃいけないと思って」

ふと、二人の目が合うと沈黙が落ちた。ドアの外では賑やかな声が響いている。二人のいる空間だけが、しんと静まっていた。

「ねえ」

最初に声をあげたのは良哉だった。ん、と小夜子が首を傾げると、

「俺が、ずっと星野さんのこと好きだったって言ったら、どうする？」

「え……？」

突然の出来事に小夜子は目を丸くした。

「実はここにいたのも、星野さんが入るとこ見て、話すチャンスだと思ってタイミングを図っていたとしたら……？」

良哉はふふ、と笑った。

小夜子が紀子と朱美のところに戻ってしばらくして、
「ね、そろそろ出ようか。もうみんな出来上がってるしさ」
と紀子が言い出した。確かに会はずでにまとまりをなくし始めている。そろそろ二次会へなだれ込む時間だろう。

「いいね。私も店員さんのメアドゲットしたし」

「え！いつのまに」

朱美が嬉しそうにカウンターの中を覗いて小さく手を振ると、向こうの方で先ほどの店員がにっこり微笑んで手を降り返していた。いつのまにか、かなり親密になっていたらしい。

「じゃー、こっそり出ましょう！」

一番出入り口に近い紀子がそう言って立ち上がろうとしたときだった。

店の出入り口が開いて、一人の女が入ってきた。気がついてる者もいれば、振り返りもしない者もいる。だが、店を出ようとしていた三人ははっきりと、その女の姿を認識していた。

茶色の、やわらかいパーマがかかった髪。猫のような瞳、すっと通った鼻、肉感的な唇、ナチュラルメイクはそれらをうまく引き立てている。細い首、派手すぎず地味すぎないスーツ、スカートから伸びた細い足。

「あっ！山城先生だ！」

男性陣がその言葉に湧いた。当時から若くて綺麗で人気のあった山城清美が、そこに立っていた。朱美は睨み、紀子は絶句し、小夜子は呆然と、その闖入者を見つめていた。

「呼ばれてもいないのにごめんなさい」

そう言って困ったように微笑んだ山城は綺麗だった。二〇になって、自分も大人の仲間入りだと、そこそこな大人に見えるようになったのだろうと思っていた自分が、いかに自惚れていたかを小夜子は思い知らされた。そして同時に、冬馬が彼女を好きになった理由も、そして婚約した理由も分かった気がした。

「清美さん、こっちこっち！」

それまで全く意識していなかった冬馬の声が耳に届いて小夜子が振り返った。酒のせいかな、それとも婚約者の登場で照れているのか、頬を高潮させた冬馬が立ち上がって山城を手招いていた。男性陣から冷やかしの指笛が鳴る。

「ちょっと報告がありまーす」

冬馬はやけに上機嫌だった。黒髪のまま、高校生のときとあまり雰囲気は変わっていない。だが小夜子が知っている冬馬よりも、今の冬馬は少しだけ大人びて、そして明るかった。

「このたび、俺と山城先生は婚約しましたー！」

おお、というどよめき。知っている人間はそれなりに、知らない人間は「おめでとう！」と口々に叫び、その場は一瞬で祝い事の雰囲気へと変化した。冬馬が隣に並んだ山城の腰へ手を回し、それにピースサインで答えている。一緒に並ぶと、冬馬のほうが背が高いんだ、と小夜子は変なことを考えていた。

「おい、ちょっとはしやぎすぎだろ。座れよ」

委員長がそうたしなめると、

「いいだろ？祝い事じゃんか」

と冬馬が山城に「なあ？」と同意を求める。だが山城は少し恥ずかしそうに下を向いて答えなかった。それを見て、小夜子は何かが急に、猛烈に心の底から突き上げてくるのを感じた。

「ごめん、私このあとパスでいい？」

「えっ、小夜子？」

紀子が振り返るよりも早く、小夜子は店を飛び出していた。着慣れない着物に脚をとられて何度も転びそうになりながら、必死で店から遠ざかろうと走った。

あの、冬馬と山城の二人の幸せそうな姿を見て、小夜子は自分がいかに冬馬のことを忘れていないか思い知らされた。

どれくらい走ったのか、気がつくとも見知らぬ通りに立っていた。ショーウィンドウに映る自分の姿を見て、小夜子は苦笑した。走ったせいで髪は乱れ、着物の裾もはだけてきている。化粧も落ちて、自分でも見ていられるものではなかった。そして、見れば見るほど滑稽で、あの二人とは似ても似つかなくて、小夜子は込み上げて来る涙を抑え切れなかった。

「どうして……」

情けない自分がショーウィンドウの中で泣いている。しかし、そのぼやけた視界に何かが移った。それは……

「ほ、星野さん……」

息を切らし、膝に手を置いて全身で呼吸をする良哉の姿だった。慌てて小夜子が振り返ると、良哉も体を起こして困ったように笑った。

「心配で……いきなり、店……出ていっちゃったから、さ」

そういう彼のスーツもひどく乱れていた。ネクタイは曲がって緩み、シャツもくしゃくしゃで、髪の毛もひどく跳ね上がっている。でもその姿は、小夜子のことを想って追いかけてくれたことを意味し、小夜子の目にまた涙がこみ上げてきた。

「緑川くん……」

汗だくで微笑む良哉に、小夜子は思わず駆け寄っていた。そして、まだ胸が激しく上下する彼の胸の中で思い切り泣いた。みっともない姿である小夜子を、良哉は何も咎めず、彼女が落ち着くまで抱きしめて、乱れた頭を撫でていた。

「辛かったね、よく頑張ったね」

そんな言葉をかけながら。

そんな二人が交際し始めるのに、それほどの時間は掛からなかった。

小夜子にとって、良哉は冬馬の次に交際する恋人だった。人生二人目の彼氏である。冬馬は活発で、デートといえばカラオケやボウリング場が一緒になっている複合遊技場やサイクリングデートなど常に外を飛び回っていた。しかし、良哉はどちらかというとインドア派で、時折小夜子の提案で買い物をしたりもするのだが、ほとんどを良哉か小夜子の家で過ごした。二人とも一人暮らしを始めていたので、食事を一緒にとり、そのまま泊まることもしばしばだった。二人並ん

で読書をし、最新のゲーム機のある良哉の家に行けばゲームで盛り上がりたりもした。冬馬のことを引きずっていた小夜子にとって、それは新しい喜びだった。

交際が始まって三ヶ月ほどが過ぎたある日、朱美から小夜子に電話が入った。夜、仕事を終えて帰宅すると、見計らったように携帯電話が震えた。

「もしもし？朱美？」

「あ、もしもし！」

小夜子は荷物を降ろしてダイニングの椅子に腰掛けた。夕飯は外で取ってきたので、シャワーを浴びて着替えればゆっくりできる。携帯電話を耳に当てながら時計を見ると、八時をすでに回っていた。

「仕事終わった？今大丈夫？」

「うん、ちょうど家に帰ってきたところ」

バッグの中から飲みかけだったミネラルウォーターのボトルを取って一口飲み込むと、

「そう、ちょうど良かった」

と朱美から返答があった。しかし、その声にはいつもの朱美の明るさがなかった。

「どうしたの？電話なんて珍しいじゃん」

小夜子のそれに、

「うん、実はさ……」

と朱美が声を低くした。

「トーマくんが、自殺したって」

次の瞬間、小夜子は目の前が真っ白になった。次の言葉が全く思いつかない。しばらくして脳裏に浮かんできたのは、悲しいかな、最後に見た山城と二人で並ぶ紋付袴姿の笑顔の冬馬だった。

「小夜子？大丈夫？」

「あ、うん……」

やっと我に返った小夜子は、自分でも意識せずに壁のカレンダーを見ていた。この三ヶ月ちよつとの間に、冬馬に何があったのか。

「でも、なんで？」

やっとのことで出た疑問符。それに朱美は、

「わかんない。私もあんまり詳しいこと聞いてないんだ」

「そっか……」

二人の間に沈黙が落ちる。

「そういえば、ごめんね。あのあとメール返さなくて……」

同窓会を飛び出した小夜子を心配して、朱美と紀子の二人からはメールが何件か入っていた。

だが、動揺してそのメールに返信できる自信がなく、そして良哉との関係も始まり、いつ連絡をしようかと悩んでいたところだったのだ。メールを返信しなかった上に、その間に彼氏ができたことなど打ち明けづらかった。

「ううん、小夜子が大丈夫ならよかった。あれがあったから、今回のこともちよつと言いつらかったんだけど……」

「ありがとう。でも、もう大丈夫だったから」

結局、良哉のことは打ち明けられないまま、告別式に紀子も合わせて三人揃って顔を出そうということにし、告別式の会場と時間を聞いて電話を切った。

「ああ、俺も昨日聞いたんだ。告別式、俺も行くよ」

翌日の日曜日、良哉が小夜子の家にやってきていた。いつもどおり読書体勢に入っていた良哉に朱美からの電話のことを話すと、そんな返事が返ってきた。声はやはり暗かった。淹れたてのコーヒーを良哉に手渡すと、

「ありがとう」

と心なしか悲しそうに微笑んだ。小夜子も彼の隣に座る。

「どうして自殺なんてしたのかな。婚約までして、この前はあんなに幸せそうだったのに」
マグカップを両手で包むようにして小夜子が言うと、

「やっぱり気になるんだ」

と良哉は首だけ小夜子を振り返った。

「ううん、そういう気になるじゃないけど」

今は良哉のことだけを考えておこうと思うが、小夜子の心の中にはやはり冬馬の交際当時の姿や、この前の幸せそうな顔が蘇ってくる。それと同時に、あの山城の綺麗な横顔や、恥らう姿を思い出して切なくなった。

「遺書とかはなかったみたいだよ。俺が聞いた話だとね」

「そうなんだ」

「飛び降り自殺。自宅のマンションの屋上から飛び降りたんだって。夜」

「……」

黙り込んだ小夜子に、良哉がふっと微笑んだ。

「やっぱり気になるでしょ？」

「……正直、ね」

「うん、そうだよね……」

コーヒーの香りだけが二人を優しく包んだ。

告別式当日、三ヶ月前に会ったときとは打って変わって喪服姿で再会した三人は、

「こんなことになるなんて……」

と暗い表情で囁きあった。ついこの前まではあんなにはしゃいでいたのに、まさかこんな形で再会するとは夢にも思っていなかった。集まっていた者はそれほど多くはなかったが、高校時代の同窓生もやはり数人は混じっていた。それらと一緒に受付をし、焼香を上げて、三人は少し話しこんでいた。

「ね、自殺の理由とか、分かったのかな」

「全然何も分からないらしいよ」

朱美と紀子の声が、小夜子には遠く感じていた。心の底から湧き上がる喪失感。二年離れていたのにも関わらず、三年間一緒に過ごした時のほうが昨日のここのように思い出された。

「遺書、なかったんだって」

小夜子がぼつんという、

「え？本当に？」

と朱美が目丸くした。

「どこで聞いたの、それ」

紀子が的確についてくる。

「実は……」

すると、小夜子の目に、三人のほうへ歩み寄ってくる人影が映った。それは、喪服に身を包んで、寂しげに笑う良哉だった。

「小夜子、大丈夫？」

それに気づいて朱美と紀子も良哉に顔を向ける。そして二人は訝しげに彼の顔を見て、

「あの、あなたは？」

と尋ねたのは紀子だった。

「覚えてない？緑川だよ」

良哉が微笑む。しかし、紀子と朱美は固まったままだ。

「あのね……二人にはどう言おうか迷ってたんだけど」

ぽつぽつと小夜子は良哉とのことを二人に説明した。その間、二人は何も言わず黙って小夜子の言葉を聞き、良哉も優しく微笑んだまま小夜子の横に立っていた。小夜子は正直、二人に責められると思っていた。連絡しないまま、自分だけが幸せになろうとしていたのだ。

だが、紀子と朱美は説明が終わってすぐに微笑んだ。

「そっか、良かった」

紀子の言葉に、小夜子は目を丸くした。

「怒らないの……？」

「なんで怒んのよ！むしろ、うちら嬉しいよ。小夜子、口では忘れたとか昔のことだなんていつてたけど、今まで彼氏ずっと作らなかったでしょ」

「だから新しい彼氏でもできれば、また少し変われるのにねって、あの同窓会の後朱美とも話してたの。だって、あのとき飛び出していったのだからトーマくんと山城のこと、許せなかったからでしょ？」

小夜子は図星をつかれて俯いた。それに朱美が苦笑する。

「口では強気なこと言ってたってさ、うちらどれだけ一緒にいると思ってんのよ！小夜子のこと、分かってるつもりだよ。だから、嬉しい！やっとなんか立ち直れそうかもね」

「こんな形で吹っ切られる形になっちゃったけどね」

紀子と朱美の言葉が嬉しくて、小夜子は大粒の涙を両目からこぼしていた。それにいち早くハンカチを差し出してくれたのは隣の良哉だった。

「ありがとう……」

気を利かせてくれたのか、良哉はずっとその場から離れた。朱美が苦笑して泣きじゃくる小夜子の頭をぽんぽんと撫でる。

紀子は、その場から立ち去っていく良哉の背中を見送っていた。

告別式から数日が経ち、小夜子たちはゴールデンウィークに突入していた。その日は良哉が小夜子の部屋へ来ることになっていたの、小夜子は家で昼食の準備をしていた。約束の時間までは一時間くらい。食事の後は出かけることになっている。珍しく、映画でも見に行こうか、という話になったのだ。夕方からの話題作を見て、夕飯は外で済ませて小夜子の家に帰宅し、良哉はそのまま泊まる予定になっていた。

昼食はフレンチトーストのプレートだった。パンの上にベーコンエッグを乗せ、同じ皿にマッシュポテト、ブロッコリーを茹でたもの、スイートコーンのバター炒めを盛る予定だ。それにオニオンコンソメスープとサラダがつく。副菜は準備ができているし、サラダもすでに出すだけにして冷蔵庫に入れてある。あとはパンと、上に乗せるベーコンエッグを焼くだけだ。スープの様子を見ながら、小夜子は携帯電話も気にしていた。昼食の準備をするために、家に到着する少し前にメールを入れてくれるように良哉に言ってあるからだ。

しかし、少ししてドアチャイムが鳴った。慌ててスープをかけていたコンロの火を消し、もう一度携帯電話を見る。メールも電話も着信はない。時間は約束の三十分前だ。

「連絡してっていったのに……」

口ではそう言いながら、内心は心を弾ませながら玄関へと小走りしていた。

「はい」

笑顔で玄関を開け、小夜子は次の瞬間、その笑顔を凍りつかせた。

「こんにちは」

そこに立っていたのは、山城清美だった。

「山城……先生」

だが、小夜子を驚かせたのは山城の変貌のしようだった。あの幸せそうな空気は何所へ行ったのか、艶のあった黒髪はぱさぱさに細り、美しかった顔は痩せこけて頬骨が浮くほどになっている。目は落ち窪んでクマができ、かろうじて保たれている口紅が顔の中で異色を放っていた。その唇もぱさついて、めくれ上がったささくれに口紅が引っかかってまだら模様になっている。

「ごめんなさいね。突然。お母様に聞いたらここに一人で住んでるってお話だったから」

「あ、はあ……」

どう返答したものか迷い、小夜子の口からは妙な言葉しか出てこない。山城は一度気味の悪い笑みを浮かべてから、

「ここで話すのもなんだから、中へ入ってもいいかしら」

と図々しくも小夜子の中へ押しやって、玄関の扉を閉めた。かちゃん、という金属音がした。

「あ、あの……」

小夜子が戸惑っていると、

「少し話があるのよ」

といって山城はかまわず部屋の中へ入った。慌てて小夜子はそれを追う。彼女はリビングに入り、何も言わずにテーブルの前においてあったクッションに座った。

「あの、話って……？」

「まず座って」

鋭い声に気おされるように、逡巡したが小夜子は山城の向かいに座った。いつもなら、山城の座っているところに良哉が座っているはずだった。

「先生、あの……」

「あなたが殺したんでしょう」

山城は机に視線を置いたまま、小夜子を振り返らずに、しかしはっきりとそう言った。小夜子はそれに目を丸くして、固まったままの山城を見た。

「先生、何のことですか」

山城は虚ろな視線をゆっくりと持ち上げた。そして、小夜子の目を見て笑った。

「だって、あなたしかいないのよ。冬馬を殺す理由がある人なんて」

山城の言葉に冬馬、という響きが加わって、小夜子はなお混乱した。

「冬馬くんを、殺す？だって、冬馬くんは自殺じゃ……」

「遺書も何も残していなかったの。私にさえ何も言ってくれなかったの。そんな自殺なんてある？彼は絶対に自殺に見せかけて殺されたのよ！だから……」

山城は不気味に笑った。そして、

「あなたのことを調べたのよ」

と言った。小夜子はその形相の恐ろしさに後ずさった。

「冬馬はね、卒業してすぐくらいはあなたのことをずっと引きずっていたわ。何も説明せずに別れてしまったことも、私とのことを打ち明けずに卒業してよかったのかどうかも、ずっと悩んでいたの。でも、やっと、私のことだけを見つめてくれるようになった。だから婚約もした。なのに！」

髪を振り乱し、山城は自分で言った言葉に興奮して、そして激昂しているようだった。小夜子はゆっくりとあとずさりながら頭を振った。

「私は、何も……！」

「私が新任で就いたとき、あなたたち二人は先生たちも公認するような素敵なカップルだったものね。成績も優秀で、二人ともカッコよくて綺麗で……あのまま幸せに結婚して、ずっと一緒にいられると思っていたんでしょう？」

その言葉が小夜子の胸に突き刺さる。高校生当時の思い出が、胸の中に溢れてくる。そのとき、確かに小夜子は信じていた。あの幸せな二人の時がずっと続いてくのだと。そして冬馬の「愛してる」という言葉が、嘘ではないのだと、小夜子は純粹に信じていた。

「でもね、彼のほうから私に告白してきたのよ」

委員長のあの言葉が思い出される。自分だけが知らない。自分だけが、どこかで切り離されている。小夜子はそう感じた。

「冬馬は、あなたよりも私のことを愛していると言っていた。あなたとは別れるから、本気で俺と付き合ってほしい、ってそう言ってくれた。だけど、あなたと別れるまでに半年も掛かった……」

嗚咽が混じる声。彼女の両目からは大粒の涙がこぼれ、顎を伝ってテーブルに一つ二つと雫にな

って落ちていく。小夜子は内心、泣きたいのはこっちなのに、と叫んでいた。

「ねえ、本当はまだ付き合っていたんでしょ？別れたなんて嘘なんでしょう！」

山城の声が大きくなり、だん、とテーブルを叩く音がやけに響いた。小夜子の肩がびくりと跳ね上がる。

「だから、私と冬馬が婚約したことを恨んだんでしょ……？」

す、と山城が立ち上がった。そして、持っていたバッグの中から何かを取り出し、腹の前の辺りに構えた。それは、鈍い光を放つ切っ先の尖ったものだった。

「先生……？」

「あなたが冬馬を殺したのよ……」

それが果物ナイフだと気がついたときには、山城はすでに小夜子のすぐ側まで大股で駆け寄ってきていた。すんでのところで身を伏せ、転がるように山城の前から逃げ出すと、彼女はなお小夜子に迫ってきた。腹部に構えていたナイフは、今は彼女の右手にしっかりと握られ高々と掲げられている。その切っ先は迷うことなく小夜子へ向かっていた。

「先生！やめて！」

「私の冬馬を返してよっ！」

逃げようとする小夜子の髪を山城が掴み、引きずり倒してナイフを振り回す。刃先が頬をかすめて血が噴き出す。しかし痛みよりも、恐怖が小夜子を襲っていた。

「助けてっ！」

馬乗りになった山城は、にやりと笑ってナイフを構えなおし、それを小夜子に向かって振り下ろした。

「きゃあああっ！」

しかし次の瞬間、バンツという音がして小夜子に掛かっていた重さが一瞬に取り除かれた。恐る恐る顔を上げると、部屋の隅の方でうずくまる山城が見えた。

「小夜子っ！」

聞きなれた声。呆然と山城を見つめていた小夜子の視界に、黒い影が割って入る。それは、汗だくになった良哉の顔だった。

「大丈夫か！痛むところはないか！」

普段はおとなしい良哉が、息せき切って小夜子の肩を揺さぶっている。その声と顔を見て、小夜子は安心して意識が薄らいでいった。

「小夜子！」

遠くで女のすすり泣く声がした気がした。

殺人未遂の現行犯で山城は逮捕された。小夜子が意識を失っている中で、良哉が落ち着いて通報し、救急車を手配して小夜子は一晩だけ念のために入院した。その後、警察の事情聴取などを受け、冬馬との交際のことや、山城が勘違いを起こしていたことなどを事実の通り話した。そんなことを繰り返しているうちに、否応なしに冬馬のことや山城に襲われたときの恐怖におびえたが、そんな時側にいて励ましてくれたのは良哉だった。あのあと家に帰るのが怖くなった小夜子に、

「あの家、怖いだろう？しばらくはうちで一緒に暮らそう」
と真っ先に彼は言った。

「あ、今日は遅くなるよ。夕方から打ち合わせなんだ」

あの山城の事件から半年が過ぎていた。裁判などはまだ控えていたものの、普段の生活にやっと落ち着きを取り戻してきた。だが、やはりまだ小夜子は自宅に戻れずに良哉と一緒に暮らしていた。

「あ、この前の新企画の？」

広告代理店に勤めている良哉は新米ながらかなり多くの企画のサポートを任せてもらっており、ついに今度は新しい企画を立ち上げることができそうだといていたのだ。

「そう。もしかしたら長引くかもしれないから、晩御飯食べちゃって。俺、外で食べてくるから」

「うん。分かった」

「夜、一人だけど大丈夫？」

「……うん」

小夜子は少し不安だったが、それを押し込めるように笑顔を作った。良哉は心配そうだったが、

「ありがとう」

と笑顔で答えた。

その日の夜、良哉から朝言ったとおり打ち合わせが長引き、帰りが深夜になるかもしれないと小夜子にメールで連絡があった。戸締りししっかりして、先に寝てて、という言葉に小夜子は思わず微笑んだ。

『ありがとう。今夜は晩御飯食べたらずぐに寝ることにするね』

そう返信すると、すぐに『俺も終わったらなるべく早く帰るから』と返事があった。小夜子はありがとう、と心の中で返事をし、携帯電話を閉じた。

帰宅して夕飯を一人で済ませ、シャワーを浴びてくつろいでいると携帯電話が着信を知らせた。見てみると、それは紀子からの着信だった。小夜子が入院したときに、朱美と二人で駆けつけてくれたのでそれ以来だった。

「もしもし？」

「もしもし？小夜子？元気？」

「うん、元気。どうしたの？」

「あれから大丈夫だったかなって」

「うん、だいぶ落ち着いた。ありがとう」

「朱美からは連絡あった？」

「ううん、ないよ」

「そう……」

紀子はそう言うとふと黙り込んでしまった。重たい沈黙が二人を包む。

「小夜子」

「うん？」

深い沈黙を破って、紀子が小夜子の名前を呼んだ。

「緑川君とは、まだ付き合ってるの？」

「うん、今、自分の家に帰るのが怖くて……一緒に暮らしてる」

「一緒に？」

その声だけがやけにはっきりと小夜子の耳に響いた。紀子の声が思いのほか大きくなったからだろう。

「ねえ、小夜子。あのね、私、思い出したことがあるんだけど……」

「思い出したこと？」

「うん。緑川くんのことなんだけど」

ぴく、と小夜子の指が震えた。携帯電話のストラップがそれに合わせて音を立てる。何に対するものなのか、小夜子自身も分からなかった。

「緑川くん、てさ……たしか」

そのとき、電話の向こうでドアチャイムが鳴った。小夜子の心臓が喉までせりあがってくる。あの日以来、ドアチャイムの音が苦手になっていた。あの音がすると、ドアの向こうにあの日の山城が立っているような気がしてならないのだ。良哉が側にいてくれるときはまだ大丈夫なのだが、一人の時に、たとえばテレビなどから流れてきても嫌な汗を全身にかいてしまう。

「あ、ごめん。誰か来た」

「紀子……」

「また後でかけ直すね」

「待って、紀子！」

「じゃあ、またすぐあとで」

「出ちゃダメ！紀子！切らないで！」

しかし、その叫びは届かず通話終了を知らせる電子音が耳に残った。携帯電話を耳に当てたまま、小夜子はしばらく呆然としていた。

その後、紀子からの電話はなかった。

紀子の通夜はしめやかに行われた。小夜子は朱美と二人、通夜と葬儀のどちらにも参列した。紀子の両親は、

「あの子が殺されるなんて……」

と、小夜子たちが挨拶をしても暗い表情で繰り返しそう呟くだけだった。それは小夜子たちも同じ気持ちだった。

葬儀に参列していた際、紀子の殺害事件を捜査しているという刑事に声をかけられた。三人組の刑事で、

「星野小夜子さん、ですね？」

と声をかけられた。朱美が目を丸くしていたが、

「電話の件ですか？」

と小夜子の方から尋ねると、

「お話伺えますか」

と警察手帳の提示をされた。山城のことで慣れてしまい、横で感動している朱美が小夜子は少し羨ましく思った。

「藤岡紀子さんは殺害されるほんの五分前に、あなたへ電話をかけていますね」

「はい」

「そのとき、どんなお話をされたんですか」

「半年前の事件はもう知ってるんですよね？」

「ええ、もちろんです」

眼鏡の少し年配の刑事がゆっくり頷く。

「そのとき軽い怪我をして入院したので、もう大丈夫なのって聞かれました」

小夜子のお話を一番若そうな刑事が手帳に書き込んでいく。

「そのほかに、何かお話は？」

強面の刑事、と顔に書いてあるような刑事がさらに質問してくる。

「他は……何も」

嘘をついたら分かるのだろうか、と小夜子は少し迷いながら、良哉のことについて話が出たことは言わなかった。それに、強面の刑事が頷いた。

「他に、何か変わったことはありませんでしたか」

「……話しているときに、誰か来たみたいでした」

それに、若い刑事が顔を上げて強面の刑事とうなずきあう。眼鏡の刑事は、静かに小夜子のことを見つめていた。

「誰が来たのかは分かりませんか」

「わかりません。チャイムの音がして、誰かきたみたいだから、後でまたかけ直すといって電話が切れて、それで……」

紀子は電話をかけてはこなかった。かけなおすどころか、紀子はもうこの世にいなかったのだから。

「その来客は確かですね？」

「はい。チャイムが聞こえましたから」

チャイムの音を思い出し、額に脂汗が浮き出る。脳裏に、あのやつれた山城が浮かぶ。小夜子にナイフをむけ、向かってきた彼女の形相が鮮やかに蘇る。

「あの！」

朱美がぐっと小夜子の体を後ろから支えた。そして、

「友達が亡くなったんです。今日はこれぐらいにしてもらえませんか！」

と鋭く刑事を睨んだ。刑事たちは三人で目を合わせていたが、

「そうですね。気がつかずにすいません」

と眼鏡の刑事が頭を下げた。それに習って強面と若い刑事も頭を下げた。

「もし、ほかに何か思い出したらこちらまで連絡いただけますか」

眼鏡の刑事が差し出した名刺。それを受け取って、

「失礼します」

とその場を後にした。

「大丈夫？ドアチャイム、まだダメなんでしょ？思い出しちゃった？」

体を支えながら朱美が尋ねる。

「うん……でも、大丈夫……」

無理して笑いながら、小夜子は紀子の言葉を思い出していた。

「緑川くん、てさ……たしか」

あの続きは、一体なんだったのだろうか。

紀子の死から数ヶ月。未だ犯人は不明のまま、捜査は難航しているとテレビの報道で時折話題にのぼる。死の間際の電話の件や、来客があったらしいということも一部では包装されていた。おそらく、警察が情報提供を促すための手段としてマスコミに発表したのだろう。

小夜子はこの頃になると、自宅を引き払って良哉と一緒に暮らしていた。やはりあの部屋に戻る気にはなれず、半年以上を一緒に過ごしてきた良哉が、

「じゃあ、一緒に住もうよ。荷物も運んで、部屋を引き払おう」といつてくれたのだ。時間のあるときに少しずつ部屋を片付け、荷物をほとんど空にしてから大家に事情を説明すると、

「まあねえ、あんなことがあったらねえ」と気の毒な言い方をしつつも、その反面あの部屋をどう始末をつけたものかと小夜子を責めているような物言いでもあった。

「気にすることないよ」良哉がそう言って微笑んでくれると、小夜子は本当に何事もうまくいくような気がして安心した。

その一方で、紀子の最後の言葉も気に掛かっていた。あの時、紀子は何を思い出し、何を教えてくれるつもりだったのか。

小夜子の中で、それがいつもどこかで引っかかっていた。

「あ、小夜子！」

ある日、朱美から「会わない？」という電話をもらって、小夜子はあるバーにやってきた。看板には「Heaven」という店名。朱美から聞いていた店名と一緒だ。中に入ると、カウンターの中には髭を蓄えた中年の男性と、店の奥のカウンター席には朱美が座っていた。

「いらっしやいませ」

朱美の隣に座ると、マスターがそう言ってコースターを置き、おしぼりを渡してくれる。小夜子がそれを取って、

「朱美、私バーって初めてなんだけど」

と小声で言うと、

「あ、そうなの？てっきり緑川君と一緒に行ってるともんだと思ってた」

と苦笑した。

「じゃあ、マティーニください」

「かしこまりました」

小夜子の代わりに朱美が頼むと、マスターは早速ジンとベルモットのビンを後ろの棚から取り出した。

「あのさ、来るまで内緒にしてたんだけど」

「？」

朱美がグラスを傾けながらそう言ったのに、小夜子は首を傾げた。

「実はね、今日もう一人来る予定なの」

「え、誰？」

「来たらすぐ分かるから」

す、と小夜子の前にマティーニが出される。顔を上げると、マスターが、

「マティーニです」

と微笑んだ。

「ありがとうございます」

朱美が黙ってしまったので、少し居辛い気持ちを抑えつつマティーニを飲んだ。とてもいい香りがして、それだけで酔ってしまいそうな気がした。

そのまま無言で過ごしていると、ドアについているチャイムが鳴る音がして顔を上げた。そこにいたのは、黒い革のジャンパーに黒いジーンズ、革靴、夜なのにサングラスをかけたスキンヘッドの男だった。一瞬びくりとするが、

「あ、星野さん、羽野さん」

と声がすると、すぐに誰か気がついた。

「委員長？ どうして？」

サングラスを外して委員長が苦笑し、

「羽野さん、マジで俺が来ること言ってなかったんだ」

と頭を掻いた。

「マスター、俺バーボン、ロックで。ボックス席移ってもいいかな」

「どうぞ」

委員長のそれにマスターが微笑んで小夜子の後ろを手のひらで指す。後ろを振り返ると、少し暗めな照明の四人がけのボックス席がある。委員長はそこへ直行し、小夜子と朱美はグラスとコースターを持って席を移った。

「あの、どういうことなの？」

バーボンが運ばれてきてすぐ、小夜子は二人に向かって尋ねた。二人は何か事情を知っていそうだが、小夜子は全く検討がつかない。

「ここに星野さんと呼んでもらったのは……」

そう言って委員長は横目で朱美を見た。朱美もそれに視線で返す。すると、委員長はまっすぐ小夜子に向き直って、

「緑川のことなんだ」

とはっきりと言った。小夜子の動悸が早くなる。紀子のあの言葉が、また耳の奥に蘇った。

「え、なに……？」

「ごめんね、黙ってて。実は、委員長と私、同窓会の後から付き合ってるんだ」

「？」

驚きと喜びが湧き上がるが、朱美と委員長の深刻そうな表情に小夜子は自分の感情がそぐわないことに気づいて不安になった。それに、それがどうして良哉のことに関係してくるのが分からなかった。

「トーマのことも、すぐに連絡いったでしょ？あれ、俺が羽野さんにすぐ話したからなんだよ」
「ああ、そうなんだ……」

妙な過去の辻褄が合うが、それはまだ良哉のことに言及していない。

「それで？」

と先を促すと、二人はまた視線を交わした。

「トーマくんの告別式のとき、小夜子が緑川さんと付き合ってるって教えてくれたじゃない？」

「うん」

「あのあと、告別式終わってから小夜子先に帰ったでしょ？」

それに、あの告別式のことを思い出す。三人で話して、ある程度してから小夜子は先に帰宅した。良哉から、家に来て少しゆっくりしないかとメールがあったからだった。

「うん……」

素直にうなずくと、朱美は自分の頬に手をやって、

「ごめんね、こんなこと言うのは難なんだけど……私どうしても、緑川くんのこと思い出せなかったんだ。で、紀子にも聞いたの。そしたら、紀子もどうも思い出せないって」

「……え？」

その時小夜子の脳裏にはあの、良哉と再会した時に思い出した入学式の出来事が回想されていた。そして、殺される直前の電話で紀子が言っていた「私、思い出したことがあるんだけど……」という言葉。あれは、良哉のことを思い出したということなのか。

「でね、あのあと私、委員長と一緒に帰ったの。その時、もしかして委員長なら覚えてるかと思って聞いてみたんだ。でもね……」

ちら、と朱美の目が委員長を見上げる。委員長はそれに頭をさすりながら、

「俺も、その時は思い出せなかったんだよ。緑川良哉なんて」

どんよりとした沈黙がボックス席を包んだ。マスターがカウンターでグラスを扱う小さな音だけが響く。小夜子には、二人が一体何を言いたいのか分からなかった。

「で、でも……」

小夜子は自分の心臓が早くなるのを感じながら、二人の事を交互に見た。二人は小夜子に目を合わさないように、委員長はバーボンの入ったグラスに手を伸ばし、朱美はテーブルに視線を落したままだった。

「朱美、覚えてるでしょ？入学式のとき」

「……覚えてるよ。紀子の話、でしょ？」

「そう！紀子の好きな声優と、名字が一緒だって盛りあがって……」

「私もそれで思い出したの。確かに緑川良哉がいたってことは。ただ、ただね……！」

その時、カランと小気味よい音がして三人が固まった。ゆっくりと人影が近づいてくると、まず朱美の顔から血の気が引いた。それに気づいて委員長が振り返る。そして、最後に小夜子もゆっくりと振り返った。

「小夜子」

そこにいたのは、ジャケットにジーンズ姿の良哉だった。

「遅いから、迎えに来たよ」

委員長の目が丸くなる。しかし、良哉には小夜子以外の人間など目に入っていないようだった。

いつもの微笑みを浮かべ、

「帰ろう」

と手を差し伸べてきた。

「良哉、あのね、もう少しだけ……」

「帰ろう」

微笑みはそのままに、しかし口調は有無を言わせぬ力強さだった。うろたえる小夜子を見て、朱美が立ち上がった。

「ちょっと待ってよ！遅いって子供じゃないんだから！それにまだ一時間ちょっとしか経ってないじゃない！それに、こっちは話があって小夜子に来てもらってるんだから……」

すると、良哉の顔からすっと感情が消えた。無機質な無表情を朱美に向け、そして、

「一時間もかかってまだ話が終わってないの？」

と冷たい声で言った。その声は、小夜子も初めて聞いた声だった。朱美も言葉を失って固まっている。

「じゃあ、俺も聞かせてもらってもいいかな」

にこ、と良哉は朱美に微笑みかけた。だが、それに答えたのは朱美ではなく、

「ごめん。引きとめた俺たちが悪いんだ」

と委員長が立ち上がった。不穏な雰囲気を感じてか、マスターがカウンターから四人の様子を窺っている。ほかに客がいらないから何も言い出さないのだろう。

「ちょっと！」

朱美が小さく委員長に叫ぶ。だが、委員長の目は優しく微笑んだままの良哉を射抜いたままだった。一見すれば、一般客に喧嘩を売るチンピラのようなのだ。

「小夜子、帰ろう」

良哉はそう言って、小夜子の腕をとった。その手は冷たく冷え切っていた。

「良哉、待って！」

「小夜子！」

ぐいと引っ張られるようにして小夜子はバーの外へと連れ出された。その背中を朱美の声が追いかける。だが、それを遮るようにバーの扉が閉まった。

「ねえ、良哉！」

すると、それまでの力強さとは裏腹に良哉は優しく小夜子を抱きしめた。人通りのある道の真ん中で急に抱きしめられて、小夜子は抗おうとするがなかなか背中に回された両腕を振りほどくことが出来なかった。

「ちょっと……」

「小夜子、俺を裏切らないで……」

「え……」

小夜子の髪に顔をうずめて、良哉は泣いていた。そして小さく、

「裏切らないで……」

と繰り返していた。その声が子供のように震えていて、小夜子は急に彼を愛おしく感じ、自分の

腕を良哉の背中に回した。一瞬、良哉の体が震えた。

「大丈夫だよ、絶対裏切ったりしないから……」

小夜子がそう言うと、良哉は嗚咽を洩らした。しばらく、二人はそこで抱き合ったままだった。

その夜から数ヶ月は何事もなく過ぎた。良哉は変わらず優しく、小夜子は心のどこかに引っかかりを感じながらも、良哉と過ごす平穏な日常に全てを預けて生活していた。

「今日のごめんね。せっかくの日曜日なのに休めなくて……」

その日、良哉は企画の立ち上げに伴う子会社との合同ミーティングで日曜日だが出勤になってしまった。朝食を作っていると、良哉が寝ぼけ眼で寝室から出てきてキッチンの中の小夜子にそう言った。

「ううん、大丈夫。それより、早く着替えないと！着替えそこに出しておいたよ」

「ありがとう」

まだスウェット姿の良哉は、キッチンに入ってきて小夜子の額に唇を寄せた。そして、

「顔洗ってくる」

と洗面所に消えていった。

数分後、さっぱりとした顔の良哉がリビングに戻ってきた。小夜子はすでに朝食をテーブルに並べていた。今朝はトーストに目玉焼きと、簡単なミックスサラダ、コーンポタージュだった。淹れたてのコーヒーを出すと、

「うまそ」

と良哉は笑って早速席についた。

「帰りは何時ごろになりそう？」

「うーん、たぶん定時までは掛かると思うんだ。いつもどおりだと思うよ」

朝食をとりながらそんな会話をし、普段どおりの時間に良哉はスーツ姿で家を出て行った。帰る時間が定かではないので、分かり次第電話かメールをすることになった。朝食で使った皿や調理器具を片付けながら、小夜子はテーブルの上に置かれた自分の携帯電話を見つめた。今日は、絶好の機会だと思えた。

後片付け、洗濯や掃除を終わらせるともう昼を回ろうかというところだった。小夜子は思い切って携帯電話を開き、電話帳から朱美の電話番号を出してかけてみた。数回のコールの後、

「もしもし？小夜子？」

驚いた様子だった。電話の向こうで雑音がしているので外にいるのだろう。

「ごめんね、今大丈夫？」

「大丈夫、大丈夫！あ、でもちょっと待って」

がさがさ、という音から通話口を手で押さえたらしいことが分かる。小さな声で、小夜子だよ、という声が聞こえた。側に誰がいるのだろうか。小夜子の脳裏にスキンヘッドの委員長の姿が浮かんだ。

「ごめん、出先だからさ。音うるさいんだ」

「そうだったんだ。ごめんね、そんなときに」

「ううん！全然！それより大丈夫なの？」

朱美らしくない暗い声。それが小夜子を心配し続けてくれたことを意味していた。

「うん。大丈夫。今日は良哉……緑川くんもいないから」

「仕事？」

「そう」

朱美の言葉が詰まる。小夜子が話し出そうとしたとき、

「ねえ、小夜子、今から出てこれない？うちら、今駅前にいるんだけど」

と朱美が先に言葉にした。

「駅前なら近いからすぐいけると思う」

「じゃあ、エクスプレスで待ってる」

駅前にある全国チェーンのコーヒーショップを待ち合わせ場所として、小夜子は大体十分ぐらいで行くから、と電話を切った。化粧は少ししていたので、着替えてそのまま家を出た。

約束の十分程度でコーヒーショップに着いた。朱美はやはり委員長と一緒に、コーヒーショップの少し奥のボックス席に座っていた。

「朱美！」

小夜子が近づくと、背を向けていた朱美が振り返った。その表情は少し固い。

「小夜子、連絡ありがとう」

座って、といわれ、小夜子は促されるまま朱美の向かいに座った。小夜子の分のコーヒーを買っておいてくれたらしく、座った席の前にはコーヒーショップのロゴが入った紙のカップが置かれていた。

「出てきて大丈夫だったの？呼んだのは私だけど」

「うん、大丈夫。私もそのつもりで電話したの。会って、あの日の続きを聞きたくて」

小夜子がそう言うと、朱美はちらりと委員長を見た。委員長は少し目を伏せて、小さくかぶりを振った。

「そのことなんだけどね……あれ、うちの勘違いだったよ」

不器用な作り笑い。朱美のそれは、嘘をついている顔だった。

「どういうこと？」

嘘は承知で小夜子が尋ねると、次の言葉を継いだのは委員長だった。

「ちゃんと確認してさ、緑川良哉、いたんだよ。だから、俺らの勘違い。すっかり忘れちゃっただけだったんだ」

委員長が照れたように頭を掻いた。だが、その額に汗が光っている。二人が何かを隠しているの
は一目瞭然だった。

「ねえ、それ……本当？」

小夜子の言葉に二人は黙り込む。それが余計に、先ほどの嘘を際立たせた。何故そんな嘘をつく必要があるのか、小夜子には分からなかった。

「小夜子、ごめんね。でも、これだけは言わせて」

朱美は悔しそうに唇を噛んでから、

「緑川くんとは、早く別れたほうがいい」

とはっきりと言った。

「それ、どういう意味……？」

あまりの言葉に小夜子はそう言ってから固まった。だが、二人は視線をカップに落としたまま何も言わなかった。その沈黙は、小夜子の心を折るには十分な時間だった。

「ねえ！ どうしてそんなこというのよ！」

「小夜子……」

「私嬉しいって、紀子も一緒に言ってくれたじゃない。なのに、どうして別れろなんていうの……」

冬馬が死んでショックを受けたとき、そばにいてくれたのは良哉だった。過去の恋人の死にとらわれている小夜子を優しく受け止めてくれたのは良哉だった。それだけではない。山城に襲われたときも、トラウマに苦しみ続けている今も、紀子が死んだときも、一番近くで支えてくれたのは良哉だった。

「もういいよ……」

小夜子は荷物をとって立ち上がった。それを追うように朱美も立ち上がる。

「ねえ、小夜子」

「もし今二人が言ったことが嘘でも、私いいよ。良哉がどんな人でもいい。だって、いつも側にいて支えてくれたのは良哉だった！ 朱美も紀子も、何かあったときだけ来て、それ以外はほとんど顔もあわせなかったし、連絡だってしなかった……その上こんな嘘つくなんて、しかも別れろなんて、朱美にそんなこと言われたくない！」

「小夜子！」

涙が溢れてきて、小夜子はそのままコーヒーショップを飛び出した。大切な友達に裏切られたショックが小夜子の全身を埋めていた。そして、わざわざ電話などかけるのではなかったと、真実を知ることよりも残酷だった現実に後悔した。

その後、朱美とは連絡をすることなく、良哉とは交際を続けた。一年後、小夜子と良哉は結婚を前提に、少し広い部屋へ引っ越すことになった。

「じゃあ、片付けよろしくね」

「うん、あとは細かいものだけだからね」

ある休日。一人前に企画を任せてもらえるようになった良哉は、休日返上して仕事に行くことも少なくなかった。そしてその日も良哉は出勤し、残された小夜子は引越しを目前にして荷物の整理をする予定だった。

「さてと」

荷物をまとめてから掃除をすればいいか、と小夜子は早速荷物をまとめ始めた。大まかなものはほとんど片付けて使っていない部屋に詰めてあるので、あとは寝室の本棚の中身や、良哉が使っている仕事用のデスクの上をまとめ、最後の日まで必要なものを最低限出しておくだけとなっていた。

「本棚からやろうかな……」

本棚には良哉の仕事関係の本や、趣味で集めている小説がぎっしりと詰まっている。小夜子はあまり本を読むほうではないので、自分で買った雑誌などはすでに荷物にまとめてしまっていた。本棚に向かい、上から順にダンボールへと詰めていく。

小説が終わって、仕事関係の本をダンボールに詰めていると懐かしいものが出てきて小夜子は思わず表紙を開いた。それは、小夜子たちが卒業した年度の卒業アルバムだった。自分の写っているページを見つけて開くと、全員の集合写真と、一人一人の制服姿の写真が並んでいた。そこに、自分の名前や朱美、紀子、そして冬馬の名前を見つけて心がざわつく。ついでに委員長の名前が菅原真だったことを写真の下の名前欄を見て思い出した。

「緑川、良哉……」

アルバムの中に、良哉はやはり笑って写っていた。小夜子は心の中で、やっぱりちゃんと良哉はいたじゃない、と呟いていた。しかし、違和感を覚えて集合写真を見直した。そこに写っていた良哉は、全員の笑顔の中にはおらず、写真の右端に四角く写りこんでいた。

「集合写真のとき、休みだったんだ」

だがふと思い出す。二年前の記憶だから定かではない。しかし、小夜子の記憶の中に、在学中の良哉の記憶が一切なかった。良哉の話題が上がって唯一覚えていたのは、あの入学式のときに話した紀子との会話だけだった。同じ教室で、同じことを学び、同じ催事に参加していたのに、そのときの良哉の姿が思い出せない。良哉とは在学中の思い出をたくさん話している。時折してくれる、当時の教師の物まねだって上手だった。だから今まで、一緒に同じことを体験してきたつもりでいた。しかし、よく考えてみれば。

その場にいた良哉の姿を思い出すことができない。

そう思って卒業アルバムを見てみると、行事の際の写真がたくさん掲載されている。入学式、部活動紹介、体育祭、文化祭……その写真に写らない生徒はたくさんいる。小夜子もその口だ。唯一写っていたのは、文化祭の合唱コンクールで歌っている写真。それも数人がアップで写って

いるので、生徒全員が写っているわけではない。部活の写真も掲載されているが、帰宅部であった良哉はそれには写っていないと以前話したことを思い出す。しかし、その写真を見ることで思い出されるいろいろな思い出の中に、クラスメートはたくさんいる。顔や名前もほとんど覚えている。なのに、良哉だけが、その中にいない。

「私、思い出したことがあるんだけど……」

「私どうしても、緑川くんのこと思い出せなかったんだ」

紀子と朱美の声が交互に耳に蘇る。小夜子の中で、二人の言葉の辻褄が合い始める。

紀子の思い出したことは、良哉が高校時代の記憶の中に全く存在していないことではないか。

朱美が思い出せなかったのは、記憶の中に良哉がいないせいではないか。

ただ、引っかかるのは、朱美があのとすぐに、緑川良哉がいたことは思い出した、といったことだ。卒業アルバムには確かに写真と顔が掲載されている。朱美の言うとおり、緑川良哉は存在した。

なのに、一体何故、良哉が記憶の中にいないのか。

そのとき、ポケットで良哉からの着信を教える着信メロディが鳴り出した。心の違和感を抑えて電話に出る。

「あ、もしもし？俺だけど」

「うん、どうしたの？」

「仕事で必要な資料をさ、家のパソコンで編集してたからそのまま忘れたみたいなんだよ。で、それをメールで至急送ってほしいんだ。アドレスは今メールに入れたから、そこに資料添付して送ってくれる？」

「うん、分かった」

「資料の名前は……」

良哉の読み上げた資料の名前を聞いて、じゃあすぐに送るね、といって電話を切った。そこで、今話した様子が不自然ではなかったか、いつもどおりになっていたかと小夜子は少し不安になった。

仕事用のデスクは寝室にあったので、パソコンもその上だった。本棚から移動して、パソコンを起動する。数秒してデスクトップ画面が立ち上がったので、言われたとおりの保存フォルダを開き、該当の資料を見つけてからメールソフトを起動した。良哉の言ったとおり、新着メールが一件届いており、タイトルには「会社のメアドを送信しました」と書かれていた。そのメールに返信する形で新規メールを作成し、先ほどの資料を添付して送信する。送信完了しました、というメニューが出たので良哉に電話をする。

「もしもし？今送ってくれたでしょ」

「うん！もう見たの？」

「見た見た！ありがとう。助かったよ」

「資料、それであってるよね」

「大丈夫。ごめんね。変なこと頼んじやって。片付けはどう？」

「今、ちょっと手をつけたところ」

「一人で荷造りさせちゃってごめん。俺の荷物は別に整理しないでそのまま箱に詰めちゃっていいからさ」

「うん、分かった」

「帰り、やっぱり遅くなりそうだよ。相手先がちょっと押しててさ。今日上がってくるはずの資料がまだ上がってきてないんだ。それがこないと話が進まないから、午前中いっぱい待ちだね。ミーティングは午後からになりそうだよ」

「そうなの。じゃあ、夕飯はどうしよう？」

「もしかしたら遅くなるかもしれないから、五時過ぎても俺から連絡なければ先に食べちゃって」

「うん、分かった」

「あ、ごめん！相手先戻ってきた。じゃあ、また後で連絡できたら連絡するね」

「うん」

慌しい感じで電話は切れ、小夜子は携帯電話を閉じた。そして、パソコンを閉じようとマウスに手を伸ばしたとき、ふとデスクトップ上のあるフォルダが目に入った。新しいフォルダという名前のものだ。興味本位で開いてみると、そこには日付のような数字がついたフォルダが大量にあり、その一つを開いてみると画像データが大量に入っていた。サムネイル表示にして見ると、そこには小夜子の姿があった。それは到底、本人の了解を得て写したものではない写真が、大量に保存されていた。

「なに、これ……」

そしてその数字の中に、忘れられないものがあつた。それは、紀子の命日になったあの日のものだった。恐る恐る開いてみると、そこには小夜子の写真のほかに、帰宅する紀子を遠めに写した写真が並んでいた。嫌な予感が、小夜子の脳裏にこびりついて離れない。日付はさらに遡り、ある日の日付がついたフォルダを開いた。そこに写っていた人物を見て、小夜子の予感はほぼ確信へと化した。

「冬馬くん……」

紀子と同じ、望遠で撮ったらしき写真。エスカレータを降り、廊下を通り、部屋のチャイムを押し、山城に出迎えられる写真が、それぞれ一枚ずつ。最後の写真は、二人の笑顔が印象的だった。

冬馬も、紀子も。殺されたのか。良哉に。

背筋に冷たい汗が流れる。ぼうっとしている場合ではなかった。小夜子は慌てて、机に置きっぱなしだった携帯電話をとり、リビングに戻って自分のバッグを取った。そして、散らかしっぱなしだったがそのままにして部屋を飛び出した。行く当てはない。だが、あそこにはいけないという、危険な信号が小夜子の体を突き動かしていた。

そして、小夜子は走りながら携帯電話を操作して朱美の電話番号を出していた。もうずっと連絡を取っていない。見放されていないかという不安が募る。

「もしもし……？」

不安げな朱美の声。しかし、それは小夜子にとって今一番安心できる声だった。

「朱美……ごめん、私が間違ってた」

「小夜子、今どこにいるの？」

だが朱美のそれには答えず、小夜子は一気に捲し立てた。

「私、思い出した……高校生の頃、良哉を見た覚えがないこと。それだけじゃない。高校生の頃の、彼の姿が、私一切思い出せない……！名前は覚えてるのに、彼のことを見た記憶が、三年間一緒に過ごした記憶がない！」

息を切らしながら説明する小夜子に、

「落ち着いて、小夜子！」

と朱美が電話の向こうで叫ぶ。

「ねえ、朱美もそうなんですよ？紀子もきっと、そうだったんですよ？紀子はきっと、もっと違うことに気がついて、思い出して……紀子、きっと良哉に殺されたんだ……！」

「小夜子、ちょっと待ってよ！話が飛びすぎ！紀子が、どうして緑川くん……」

「紀子だけじゃない……冬馬くんも、自殺にみせかけて、良哉に……」

「ねえ、小夜子？聞いて！」

朱美がこれまでにないくらいヒステリックな声で叫んだ。唐突なそれに、小夜子も走るのをやめて立ち尽くした。

「あの日は嘘ついてごめん。でも、今小夜子の話聞いて、話す気になった。あの時嘘を言ったのは、あのバーで会ったあと、手紙が届いたの。脅迫状よ」

「脅迫状……」

日常では聞きなれないそれに、小夜子は思わず呟いていた。

「これ以上、星野小夜子に関わるな。緑川良哉の身辺を調べたりすると、藤巻紀子と同じ目に遭うって、書いてあった」

「……それって……」

「緑川くんが犯人だって言うなら、頷ける話よね？」

「……」

「だから本当のことを話すことができなかったのよ。あの日、呼び出して本当はきちんと話しておこうと思った。その脅迫状のことも。でも……知ってる？」

「……なにを？」

「あの日、エクスプレスで会ったとき、窓の外に、緑川君がいたんだよ」

「……うそ……」

「だから、私たちも怖くて言えなかった。あの時小夜子が泣いて飛び出していった後、緑川くん、笑ってこっちに手を振って、小夜子の後追って消えたんだよ」

盗み撮りされた大量の写真。それは、良哉が小夜子をずっと付け回していたということだ。

「そんな……」

「でもね、小夜子。私が話したいのはそんなことじゃないの」

朱美の声が深刻さを増す。雑踏など、小夜子の目には入っていなかった。耳に入ってくる朱美の声が、鼓膜に響く。

「緑川くんてね、私たちが入学して少ししてから、死んだんだよ……！」

小夜子の思考は完全に破壊された。思い出していなかった、唯一の事実はそれだったのだ。しかし、死んだ同級生のことを何故覚えていないのか……。

「緑川くん、入学してすぐに行方不明になってさ、何ヶ月かして、自殺してたのが見つかったんだよ。遺書が残ってて、それに、小夜子に振られたから、死ぬって書いてあったって……」

「私が、緑川くんを？」

「先生たちが気を使って、遺書のことを伏せてたんだって。委員長が緑川君のことを思い出したとき、先生に聞いてくれたの」

「そんな……だって、私、緑川君と話したことだって……」

「ないよ。話したことなんて、なかった」

そんな声が出て振り返ると、そこにはスーツ姿の良哉が微笑んでいた。その微笑みは、今の小夜子にとっては恐怖でしかなかった。

「言ったじゃないか。トーマくんがいたから、話しかけられなかったって」

小夜子の手から携帯電話が滑り落ちる。通話口から「小夜子！どうしたの！」という朱美の声が聞こえた。

「あ、あなたは……一体、誰なの……？」

「緑川良哉だよ」

「だって、死んだっ……て」

「そう、みんなの記憶の中で、俺は殺されたんだ。俺は、自殺未遂だったんだよ」

「自殺、未遂？」

良哉は優しく微笑んだまま、顎を持ち上げて見せた。そこに、引き攣れた後が見えた。

「それは、アトピーの跡だって……」

「首を吊った時にできた痕」

首をゆっくりと降ろした良哉の表情は優しいままだった。

「自殺した。それだけで、みんな俺が死んだと思った。死んで、おしまい。誰ひとり、俺に連絡してくれる奴なんていなかった」

ゆっくりと良哉が近づいてくる。そして、小夜子の携帯電話を拾って通話終了ボタンを押した。

「遺書書いたのに、それを読んだのは親と、教師と、警察。教師はそれを黙ってた。遺書のせいで、学校は退学になった。俺は、殺されたんだ。みんなの記憶の中で」

良哉は自分の頭を人差し指でさし、小さく声に出して笑った。

「中学生の時、俺すごく苛められてて。必死に勉強して、同じ中学の奴らがいない学校に入ろうって決めて。その入試の時、君を見たんだ」

手が、ゆっくりと小夜子の顎に伸びる。思わず後ずさると、良哉は寂しそうだった。

「とても綺麗で、可愛くて。絶対入学して、君と一緒に過ごすんだって、ずっと思ってた。な

のに、すぐにトーマなんかと付き合っ、て、すごく幸せそうで。俺のほうで絶対早く君の事を好きになったのに、どうしてあんな奴と付き合うのかって、毎日苦しかった」

優しい微笑みで少しづつ泣き顔に変わって行く。伸びている手が、思わず体の動きを止めた小夜子の顎に触れた。

「ずっと君に話しかけたかった。ずっと君に触れたかった。トーマに向ける優しい笑顔を、俺に向けてほしかった。なのに、君は全然気がつかないで、俺のことなんて目にも入っていないくらい幸せそうで、だから……！」

指が少しづつ、顎から頬へ、鼻へ、目へ、額へ、前髪へ……。しかし、小夜子は恐怖で動くことが出来なかった。

「俺は、死のうと思ったんだ。でも、自殺した直後に見つかっちゃった」

小夜子に伸ばした手の反対で、良哉は自分の首の、引き攣れた痕をさすった。

「苦しかったんだ……すごく苦しかった。呼吸が出来なくて、目の前がちかちかして、頭がぎゅっと締めつけられたようになって、穴という穴から何かが流れて落ちていくような、そんな感覚があった。でも、意識が真っ白になって、その中で、君が笑っていて。最後に君が俺に向かって笑ってくれたことが本当に嬉しかった。だけど、現実は残酷だったよ。命は助かってしまって、ほんの一瞬だけクラスメートだった奴らには忘れられて、遺書に君のことを書いたことは教師に握りつぶされて、君も俺の事を忘れた。いや、俺は殺された……」

良哉の目から涙がこぼれた。すれ違う人たちが二人を振り返る。しかし、今二人は、二人だけの世界にいる。過去と、今を彷徨っている。

「同窓会に俺が混じっても、誰も気がつかなかった。俺の名前すら、出てこなかった。でも、君が、俺の名前を思い出してくれて、とても嬉しかった。ほんの一時でも、俺だけに微笑んでくれた。俺だけを愛してくれた。とても嬉しかった……」

「じゃあなんで……？」

小夜子の言葉に、良哉は顔をくしゃくしゃにしたまま首を傾げた。彼女の言葉は震えていた。

「なんで冬馬くんを、紀子を殺したりしたの……？」

その瞬間、良哉の顔は、あの冷たい表情へと変化した。小夜子に触れていた指が、首まで降りてくる。

「君の気持ちが、まだトーマに残っていたからだよ。あいつはあんなに幸せそうに笑ってた。隣に山城なんか連れて、あの場に君がいることなんて知りもせずに、あんなに嬉しそうに。あの時、君は店を飛び出していった。その君の気持ちが、俺には痛いほど分かった。だってそれは……」

冷たい微笑み。その手が、小夜子の首をゆっくりとつかむ。

「自殺した時の、俺と同じだから」

まるで小夜子の首に、良哉と同じ痕があるように思えた。良哉はゆっくりと、自分の首の痕をさすりながら、小夜子の首の同じ部分をさすった。

「藤岡さんはね、俺のことに薄々気が付き始めてた。それだけじゃないよ。トーマを俺が殺したのかもしれないことにも、気が付き始めてたんだ。それを、君に話そうとしてた。冗談じゃないよ

。せっかく君が俺のことだけを見て、俺だけに気持ちを預けてくれようとしているのに。せっかくトーマが君から消えていたのに！」

良哉の絶叫が響くと、周囲の人間が異常に気がつき始めた。二人を遠巻きに見ている。だが、二人はその視線には気が付いてなかった。二人の世界は、今数ヶ月前の過去へ、数年前の過去へ遡っている。二人の時間は、現在とは異次元にあった。

「君は俺のことを裏切らないって言ったよね？絶対裏切らないって言ったよね！」

「やめて……良哉」

「俺の気持ちは変わったりしないよ。トーマみたいに、ほかの女と浮気したりしない。絶対小夜子のことを裏切らない！だから……ずっと一緒にいてくれるよね？」

良哉はゆっくりと小夜子の首に両手を回した。そして、優しく微笑んだ。それは、悪魔の微笑みのように見えた。

「俺たち、ずっとずっと一緒だよ」

「良哉……」

「愛してるよ、小夜子。これからも俺たちずっと、一緒だ」

トウルルル、トウルルル……

「ただ今、電話に出ることができません。ピーという発信音の後に、お名前とご用件をお話してください」

ピー

「あ、もしもし？小夜子？朱美だけど、どうしたの？途中で切れちゃうし、かけても出ないし…
…何かあったのか心配です。メッセージ聞いたらすぐ電話して」

プツツ……ツーツー……

第五話 禁断の果実と蛇

「ベッドはこの辺りでいいですか」

引越し屋の青年が二人がかりでベッドを寝室に運び込んでいた。ダンボールを抱えたまま、
「あ、もう少し奥に！二つ並べたいので！」

と私が返事をする、

「わかりましたあ」

と言う声の後によいしょ、という掛け声があがった。ダンボールを下ろし、二人の行く先を見ながら、

「壁にくっつけちゃっていいですよー」

と声をかける。

「こんな感じで？」

「そう！もう一つは、その隣に」

「分かりました」

それがマニュアルなのか、二人は爽やかに微笑んでまた一階へと降りていった。一人だけになった寝室をぐるりと一度見回して、私は少し伸びをした。

中古の二階建て4LDK、一軒家。新築ではなかったが、夢のマイホーム。結婚して十年間で貯金を重ね、やっと手に入れた。ローンこそあるにすれ、手に入ったからには期待が膨らむ一方だ。

「理子、まだ荷物残ってるぞ」

夫である佐伯康一が不満げにそう言って、持ってきたダンボールを音を立てて床に置く。

「ああ、ごめんなさい。すぐ行きます」

「……」

返事はなく、そのまますたすたと寝室を出て行く。機嫌が悪いのではなく、昔からこういう性格なのだ。だが、十年間の結婚生活の中で言葉を多く交わさなくとも済む生活を送ってきてしまったために、康一の口数はまた極端に減ってしまった。ほとんどは、私が一方的に話して彼は黙って聞き役に徹し、話が済むとまた自分の世界へと帰っていく。だがそんな生活にもなれ、私たちはそこそこ快適に暮らしていた。

荷物の搬入が終わり、引越し屋が帰るとすでに昼食の時間になっていた。引っ越してきたばかりで何も作れないので、店屋物を頼み昼食を済ませた。

「よし、じゃあ近所のご挨拶に行きましょうか」

私はすでに用意してあった挨拶回り用のタオルの包みを玄関に準備し、渋々ながらついてくる夫を少し気にしながらまずは右隣の家へと向かった。挨拶をする予定の家は右隣の原宅と、向かいの岸部宅、はす向かいの岩崎宅の三軒だ。

「あら、やっぱり留守かしら」

原、と表札の出ている横のインターフォンを何度押しても返答はなかった。玄関前の駐車場に車

がないから、もしかしたらどこかへ出かけているのかもしれない。仕方なく次に岸部宅へ回った。こちらは在宅で、少しふっくらした中年の女性が出てきた。

「あの、向かいに越してきた佐伯と申します。これ、ご挨拶と思いまして……」

「あら、ご丁寧に！岸部といいます。ここの地区の自治会の班長をしているの。ゴミの出し方とか曜日とか、分かるかしら？」

「いえ、それが全然……」

「そうよねえ。じゃああとで詳しく載ってる冊子があるから持って行ってあげるわね。佐伯さんとはお子さんはいらっしゃるの？」

「いえ、まだ夫婦だけです」

「あら、そう。お子さんがいらっしゃるお宅はほら、学区とかいろいろあるでしょう？その辺りはじゃあまだいいわね」

「ええ、ありがとうございます」

「うちも夫婦二人なの。子供は二人とも県外の学校に通わせてるものだから、長期の休みに入らないと帰ってこなくて。わからないことがあったら何でも聞いて頂戴！」

「はい。ありがとうございます。これからよろしくお願いします」

「こちらこそよろしくお願いします」

朗らかそうな女性でよかった、と私は少しほっとしていた。前に住んでいたマンションでは隣の住人がどんな人間かもよくわからないで生活していたので、こういった近所付き合いがきちんとできるか不安だった。

次の岩崎宅も女性が出てきた。こちらも中年女性だったが、岸部とは違ってほっそりとした上品そうな女性だった。

「うちも夫婦二人なの。娘はもう嫁いでいるからほとんど帰らないのよ」

岸辺夫人としたような話を少しして、岩崎宅をあとにした。

「このあたりは夫婦だけの家が多いのか」

それまでほぼ無言だった康一がそう言って、岸部と岩崎の家を振り返る。中年夫婦の笑顔が思い出される。

「静かでいいか」

と、また独り言のように康一が言った。

「そうね……」

ただ、それに私はあまりいい返事をする事ができなかった。

十年間、まったく子供を作らなかったわけではない。七つ歳の離れた康一とは、私が二三歳のときに結婚した。すでに三〇を過ぎていた夫の両親からは、早く孫をと結婚したときから言われ続けてきた。だが、五年を過ぎた段階でまったく子供ができないために検査を勧められ、結果私の妊娠しづらい体質のためだということが分かった。それについて、康一の両親だけでなく、私の両親も当然のように嘆いた。特に康一の両親の嘆きようはひどく、

「できる治療があるのなら色々試してみなさいよ。あなたの体しだいなんだから」

と、不妊治療に関するパンフレットや病院の本などを会う度渡してくるほどだった。だが、康一

自身はそれに関しては何も言うことはなく、

「そうですか」

と無表情に、医師に答えた横顔を私は一生忘れないだろう。

貯蓄もそれを聞いて一時やめようと思ったくらいだ。将来生まれる子供のために子供部屋を与えてやりたくて、康一には書斎を、私には家族で集まる理想のダイニングを作りたくて、しかしそんな夢を一瞬で壊されて、私はひどく気を塞いだのだ。そんな私を支えてくれたのは康一の一言だった。

「不妊治療なら、環境を変えるのがいいかもしれないよな」

自分の家を持って、いつでも子供を迎えられる環境を整えたなら、もしかしたら子供ができるかもしれない。それに私の体もそれに応じて変わるかも知れない。時間は掛かるが、最近が高齢出産だって珍しくない。そう思わせてくれたのは、康一の言葉だった。

「ありがと、康一さん」

突然のそれに、康一は戸惑ったようだった。眉間に皺を寄せ、首を傾げる。それはいつもの調子なので、

「なんでもない」

と言って自宅に戻ろうとした。

「あ」

康一がそう言って振り返ったので、私もそちらに視線をやると、ちょうど隣家の原宅にシルバーのファミリーワゴンが駐車しているところだった。

「あ、ちょうどよかったわね」

駐車し終わるのと同時に、私たちはその車の横へと進んだ。中からまず、三十代後半くらいに見える女が出てくる。どうやら私たちのことがなんとなく分かったらしく、

「隣に越された方ですか？」

と笑顔で尋ねられた。ふんわりとパーマの掛かった茶色い髪を後ろで一つに結び、さっぱりとした化粧をしている。目鼻立ちは整い、実際よりも若く見えるのだろうか、と私は少し羨ましく思った。

「はい、佐伯といいます。先ほどご挨拶に伺ったんですけど、お留守だったんですね」

「そうだったんですか！ すいません」

彼女はそう言って、ぺこりと頭を下げた。それに合わせて私もう礼を返す。

「原といいます。よろしくお願いします」

「こちらこそよろしくお願いします。お隣なので、何かとご面倒おかけするかもしれないですが……」

「いえいえ、もしよかったらなんでも声をかけてください。うちで分かる範囲でよければ相談に乗りますから。あ、そうだ、あなた！ 浩介！」

運転席から出てきたばかりの男がそれに振り返った。こちらは四十代ぐらい。背が高く強面で、私は一瞬萎縮していた。服装はサマーセーターにシャツ、スラックスといういでたちだ。

「夫です。あなた、お隣に越されてきた佐伯さん」

「どうも、原です」

「佐伯です。よろしくお願いします」

「それで、こっちが息子の浩介です」

後部座席から出てきた中学生くらいの男の子がそれにぺこりと頭を下げる。そしてすぐ、いくつかの買い物袋を手にして、車から玄関へと向かってしまった。

「ちょっと浩介、きちんと挨拶しなさい！すいません、ちょっと人見知りする子で」

「難しい年頃のお子さんですもんね。おいくつぐらいなんですか」

「十二歳で、小学校六年生なんです」

「あ、そうなんですか！私はてっきり中学生かと」

「あいつは妙に落ち着いてますからね。おい、俺鍵開けてくるぞ」

そう言って、原の主人は一度私たちに向かって軽く会釈してから荷物を持って玄関へと向かった。ドアの前で、浩介が手持ち無沙汰に鍵が開くのを待っている。

「俺も先に戻るぞ」

話の最中にも関わらず、原主人が消えたことで安心したのか康一はそう言って残りのタオルの包みを持ってさっさと自宅へ戻ってしまった。

「すいません！あの人ったら……」

「いえいえ。それより、佐伯さん、下のお名前は？私は美紀といいます」

「あ、理子といいます。理科の理に、子供の子」

「理子さん、ね。あ、突然ごめんなさいね。佐伯さん、て呼ぶとご主人と混じっちゃうでしょう？だからって、佐伯さんとこの奥さん、て言うのも失礼じゃない？だから、下の名前で呼びたいんですけど、いいかしら？」

「ええ、私はかまいません」

「そう？よかった。私のことも美紀、って呼んで。これからお隣同士なんだし、仲良くしましょ」

最初の態度よりも少し緊張を崩した様子で美紀がそう言った。

「よろしくお願いします」

私はすっかり渡しそびれていたタオルの包みを渡して、自宅へと戻った。

引越しから数日が経過し、自治会に参加したり、回覧板のまわし方などを美紀から教わったりしてやっと近所付き合いの初歩を踏み出していた。岸部夫人や岩崎夫人とはあまり交流がないのだが、美紀とはこの数日ですっかり意気投合し、安売りをするスーパーの場所や、彼女がよく行く喫茶店などへ一緒に行ったりしていた。

そして今日は、昼食を一緒にどうかと言われ、美紀の家へやってきていた。互いの家へ行き来するのはこの数日間でも頻繁で、夫の留守中に親睦を深めておくのよ、と美紀は横断半分よく言っていた。

「あ、これおいしい！」

「そうでしょ、そうでしょ？ここのお惣菜すごくおいしいの！理子さんにも教えたくって。今度一緒に行かない？」

昼食は、美紀がよく行くというデパートの地下食品街にある総菜屋の惣菜数品だった。昼食プレートというらしく、その店のオリジナルで毎日数品の惣菜が日替わりでプレートになって売っているのだという。

「今日は理子さんが来るからお皿に盛りなおしちゃったけど、プレートのままでもお弁当みたいで可愛い。洗って別の料理乗せても使えるのよ」

肉じゃが、真たらこの糸こんにゃく和え、ブロッコリーとおからの炒め物、海老のチリソースなど、和洋折衷色々な惣菜がたくさん並ぶテーブル。茶碗に盛られているのは炊き込みご飯だ。これは昨日の晩御飯の残りなんだけどごめんね、と美紀が出してくれたものだ。

「炊き込みご飯もすごくおいしい。まいたけたっぷりだとボリュームが出ていいですね」

「本当？よかった。この歳になるとすぐ太るから！炭水化物を減らしてきのこでボリューム出せばカロリー少なくて済むでしょ？」

美紀がそう言ってウィンクしてみせる。

「えー、美紀さん、それ以上やせたらなくなっちゃいますよ！」

「あ、こう見えて脱ぐとすごいのよ！」

初めは三十代の後半かと思っていた美紀だが、よくよく話を聞いていくとすでに四十二になると聞いて私は正直驚いた。四十代には見えない若さがとても羨ましかった。食事には気をつけているらしく、この惣菜の気に入っているところも油分が少なく野菜が多いからだという。

「本当に綺麗ですよ、美紀さん」

「やだ、理子さんたら。ほめたってこれ以上何も出ないわよ」

「でも本当に。食事を気にしてるだけでこんなに綺麗でいられますか？」

「うーん、私が気にしてることっていったらそれくらいなもの。あとは、子供がいるせいじゃないかしら」

「でも、お子さんがいると逆に老けるって言いませんか？」

「そうねえ。でも私の場合は逆かしらね。子供に合わせて活動しようとするから、気が若くならうとするのよ、多分ね。四十でまだ子供が小学生ともなると特に」

「そういうものですか……」

子供ができにくい私にとっては分からない話だ。それに、子供の頃から老け顔の私にとって、いつまでも若々しくいられる女性は憧れの的だった。

「あ、そうだ。美紀さん、次の日曜日なんですけど、空いてますか？」

「次の日曜日？多分大丈夫だと思うけど」

「ご主人と浩介くんも大丈夫ですか？」

「あー、あの二人はちょっと分からないわね。でもなんで？」

「実は、うちもやっと部屋の中が片付いてきたし、美紀さんにはお世話になってるからホームパーティみたいなことをしようかって。主人とも話したんですけど」

確かに康一と話した。そのとき康一は少し眉間に皺を寄せ、

「なんで」

と珍しく尋ねてきた。私が日ごろ美紀と親しくしていることは話してあったので、お近所と家族みんなで仲良くなるにはいいでしょう、と言うと、康一は少し考えてから、

「好きにするといい」

と少し冷たく言い放った。その物言いが少し気に食わなかったが、反論したところで沈黙が落ちるだけと知っている私は、日曜日に予定は絶対入れないでくださいね、と念を押していた。その夫の態度が、少し気になってはいた。

「いいじゃない！楽しそうね。私は絶対行くわ。浩介はちょっと分からないけど、うちの旦那ならきっと暇だし」

「よかった！私の料理なんて口に合うか分からないけど……」

「理子さんの料理、私は好きよ。この前ご馳走になった煮物、うちですごく好評だったんだから」

「あの時は作りすぎちゃって。私、どうしても料理ってたくさん作っちゃって……」

「わかるわ、その気持ち。二人だと中途半端だしね。うちはほら、大食漢が二人いるし。多少作りすぎても一回でなくなっちゃうけど。あ、だから日曜日はたくさん作っておいてね。浩介も来るとなると、すぐなくなっちゃうわよ」

「そうね、じゃあ色々考えておきます。リクエストとかありますか？」

「うーん、リクエスト……この前の煮物はおいしかったけど、今度は洋食も食べてみたいわね。野菜たっぷりの！何かあるかしら」

「そうですね。なら、十二品目グラタンとか」

「おいしそう！サラダは聞いたことあるけど。じゃあ、それをリクエストしておくわ。大皿でたっぷりね」

「分かりました。お口に合うといいんですけど」

「そうそう、大きなお皿とかお鍋とかある？理子さんのところ二人だから。食器とかそういうの足りなかったら言って。うちはほら、息子の友達とかも来たりするから色々揃えてあるし」

「あ、ありがとうございます！じゃあ早速で申し訳ないんですけど、グラタン用の大皿を」

「ね、ほら。うふふ。じゃあ帰るときに持って行って！私のリクエストだしね」

明るく話し上手聞き上手である美紀とはいつもこんな調子でぽんぽんと会話が弾む。妊娠のこ

とや、それに対する康一の両親とのことなど色々思い悩むことも多く、またそれを康一と話すこともできず、一人悶々と生活していた頃に比べると一八〇度生活が変化していた。まだ子供がでにくい体であることは打ち明けていないが、康一があまり話し好きでないことや、結婚した時の話などは少しずつするようになっていた。

「それにしても、ご主人よくホームパーティのことOKしてくれたわね」
食後、二人で片づけをして美紀の入れてくれた紅茶を飲んでいると、美紀が思い出したように言った。

「え？」
「だって、理子さんとこのご主人、そういうの嫌いな感じじゃない？あ、ごめんなさい！私の勝手な思い込みだけ」

それに康一の横顔が脳裏に浮かぶ。その横顔は、あの病院での無表情な能面のような横顔だった。心根まで冷たいわけではない。だが、人付き合いや会話が苦手なのは事実だ。私が美紀と親しくしている、と日中の会話を思い出して話そうとしても、

「そうか」
と一言で終わらせてしまう。そういわれてしまうと、私もどうしても次の言葉が継げなくなってしまう。

「美紀さんの言うとおりのあんまり人付き合いが好きなほうではない人だから」
そう言って私が笑うと、それは自分が思っていたよりも苦々しい笑みだったらしく、
「大変よね。挨拶しに来たときもちょっとそんな感じはしたんだけど」
と美紀が困ったような目をしてそう言った。だがすぐに笑顔を取り戻し、
「でも、きっと本当は優しいのよね」
と期待を込めたように声を弾ませた。

「たしか七つ離れてるのよね？」
「ええ、そうです。私が今年で三十三だから、主人は四〇に」
「で、結婚して十年でしょう？お付き合いの期間を含めるとどれくらい？」
「二年付き合って結婚したので十二年になりますね」

そう、と美紀は難しい顔をして顎に手をやった。そしてしばらく思案するように目を閉じてから、

「でも、十年も経つと男も女も変わるからね。特に男はだらしなくなってくるのよ。それに、妻を女としてみなくなるから。面倒なことはあいつに任せとけばいいか、ってなってくるのよね。うちもそうだもの」

私のカップに紅茶がなくなっていることに気がついて、美紀がポットから注いでくれる。暖かい紅茶のいい香りが立ち上る。

「うちの旦那はびっくりしたと思うわよ。実はね、うち、できちゃった婚なの」
「えっ、そうだったんですか！」

あまりにも意外な告白に素直に驚くと、美紀が苦笑して紅茶を飲んだ。そして、
「そう。だから、うちはもう結婚してすぐお母さんになっちゃったわけ。女としての期間はすごく短かったのよ。だから、本当は理子さんところちょっと羨ましいかな」

「羨ましい……？」

「ええ、だって理子さんはまだ妻、でしょう。母、ではないわけよ。妻、と母、ではまた違ってくるのよ。それに、子供がいないと自由な時間も多いいじゃない？二人きりで過ごすことだってできてるわけだし。子供のいる十年と、いない十年の夫婦の密度って、違うと思うのよね」
だがそれは私にとっては少しショックだった。子供のいる生活に焦がれて、一時は本当に自分を追い詰めてきた心を、否定されているような気がしたのだ。

しかし、ここでそれを言って美紀を困らせても仕方がない。それに、今ここで言いたくないと思い、

「そういうものかしら……」

と曖昧に相槌を打った。

「子供がいなくてよかったとか、そういうわけではないのよ。ただ、やっぱり女として生まれてきたんだもの。妻とか母とかそういった喜びとは別に、女としての喜びって大切じゃない？」

美紀の言葉を、私は初めてうまく消化することができなかった。

オーブンから取り出したグラタンの焦げ目をチェックし、それをダイニングテーブルへ運ぶ。テーブルにはすでにサンドイッチや大盛りのサラダ、ミネストローネ、パスタ、カナッペやコンソメのゼリー寄せなどがところ狭しと並んでいた。鍋掴みを取って、今度は食器棚から今日のために買ってきたとりわけ用の小皿とスプーン、フォークなどを取り出す。

「あ、おはよう」

二階から降りてきた康一が、テーブルの上を確認してから、

「ああ」

とだけ言う。まともな挨拶はここ五年はしていないだろうか。それでも、今日は楽しくなる日だ。私は嫌な顔が出ないように笑って、

「もうすぐ原さん来るのよ。あなたもそろそろ座っていたら？」

というと、

「分かった」

と洗面所へ消えた。着替えはもう済んでいたの、約束を覚えてはくれていたようだ。

十二時を少し回ったところでインターフォンが鳴った。康一はリビングのソファでくつろいだままである。来客は原だろうか、モニターには出ずにそのまま玄関に向かった。魚眼レンズで覗くと、原一家が見えたので扉を開けた。

「こんにちは！」

「こんにちは！今日はお招きいただいて」

まずそう挨拶したのは原の主人だった。その隣に美紀、後ろに浩介が俯きがちに立っていた。大人ばかりの集まりに子供を呼ぶのはかわいそうだったろうか、と浩介が少し心配になった。

「これ、よかったら一緒に出して。うちも呼ばれるだけじゃ悪いと思って」

美紀がそう言って差し出したのは、この前ご馳走になった総菜屋のパーティオードブルの小さいものだった。

「理子さんの手料理の中に私の料理が並ぶのはちょっと恥ずかしくって。料理かぶってないかしら」

「そんな気にしなくても！でもとってもおいしそう。早速一緒に並べますね」

「あ、ご主人お酒はお好きですか？」

原主人がそう言って掲げたのは、私もよく知る銘柄のワインだった。

「こんな高価なお酒！」

「いえ、うちも実はもらいもので。こいつはワインがダメなんです。だからもし佐伯さんがお好きなら一緒にどうかと思って」

「ほら、理子さんはワイン好きって言ってたでしょう？ご主人はどうか分からないけど、よかったら。本当はワイン好きって聞いたときにもう思いついてたんだけど、内緒にしてたの」

「ありがとう！主人もワインは好きだから喜ぶわ。あ、上がってください」

「お邪魔します」

まず夫婦二人が先に上がり、リビングへと入っていった。中で康一と挨拶が始まったらしく賑や

かになる。遅れて上り框に脚をかけた浩介は、

「あ」

と言って私を振り返った。割と整った目鼻立ちは美紀譲りだろうか。改めて並んでみると身長が高く、私が小柄なせいもあるが浩介の方が高かった。

「どうかした？」

人見知りするのだと美紀から聞いていたため、私も少し遠慮がちになってしまうが、そう尋ねると彼はいつから持っていたのか紙袋をずっと差し出してきた。

「持ってきてくれたの？」

「……シュークリームです」

ぽつんと言って、じっと私の顔を見ている。

「ありがとう。あとでお茶の時に出しましょう」

私も笑って返事をする、浩介はずっと視線を一度下に落としてから、リビングへと入っていった。中で「何してたの！」という美紀の声が聞こえた。

「いやあ、佐伯さんが意外と飲める人でびっくりです」

ホームパーティはなかなかの賑やかさで、原一家が尋ねてきてからすでに三時間が経過していた。男二人は、美紀たちが持ってきてくれたワインを空け、次に用意しておいた日本酒を片手にすっかり出来上がっている。私たち女性陣はそこそこに飲みながら、料理の補充などそこそこに動き回っていた。康一も妙に機嫌がよく、原主人と日本酒を片手に日本人作家の小説の中身で盛り上がっている。久しぶりに見る康一の楽しそうな姿が嬉しかった。

「よかったじゃない、理子さんのご主人。うちの旦那と意気投合みたいよ」

リクエストされた十二品目のグラタンをおいしそうに頬張りながら、リビングのソファで飲みなおし始めた二人の男たちを見て美紀が笑う。

「このまま夕ご飯もここでどうですか？」

私のそれに、

「えー、悪いわよ、そこまでしてもらったら」

と美紀が顔の前で手を振る。

「でも、あそこまでお酒入っちゃったら帰るの億劫じゃないですか？一応、それを見越して晩御飯もそのままでできるようにしてあるし」

酒は用意してあったので、こういう事態になることは分かっていた。なので、すぐに夕飯にできるよう、私は朝から鯛飯の支度をすでにしてあった。土鍋に鯛を放り込んで、出汁で炊くだけなので準備も楽だし、途中経過さえ気をつけていれば出来上がりも楽しい。汁物を少し出せば十分おなかいっぱいになるだろう。

「そうなの？じゃあ今日は理子さんに甘えちゃおうかな」

少し酒が回ってきているのか、美紀は目元を赤く染めて笑った。

大人が盛り上がる中で、浩介は一人、康一が書斎から持ってきた写真集を眺めていた。かなり分厚い本なので、じっくり目を通していかかなり時間のかかる代物だ。世界各国の動物や自然

を撮り集めたもので、世界的にも有名な写真家が出したという。私は少し目を通したことがあるのだが、まだ全てのページを見てはいなかった。

「おもしろい？その本」

美紀がトイレに立ち、男二人が盛り上がっている横で黙々と本を読みふける浩介に話しかけると、

「はい」

と簡単な返事が返ってきた。私も少ししか飲んではいないが、子供には十分匂いが分かるだろう。なるべく近すぎないように近づいて、コップにサイダーを注いで渡した。

「ありがとうございます」

コップに気が付き、浩介が丁寧に頭を下げる。礼儀正しいが声は硬い。なんだか昔の康一を思い出し、思わず微笑んでいた。

「今日読み終わらなかったら持って帰って。多分、うちのお父さんもしばらく読まないだろうから」

だが、浩介は一瞬考えてから、

「大丈夫です。家に、同じものがあると思ったから」

と言った。

「え？」

思わぬ言葉に私が尋ねると、

「お母さんの持ってる本の中に、同じ本があったと思うんです。でも、見せてもらえなくて」と困ったように説明して、また本に目を落とした。

その写真家の写真が好きになったのは、康一がまだ若い頃、その写真家の個展に行ってからだということを付き合っているときに聞いた。あまり写真に興味のなかった私に、康一にしては珍しく熱心に話してくれたことを覚えている。先ほど浩介にその本を差し出すときもその話をしていた。その様子を眺めながら、

「ご主人もあの写真家が好きなのね」

と美紀が。

そのときは気に掛からなかった言葉が妙に耳に引っかかる。美紀との会話を思い出してみても、その写真家の話をしたことはない。そして、原主人も写真家のことは知らないと言っていた。そして美紀も、その本を知っているとは一言も言っていなかった。

「そう……」

何故美紀がそれを隠すのか、分からなかった。もしかしたら浩介の見間違いかもしれない。別段気にすることでもない、と熱心に写真に目を通す浩介に私は少し微笑んだ。

その日、結局原一家は夜の六時まで過ごした。少し早めに出した鯛飯も評判がよく、私も嬉しかった。何より、浩介が「おいしいです」といつてくれたことが嬉しかった。それは、康一が思わぬ笑顔を見せてくれたときの喜びに似ていた。

「すっかり長居しちゃってごめんなさいね」

「とんでもない！うちも久しぶりに賑やかで楽しかったです」

「また飲みましょう」

「ええ！是非！今度はうちでもやりましょう！なあ」

すっかり出来上がった原主人が機嫌よく美紀を振り返る。

「もう！調子に乗って飲みすぎよ！」

「ああ、そうだ」

康一が一度リビングに戻って、例の写真集を持ってきた。

「持っていくといい。ゆっくり見たいだろう？」

一瞬、浩介が私の顔を見たのが分かった。それにどう答えたものか迷ったが、

「よければおうちでゆっくり見て。まだ読み終わってないでしょう」

と、私は咄嗟に美紀が持っているらしいことを言うのはやめた。

「……ありがとうございます」

浩介は少し俯きがちにそう言って、康一の手から本を受け取った。

「よかったな！浩介」

原主人が機嫌よく言う横で美紀が、

「本当にいいんですか？汚してしまうかもしれないし……」

と康一に尋ねる。

「いいんです。むしろ、君が持っているほうがいいかもしれない」

康一の言葉が少し引っかかった。それは浩介も同じのようで、写真集を手にしたまま、康一を見て首を傾げた。

「本も好きな人間の所にあるほうが嬉しいだろう」

言い訳のように付け足した言葉に、

「すいません」

と原の主人が小さく会釈した。美紀もそれに習った。

その様子がなんだか他人事のように思えて、私は一人置いていかれたような気がしていた。

それから数日後、美紀から浩介を夜の間だけ預かってくれないかと頼まれた。

「ごめんなさい、その日は私が同窓会なの。旦那は仕事で深夜になるらしくて。夕飯は用意していくし、あの子も六年生だから大丈夫だとは思うんだけど、ちょっと様子を見に来てくれないかしら」

そういう事情なら、と私は快諾した。夕飯も準備するのが大変ならば、うちで用意するからというとうと、

「助かるわ。それなら美容室から直行できるから。お願いしてもいい？」

ということで、その日は浩介に私のところへ帰宅するよう伝えておく、ということになった。

そして、当日。浩介がいつ来てもいいように買い物は午前中に済ませ、掃除も全て終わらせて昼食をとり、少しゆっくりしていると夕方にはインターフォンがなった。出ると浩介が一人、やはり俯きがちに立っていた。

「こんばんは」

「お帰りなさい。どうぞ、あがって」

スリッパを用意してやると、お邪魔しますと小さく言ってスリッパを履き、私についてリビングに入った。

「荷物は適当に置いていいから、洗面所で手を洗ってきてね。この前使ったから場所は分かるでしょう？」

「はい」

リビングのソファの横にバッグを置き、浩介が廊下へ出て行く。落ち着いた性格に整った容姿が大人びて見える。

ローテーブルにアイ스티ーとシュークリームを出していると浩介が戻ってきた。テーブルのシュークリームに気がついたらしい。

「あ、これ。この前のとってもおいしかったから買ってきたの。浩介君がお使いで買ってきてくれたんですってね」

ホームパーティを開いた日、遠慮がちに差し出されたあのシュークリームの礼を美紀に言うと、

「そうそう、あの子にしちゃ珍しく、お土産持ってくなら俺が買ってくるって言ってくれたの。だから任せたらこのシュークリーム。あの子のお気に入りなのよ」

と教えてくれたのだ。だから、今日も夕飯までのおやつとして買ってきておいたのだ。

「浩介君が好きって聞いたから。この前は本当にありがとう」

だが、浩介はうん、と小さく頷いただけでソファに座るとまずアイ스티ーを飲んだ。

「ガムシロップはいる？」

「いえ、大丈夫です」

「そう？シュークリームも遠慮しないで食べてね。晩御飯は、うちのお父さんが帰ってきてからだからもうちょっと待ってて」

「はい」

少し居心地が悪そうだったが、まだ一回しかきたことのない家で緊張するのは当たり前だ。私は

すぐに夕飯の支度に取り掛かった。今夜のメニューは、美紀から聞いていた浩介の好物というハンバーグだった。

「ただいま」

康一が帰宅し、浩介が来ている事を言うと、

「そうか、今日だったか」

と少し声を弾ませた。康一にしては珍しい反応だったが、やはり子供は好きなのだろう。それを考えると、私が子供を生みにくい体であることが急に思い出されて切なくなる。

「リビングにいるからいってあげてください。すぐ夕飯です」

「ああ、分かった」

康一の洗濯物を預かり、洗面所の脱衣かごに入れる。ポケットに何か入っていないか確認していると、ふと違和感があってそれを取り出した。それは紙のメモ。走り書きが書かれている。

「帝国ホテル、四時……ミキ」

康一の職場から帝国ホテルまでは徒歩五分ほどだ。待ち合わせなどで使われることはよく知っている。だが、その最後の「ミキ」という言葉が引っかかる。今「ミキ」と聞いて、私の中で変換されるとしたら「美紀」しかない。

「まさかね。ふふ」

だが、その紙を捨てることもできず、私はエプロンのポケットに忍ばせた。少し動揺で手が震えている。拭いきれない妙な予感を抱えたままキッチンへ戻ると、リビングにはすでに康一の姿があった。浩介の隣に座り、二人でまた本を眺めている。私の気配に気がついて、康一が顔を上げた。

「遅かったな」

「え？そうかしら……」

ぎこちなく微笑んだのが自分でもよくわかる。だが、康一は私のそれよりも浩介との話が楽しいらしく、また本へと視線を戻した。

「これがすごく綺麗なんだ。日本だとは思えないだろう？」

その本はまた写真集らしく、遠めに綺麗な夕陽が映った写真のようなものが見えた。だが、私はそれよりも先ほどの走り書きが頭から離れず、ハンバーグを焼きながらずっと「ミキ」の二文字だけを追いかけていた。

夕食が終わり、私が片付けている間に浩介を先に風呂に入れた。背丈が大きいので、パジャマ代わりに康一のTシャツとジャージを渡した。

浩介が風呂へ行ってしまうと、リビングには康一と私の二人だけになった。洗い物をしながら、先ほどのメモのことを問いただすか悩む。康一はそんな私の気持ちに気づくわけもなく、先ほどから浩介と一緒に見ている写真集をまた開いていた。

「この前の写真家の写真集？」

メモの事を聞けるわけもなく、私がそう尋ねると、

「ああ」

と簡単な返事があった。

「もしかして、この前買ってきた本？」

「浩介くんがくるって聞いてたからな」

康一の機嫌がかなり良いことが分かる。珍しく笑顔でそう言って、

「古い作品だが、とてもいい写真が載っているんだ。浩介くんも気に入ると思ってね」

とまた写真に目を落とした。こんなに子供が好きだったとは思わなかったので、康一の意外な一面を見た気がして嬉しい半面、やはり私の体の事が悔まれた。

「お風呂、ありがとうございます」

しばらくすると、浩介がタオルを首にかけた姿で現れた。康一のパジャマ代わりの服がぴったりだ。

「服、ちょうどよかったみたいね」

「はい」

「じゃあ、次入ってくる」

康一がそう言ってソファから立つ。

「着替えはもう置いてありますから」

康一はそれを聞いてからリビングを出て行った。

「お水、飲む？」

「あ、はい」

浩介にミネラルウォーターの入ったコップを渡す。まだ乾き切っていない髪から水滴が落ちる。コップに口をつけた姿が、服装のせいだろうか、康一に似ていて苦笑した。

「？」

それに気がついたらしい浩介が首を傾げる。

「ごめんなさいね。ただ、パジャマがうちのお父さんののでしょうか？お父さんにちょっと似ている気がして。そんなわけないのにね」

私の言葉に、浩介がTシャツをちよつとつまんで「あ」といった。意味がわかったのだろう。

「うちのお父さんもね、浩介くんのことが好きみたい。よかったら今日みたいな日じゃなくても遊びに来てね」

「……はい」

少し照れたように俯いて、小さくそういうとソファに戻っていった。遠目に浩介を見て、やっぱり康一に似ていると思った。

「ごめんなさいね！遅くまで」

着飾った美紀が訪ねてきたのは夜の十時を過ぎるころだった。よそ行きの髪型に、ほっそりした体型を包むスーツ、香水と酒の混じった匂い。

「いいえ、主人も楽しかったみたい。よかったらまた遊びに来てって、浩介くんにも」

そこまで話したところで、着替えを終えて荷物を携えた浩介が玄関に出てきた。その表情は無表情だ。

「浩介、ちゃんとお礼言って」

「……ありがとうございました」

靴を履いてから、浩介は一瞬私を見て固まり、それからそう言って頭を下げた。

「また遊びに来てね」

それに浩介が少しだけ笑って、

「はい」

と答えた。それがなんだか嬉しかった。

「じゃあ、おやすみなさい。今夜は本当にありがとう。康一さんにもよろしく言っておいてね」
美紀はそう言って笑顔で会釈し、浩介を伴って帰って行った。

いつ、康一の名前を知ったのか、不思議だった。

浩介を預かった日から二週間ほどが経過した。その間、美紀とはあまり接触がなかった。先日の同窓会で紹介された仕事があり、それを始めたためだと美紀からは言われていた。そのため、残業などで遅くなるときには浩介を呼んで夕飯を御馳走していた。康一もまた、仕事のノルマを達成するために残業が続くようになり、浩介と二人で夕飯を取ることも少なくなかった。だが、悪い気はしなかった。浩介も次第に心を開いてくれるようになり、この二週間の間に大分笑顔を見せてくれるようになっていた。

今日は美紀は仕事が休みで在宅だった。買い物に誘ってみたのだが、

「家事がたまっちゃって！主人に何か言われる前に片づけておかないとね！」

と一日家で過ごすといわれたので一人で買い物を済ませてきた。これからも浩介を預かる機会が増えそうだということを美紀から聞いたので、今日は浩介用のバスタオルとパジャマを購入してきた。いつまでも康一のもものではかわいそうだろう。なんだか自分の子供のように思えてきて、パジャマ選びに夢中になっている自分の思い出すと苦笑が出た。

帰宅すると、まるで待っていたかのように電話が鳴った。慌ててリビングに入り、荷物を置いて受話器を取った。

「もしもし、佐伯です」

「あ、もしもし？」

聞き覚えのある男の声だ。しかし、なかなか思い出せない。ごく最近聞いた気もするのだが。

「すいません、突然。私、隣の原の」

「あ、ああ！ご主人。どうなさったんですか？」

電話越しだと少し印象が変わるが、確かにそれは原の主人の声だった。少し緊張が解けた。電話とはいえ、男の声だと緊張する。

「失礼だとは思ったんですが、昼間からすいません。あの、今近くにうちのはいますか？」
もちろん美紀が在宅なのは知っているだろう。普段から家の行き来をしていることも当然知っているので確認したのだろうか。

「いえ、今日はおうちに一日いるそうですよ。電話がつながらないとか？」

「あ、いえ。そうじゃないんです。お話があるのは、奥さんなんです」

「え？」

原の言葉に思わず聞き返す。

「奥さん、今日のご主人、何時頃に帰られますか」

「え、ああ、うちの主人は……今日から二泊三日の短期出張なので帰らないんです」

突然、電話の向こうが無言になる。何かを思案しているような沈黙が落ちる。

「そうですか……」

重苦しい沈黙の後、やっとのことで原が口を開く。

「奥さん、たぶんうちのから今日電話があると思います。浩介を預かってほしいと」

「え？あの、どういうことですか？」

「あいつ、明日から一泊二日で、この前の同窓会で会った友達と旅行に行くと言っていたんです。だから、たぶん今日中に浩介を預かってほしいって電話があると」

「あ、そうなんですか！それなら大丈夫ですよ。主人はいないですけど、浩介くんも最近は大いぶうちに慣れてくれたみたいですし」

私は先ほど購入してきたバスタオルとパジャマを思い出して声を弾ませた。いつおろすことになるか楽しみにしていたので、それが早いうちに叶って嬉しかった。

「でも、それを伝えて下さるためにわざわざ？」

私がそう尋ねると、原は静かに、

「いえ、違います」

とやや声のトーンを落とした。

「今日旦那さんがいないなら話が早い。奥さん、今夜家を出られますか？」

「今夜……ですか？」

「ええ、たぶんあいつのことだから、電話は夕方頃してくると思います。そうしたら……」

原の声を聞きながら、自分の嫌な予感がまた湧きあがってくるのを抑えた。手を裏切り返す形で、道を踏み外した。

店先の看板には「Bar Heaven」と書かれていた。中に入ると、カウンターの中の男がグラスを磨く手を止めて、

「いらっしゃいませ」

と微笑んだ。髭を蓄えた中年のマスター。

「こちらへどうぞ」

と席を勧められたので、一度店内を見回してから勧められた席に座った。

「待ち合わせですか？」

マスターがコースターを置きながら尋ねてくる。

「店内を見てらしたので」

私が驚いた顔をしたのだろう。そう説明して微笑む。

「そうなんです。もう少しでくると思うんですけど……」

「では、アルコールの多いものはやめておきましょうか」

「ええ、そうですね」

少しして出してくれたのはオリジナルのノンアルコールカクテルだった。そのあとは無言でカクテルを飲みながら、ときどき腕時計を確認した。待ち合わせの時間から、約三〇分ほどが過ぎていた。

それから五分ほどして、バーに入ってきた人影があった。マスターが声をかけるのと、私がその人物を認識するのはほぼ同時だった。

「すいません、帰り際に仕事が入ってしまって」

そう言ってそばへやってきたのは、原だった。

「マスター、ジントニック。ボックス席、あいてるかな」

「ええ、どうぞ」

原に促されて、店の一番奥にあるボックス席に移動した。少しの間無言でいると、マスターがコースターとジントニックを原の前に置いた。

「お呼びたてしてすいません。あ、今日はあいつには会社の連中との飲み会ということになっているので」

先にそう言って、彼は頭を下げた。そして、

「実は、今日話したかったのは、うちのやつと……」

言葉を少し濁らせた後、

「佐伯さんのご主人のことなんです」

とぐっと眉間に皺を寄せた。

「美紀さんと、うちの主人……？」

ぱっと蘇ったのはあの走り書きだった。嫌な予感が脳裏に浮かぶ。原は一口ジントニックを飲んでから、視線をテーブルの上に彷徨わせて言葉を探しているようだった。

「原さん？」

「……酷なことかもしれません。それでも聞いていただけますか」

「……」

逡巡。だが、それよりも知りたい想いのほうが勝った。

「お願いします」

私の言葉に原が視線を上げる。そして、持参していたバッグから、クリアファイルを取り出した。

「ご覧になれば、すべて分かります」

そのクリアファイルを手に取り、表紙を見る。そこには看板などでよく見る探偵事務所の名前があり、表題には「ご依頼内容調査報告書」とあった。目線だけあげて原を見ると、私の視線の意味を組んで一度頷いた。

そのあとはほぼ無言だった。だが、私の心は十分にかき乱された。その調査報告書には、美紀と康一の密会の写真が添付されていた。それだけでなく、この二週間で仕事や残業と偽り、二人で会っていたことが事細かく書かれていた。衝撃的だったのは、美紀と康一が腕を組んで、いわゆるラブホテルへ入っていく写真、そして出てきた写真。

読み終わったとき、やはり、という想いと、どうして、という想いが重なって溢れて、私は目の周りが熱くなるのが分かった。

「最初は私も信じられませんでした」

原はそう言って頭をテーブルにつくほど下げて「勝手なことをして申し訳ない」と謝った。

「実は、浩介を預かってもらった日」

原が暗い声で話し始めるのを、私は俯いたまま聞いていた。

「あの日、私が外回りをしていると、あいつの姿を見かけたんです。同窓会の会場とは離れている場所だったので、妙な感じがしてついていったら」

「……うちの主人と会ってたんですね？」

私の声は涙声になっていた。

「それは、帝国ホテルでは……ないですか」

俯いたままだったので、原の表情は分からなかった。だが、わずかな衣擦れの音で驚いたらしいことは分かった。

「その日、主人がメモを……持ち帰っていて……」

ああ、と溜息のような彼の声が漏れる。そして、深く息を吸い込む音がした。

「ああ、でも……」

私は両目から溢れてくる涙をハンカチで押えながら無理して笑った。そして、

「本当のことが分かってよかった……」

と原に顔を向けた。彼の顔は強張っていた。当たり前だろう。

「この二週間、ずっとどうしたらいいか、考えていて」

そう言ったところでショックは消えるわけでもない。抑えようとしても涙が溢れてくる。原の強面の顔が、悲しさと苦しさで歪む。

「すっきりして……よかつ……」

その時、テーブルの上に置かれた私の手を、暖かい何かがそっと握った。それは、原の大きな

手だった。その暖かさが妙に心に触れて、私は我慢しようとしていた涙が溢れてくるのを感じた。ハンカチで目元を抑えながら、俯くと、

「奥さん……」

と原が強く手を握った。

「俺は……」

これは、私を裏切っていた夫や、美紀に対する復讐ではない。原の気持ちが嬉しかった。康一のあの冷たい言葉や視線が、原の手の暖かさと情熱で溶けてしまう。

私たちはその日、自分たちを裏切った相手を裏切り返す形で、道を踏み外した。

「おばさん」

ぼうっとしていると、そんな声がして慌てて振り返った。浩介が、首にタオルをかけて立っていた。

「あ、お風呂上がった？お水、入れてあげるね」

どうやらしばらくぼうっとしていたらしく、手が泡だらけのことも忘れてコップを取ってしまった。

「ごめんね、ちょっとぼうっとしてて」

わたわたと慌てる私を対面カウンター越しに浩介が見ている。泡だらけの手を洗ってからコップを洗い直し、シンクに置くといつの間にかキッチンに入ってきていた浩介がコップを食器拭きのタオルを取って拭いてくれた。

「ありがとう」

冷蔵庫からミネラルウォーターの入ったペットボトルを取り出すと、拭いたばかりのコップを差し出された。

和仁……原の主人のことだが、彼と密会した翌日、美紀は何食わぬ顔で旅行へと出かけ、浩介は和仁が仕事に出ている間、うちで預かることになった。今日は遅くなるとのことで、もし深夜になるようであれば浩介はうちに泊まることになっていた。

「お父さんから連絡あった？」

浩介は携帯電話を持っていたので、もし和仁が遅くなる場合にはそちらに連絡するとのことで昨日のうちに美紀と話がすんでいた。

「いえ、まだです」

ローテーブルに置かれた携帯電話を一度チェックしてから浩介が答える。

「この時間だし、遅くなるかもしれないわね」

時計を見上げると、すでに十時を回っていた。浩介も私につられて時計を見上げる。

「眠くない？」

「いえ、大丈夫です」

「そう？あ、そうだ」

私はリビングのサイドボードから、この前康一と浩介が一緒に見ていた写真集を取り出した。それを渡すと、浩介は少し驚いたようだった。

「借りておいたの。見終わっちゃったかしら」

「いえ、続きが気になってました。ありがとうございます」

そう言って浩介が微笑む。その表情が、康一に似ている気がして少し悲しくなった。

片づけを終えてシャワーを浴びると十一時を回ってしまった。リビングに戻ると、写真集を開いたまま浩介がソファで眠っていた。こういうところは子供らしくて、つい微笑んで毛布をかけてやると、ぱちと目が合ってしまった。

「あ、起こしちゃった？」

「う……ごめんなさい……」

「？」

寝ぼけているらしく、飛び起きた浩介は両手で顔をかばうようにしてソファの端まで逃げた。そしてまた呟くように「ごめんなさい！」と言って私から身を庇うようにうずくまった。

「浩介君、大丈夫？浩介君」

「ごめんなさい！俺は浩介じゃありません！コウイチです！ごめんなさい！」

「え……？」

私が固まると、がくがくと震えていた浩介が顔をあげた。顔は涙でぐしゃぐしゃになっている。浩介らしくない表情と、その態度に私は混乱していた。

「あ……」

硬直した私を見て、浩介はパジャマの裾で顔を拭いて毛布にくるまった。

「ごめんなさい……」

小さな呟き。何が起きたのか、私の中は混乱していた。

「浩介君、ソファじゃなくて、お布団に入って寝よう」

浩介は落ち着かないようだったが、私が毛布にくるまったままでいいよ、という言葉の通り毛布にくるまったまま、二階の客室へと入った。布団はもう敷いてある。

「大丈夫、ゆっくり休んで。明日は起してあげるから……」

布団にもぐった浩介にそう声をかけると、小さくはい、と返事がした。おやすみ、と声をかけ、電気を消して部屋を出る。

リビングに戻って先ほどのことを思い出していると電話が鳴った。かけてきたのは和仁だった。

「あ、いや……この時間なら、あなたに電話をしてもおかしくないかと……」

口ごもる和仁。昨日のことが思い出され、私は感じたことのない心の揺れを感じていた。和仁の声を聞いて、安心と、夫への裏切りの気持ちがなймаぜになる。

「浩介は、大丈夫ですか」

「ええ、ついさっきお布団に入りました。遅かったかしら」

「いえ、いつも通りくらいだと思います。御面倒おかけします」

「とんでもないです」

ぎこちない会話。お互いに遠慮するような、そんな声色だ。

「あ、あの……理子さん」

理子、という響き。康一の冷たい声色ではなく、優しい、情熱のこもった声。それにより、康一

を裏切っている気持ちが強くなる。心は和仁を求めているのに。

「また、二人で逢えませんか」

思い切った一言だったのだろう。私が逡巡していると、

「すいません、やっぱり、昨日のことは……なかったことにしないといけませんね」

強面の和仁の顔が、寂しさに歪むのが目に浮かぶ。

「……私も、あなたに逢いたい……」

二人の沈黙。そこに言葉はなくても、どこかでつながっているような気がした。私は心の中で浩介のことを思った。私たち夫婦の中で、一番裏切られているのは、浩介なのだと。

それから私たちは、お互いにお互いを騙しあい、裏切りあい、そして表はうまく夫婦生活を保ちながら、そしてご近所関係を保ちながら過ごした。しかし、私の康一に対する想いは薄れ、逆に和仁への想いは強まるばかりだった。朝、康一を送り出す時、ときどき和仁が美紀と一緒に出勤するところに出くわす。和仁は電車出勤、康一と美紀は車出勤。

「いってらっしゃい」

と三人を送り出す私は、一体誰に手を振り、誰を送り出しているのか分からなくなった。

そんな生活が、半年以上続いた。

「そっか、浩介君も中学生だもんね」

すっかり冬景色の二月。美紀の仕事はこの半年で大分本格的になり、浩介をうちで預かることが増えた。康一も短期出張や接待ゴルフなどが頻繁になり、平日休日関係なく、家を空けることが多かった。それが本当に仕事や接待ゴルフなのかは分からない。それは明らかに、美紀が家を空けるときの重なっているからだ。和仁と私の関係が続いているように、康一と美紀の関係も続いているようだった。

「はい、もうすぐ制服も見に行くんです」

浩介もうちにくることが増えたせいか、大分心を開いてくれるようになった。笑顔も増え、康一との話も弾むようになっていた。

「背が高いから、きっと制服合わせるの大変よ」

カフェオレと、浩介が買ってしてくれたシュークリームをトレイに乗せてダイニングテーブルに運ぶ。こうして一緒に過ごすのがだんだん日常になってきている。あるとき美紀は「浩介は理子さんと一緒に過ごしているときのほうが自然体に見えて嫉妬しちゃうわ」と笑っていた。

「そうですか？」

「そうよ、普通の中学生はもっと小さいもの。きっとお父さんに似たのね」

そう言ってから、脳裏に和仁が蘇って私は少し心が痛んだ。私よりもずっと身長の高い和仁。そして、目の前にいるのは和仁の美紀の子供。浩介は、ただ一人の被害者。それなのに、私の前で屈託なく笑い、

「でも、これぐらいならクラスに結構いますよ」

とシュークリームを頬張った。

「最近の小学生は大きい子多いのかしら」

私はカフェオレのカップを取って、浩介がおいしそうにシュークリームを咀嚼する姿を見つめた。コーヒーと温かいミルクの香り。いつもなら、とても魅惑的な香りだ。だが、

「んっ……」

急に吐き気を覚えて私は立ち上がった。口元を押さえてトイレに走る。胃が痙攣しながらせり上がってくるような不快感。朝から何かと忙しく、何も口にしていなかったので出せるものはなかったが、便器に覆いかぶさるようにして吐き気がおさまるまでじっとしていた。

「おばさん、大丈夫？」

少し胃の不快感は残っているものの、吐き気はおさまってトイレから出ると浩介が水の入ったコップを携えて立っていた。

「ごめんなさい。勝手に冷蔵庫開けちゃった」

そう言って差し出してくれた水を受け取る。

「ありがとう……」

水を飲むと、胃に落ちていく冷たい感触が気持ちよかった。胃の不快感も大分落ち着く。だが、私の心はかなり動揺していた。

「大丈夫？」

浩介が背中をさすってくれる。

「うん、大丈夫」

そう答えながら、私はずっと心の中で激しく困惑していた。

「病院？」

翌日、朝食をとりながら康一に病院へ行ってくると伝えると、そう言って訝しげな顔をされた。

「産婦人科へ行ってこようと思って」

「産婦人科？」

康一の声が刺々しさを増す。

「環境が変わって半年よ。そろそろ一度見てもらったほうがいいかと思って……」

康一は一瞬言葉に詰まり、眉間に皺を寄せた。引っ越してきてから、康一は私に指一本触れていない。困惑するのは当然だろう。

「そうか、分かった」

コーヒーを飲んで渋い顔をしながら康一が言った。コーヒーが苦いだけではないだろう。

「今夜は遅くなるんでしたっけ……」

「ああ、たぶん深夜だ。得意先の接待がある」

「わかりました。じゃあ、晩御飯はいりませんね」

「……」

そのあとの会話は続かなかった。

康一を送り出した後、私はすぐに家を出る支度をして産婦人科へと向かった。電車に乗って駅を三つ行くと、以前検査をしてもらった産婦人科がある。近くのほうが楽なのだろうが、事情を知っている病院のほうが安心できる気がした。

「佐伯さん、お久しぶりですねー」

呼ばれて診察室に入ると、以前から見てもらっている女性の医師がそう言って迎えてくれた。年齢は美紀と同じくらいだ。柔和で患者からの評判もいい。不妊治療に関しても、よく相談していた医師だった。

「今日はどうしましたか？」

「……先生、実は……」

事情を説明すると、医師はぱっと顔を輝かせた。そして、

「じゃあ、早速見てみましょうか」

と診察台へと促した。

「佐伯さん、お入りくださいーい」

待合室で待っていると、先ほど呼びに来た看護師と同じ女性がやってきた。同じ診察室へ入ると、医師が微笑んでいた。

「先生……」

「うん、佐伯さん。おめでとう。妊娠三カ月です」

その瞬間、胸の中で何とも言えない感情が湧き出した。ずっと妊娠しないと思っていた私のおなかに、今、新しい命が宿っている。念願の私の子。だが、それは出来てはいけない子。この半年、指一本触れてはいない夫の子ではない。この子は絶対に、和仁の子……。

「先生……」

「ただね、佐伯さん。あなたが妊娠しにくい体であるということは、同時に妊娠しても流産の可能性が高いということでもあるのよ」

それは想像しない一言だった。自分の顔からさっと血の気が引くのが分かる。そして、自分でも無意識に下腹部に手をやっていた。

「だから、生まれるまでは大事にしてあげないとダメよ。赤ちゃんもだけど、もちろんあなたの体も」

嬉しかった。この予想外の妊娠は、私を喜ばせた。と同時に、生まれてはいけない子であることが心を引き裂く悲しみを浮き彫りにさせた。康一の子ができるよりも嬉しかったのがより一層、今の私を再認識させた。

私は今、和仁を一番に、愛している……。

約束の時間ちょうどに和仁はやってきた。マスターがいつものように彼を迎え、

「お待ちですよ」

と私の座るボックス席を見る。

「ごめん。待ったかい？」

「いいえ、大丈夫」

「今日は飲めないんだ、残業と言ってきたから……」

「気にしないで」

マスターはいつものようにコースターと、今日は水の入ったグラスを置いた。私の前に置いてあるものも同じものだった。

「ごゆっくり」

事情はとっくに知っているはずなのに、マスターはそう言って微笑み、席を去っていく。

「急に会いたいなんて言うからびっくりしたよ」

しかし、和仁はそう言って微笑んでいた。私から呼び出す、ということがあまりないからだろう

。

「ごめんなさい、突然」

「いや、全然大丈夫。でも珍しいから」

「……」

私はどう話したそうか悩んだ。率直に伝えればいいのだろうが、どうしてもそれが出来ない。言葉を選んでいると、

「……なにか、あったのか」

と、顔色を察してかすぐに和仁が声をかけてくれた。康一とは違う優しさ。

「……私、前に話したでしょう。妊娠しにくい体だってこと」

美紀には話していない事実を和仁にはすでに打ち明けていた。それは一番最初の時だ。そういうことになる前に、話しておかなくてはと思ったのだ。彼はそれを聞いて、辛いだろう、と力強く抱きしめてくれた。あの、康一の冷たい無表情の横顔が浮かび、それとは相反する和仁の腕の暖かさが私を一瞬にして和仁の虜にした。そして、この愛を美紀も受けていることに嫉妬したものだ。その嫉妬は、今でも心の片隅に残っている。

嫉妬できるような立場ではないのに……。

「ああ、ちゃんと覚えているよ」

机の上に置かれた私の手を取り、和仁がゆっくりと包み込む。

「もしかして、俺の子ができたのか……？」

私のそれにすぐ思い立ったのだろう。そう言って、優しく微笑んだ。

「私……どうしていいかわからないの……」

「？」

「私、産みたい……だって、あなたの子だもの。絶対に産みたいの。でも、この半年、夫とはずっと……なかったの。だから、この子が出来たことを伝えれば、私たちのことがきつとばれる。私だけが犠牲になるのはいいの。ただ、あなたとこの子に迷惑がかかってしまうのは……」
両目から熱いものが溢れ出る。同時に、心の底から様々な想いが溢れて涙と一緒に流れ出る。和仁はそれを受け止めるようにじっと私の手を包んだまま、話を聞いてくれていた。

「理子」

やっと落ち着きを取り戻したころ、和仁は静かに私の名を呼んだ。それに顔をあげると、ずっとハンカチを差し出してくれた。

「俺は、あいつと別れるよ」

思っても見ない言葉に私は目を丸くした。だが、和仁は寂しそうに微笑んだ。それはまだ、心に迷いがあるようにも思えた。

「だからといって、君にご主人と別れろとは言わない。君の心が決まっているのなら、それに従えばいい。ただ、俺は美紀とは別れるつもりだ。これは、この半年で俺が決めたことだ。君が妊娠していなくても、近いうちに打ち明けるつもりだった」

「和仁さん……」

和仁は微笑み、私の左手にそっと唇を寄せた。それは手の甲ではなく、わざと、指輪をはめた薬指のすぐ隣、小指に触れた。そして、自分の指からは結婚指輪を抜いた。

「君が持っていてくれ」

テーブルの上に、ことりという音と共に置かれた銀色の指輪。

「三日後には、あの家を出るよ。君と離れてしまうのは、少し寂しいけどね」
そう言って、和仁は優しく微笑んだ。

そして三日後、宣言通り、派手な夫婦喧嘩の後で和仁は家を出た。美紀の半狂乱になって叫ぶ声が私の家まで届いた。その時、浩介は私のところにいた。

「父さんと母さん、離婚するんだ」

浩介は他人事のように言った。そして、

「俺、出来れば父さんについて行きたかったな……」

と寂しそうに微笑んだ。それはとても深く、私の心に突き刺さった。その原因を作ってしまったのは、私なのだから。きっと。

「離婚してください」

私の言葉に、康一は表情一つ変えなかった。ただ、

「どうして」

とだけ尋ねてきた。

「妊娠しました」

その一言が、自分でもぞつとするほど冷たかった。さすがの康一も、顔から血の気が引いた。

「妊娠……だと？」

「もちろん、あなたの子じゃありません。だって、ここにきてから指一本触れなかったものね」

「誰の子だ」

「……」

私は答えなかった。

「……好きにしろ」

康一の常套句。ばん、とテーブルを叩いて、リビングを出て行った。私は少しだけ、その場で泣いた。

離婚届を書いてリビングテーブルに置き、私は自分の荷物をまとめた。思ったよりも必要な物がなくて、荷支度はすぐに終わった。ボストンバッグを抱えてリビングに戻り、今一度家の中を見回す。

すると、けたたましい着信音が部屋に響いた。電話を取ると、それは美紀だった。

「ねえ、ちょっとうちに来てくれない？」

突然のそれに私は嫌な予感がした。

「ごめんなさい……今日はちょっと」

「ね、いいの？本当に？」

美紀の言っている意味がよくわからなくて、私は言葉に詰まって黙りこむ。

「いいから、来て。ね」

意味深な笑いを残し、美紀は電話を切った。通話終了を教える電子音を聞きながら、行くか行かないか、少し迷って受話器を置いた。康一から家を出て行ってから二時間近く。荷物を持って、私は和仁が待つホテルに行くつもりだった。

数分後、私は原の表札の横にあるインターフォンを押していた。しかし、応答はない。来い
と言っておいていないということはないだろう。私は鍵の掛かっていない玄関を開けた。

「美紀……さん」

おそろおそろ家に上がり、何度となく訪れたりビングへ入る。すると、ソファに座る影を見つ
けた。こちらに背を向けているが、それは確かに美紀の背中だった。

「美紀さん」

私が声をかけても、美紀は振り返らなかった。あたりを見回すが、浩介の姿はない。今日は休日
なのに、二階の自室にいるのだろうか。

「これ、見たわ」

突然、美紀がそう言って手をすっと顔の横へ出した。その手には、何枚かの紙があった。私が近
づいて受け取るより前に、美紀はそれを床に落とした。スリッパの私の足元に、その紙が散ら
ばる。それは数枚の写真だった。写っていたのは、私と和仁が一緒にいるところや、私が産婦人
科へ入るところだった。

「探偵に頼んだのよ。そしたら、うちの旦那が違う探偵に頼んで私と康一さんとのことを調べさ
せたことも分かったわ」

美紀は自虐的に低く笑った。そして、ゆっくりと立ち上がって私のことを振り返った。その顔は
、不思議なくらい穏やかな笑顔だった。

「いいのよ、あの人と別れることは。それに、浮気相手が埋子さんでしょ？安心して別れられ
るわ」

「美紀さん……」

「だって裏切ったのは私と康一さんだものね。だからあなたたちが出来たって文句言えないもの
。あなたたちもそれを確信してしたことでしょ？」

「それは……」

「いいのよ、言訳なんて。それに、あなた妊娠しにくい体なんですって？康一から聞いたわ。そ
れが妊娠したなんて、いい話じゃない！おめでとう」

皮肉っぽく片側の口元だけを歪ませて美紀が笑う。その言葉一つひとつが心に突き刺さる。

「美紀さん、聞いて」

「だから、言訳なんて聞きたくないの。ここに呼び出したのは別に責めるつもりじゃないから大
丈夫よ。ここに呼んだのは、あなたに話しておかなくちゃって思って」

「話す……」

美紀はゆっくりとまた座った。そして、私にもソファに座るように言った。落ち着かない私は、
勧められるままソファに腰掛けた。

「話したいことっていうのはね、康一さんとのことよ」

「……」

「私と康一さんはね、浮気ではないわ。昔は本当に愛し合っていたのよ」

うっとりとした眼差しをローテーブルのあたりに彷徨わせて美紀は言った。何を言っているのか

私にはまったく分からなかった。

「私ね、和仁と康一と、同時に付き合っていたことがあるの。今から十二年前の事よ」

「……！」

康一のことを呼び捨てにし始めたことで、美紀が過去にさかのぼって話していることはすぐ分かった。だが、私は急なその話についていけなかった。

「もちろん、康一との付き合いのほうが長いよ。二年くらいかしら。和仁とは一年くらい。だからね、その時は浮気相手が和仁だったの。でもね、おなかに子供が出来たのよ」

「……浩介君……ね？」

「そう。どちらの子かは半分くらいの確率だった。だから、私は康一を捨てたの。だって、康一は年下で、年収もそのころ私より少なかったし子供なんて育てていけるような金銭的余裕はなかった。だから、そのころすでに営業でも成績優秀で、金銭的にも困らない和仁を選んだ……でも」

ずっと美紀の瞳に暗い影が落ちる。

「私の心は康一に残ったままだった。和仁は優しくかったけど、康一のあの冷たい瞳と、それに反する情熱が私を虜にしていた。だから、この子は絶対康一の子だって信じてた。そうじゃなかったら、きっと私は堕ろしていたわ」

ふふ、と声に出して笑う美紀の表情が恐ろしいものに見えて私は言葉を失っていた。

「和仁は戸惑ったみたいだけど、すぐに結婚を考えてくれた。そして、結婚して、浩介が生まれた。少ししてからね、友人に詳しい人がいるから浩介の親子鑑定をしてもらったのよ。そしたらね、私の思った通り、浩介は私と康一の子だった……！」

美紀は両手で自分の体を抱えるようにして微笑んだ。そして、

「大きくなっていくごとに、浩介は康一にどんどん似ていくの。自分で産んだ子だったけれど、怖いくらいだったわ……でも、私は浩介に康一を見ていた。和仁よりも、康一を愛しているように、浩介のことも愛していたの……」

私の脳裏に蘇る記憶。和仁との逢瀬に夢中で、忘却の彼方へと忘れ去られていたある夜の記憶が鮮やかに蘇った。

「ごめんなさい！俺は浩介じゃありません！コウイチです！ごめんなさい！」

全身を底うようにして叫ぶ浩介の姿。泣きじゃくった、いつもの浩介とは結びつかないその姿を、私は今の今まで忘れていた。

「美紀さん……浩介君は……？」

私のそれに、美紀の微笑みはずっと消えた。冷たい光が瞳に宿る。

「浩介くんはどこにいるの！」

「……二階よ」

嫌な予感がして、私はまだ一度も上がったことのなかった二階へ駆け上がった。スリッパが途中で脱げてしまったが、そんなことを気にしている余裕はなかった。手前から順番に部屋のドアを開けていく。浩介の部屋らしい子供部屋、客室、そして……

「浩介君！」

浩介は夫婦の寝室の、ベッドの上で半裸の状態でぐったりとしていた。うつ伏せの体勢なので顔

が見えない。慌てて駆け寄り抱きかかえてみると、その顔は何度も殴られたのか赤黒く腫れ上がっていた。それだけではない。上半身には火傷や何かで引っかかれたような傷、打たれたような痕がいくつもあった。引掛けているだけののような下着とズボンの下も、おそらく似たような傷があるのだろう。

「大丈夫？ 浩介君」

浩介はぐったりとしたままでそれには答えなかった。ただ、かろうじて息はできているらしく、時々喘ぐように唇を開けて胸を上下させていた。

「和仁についていくって、言い出したのよ」

いつの間にか、美紀が後ろに立っていて私は驚いて振り返った。逆光で表情は読み取れないが、声はひどく冷たかった。

「本当の親がやっと揃ったっていうのに、和仁とあなたの方がいいんですって」

「……浩介君が？ もしかして……」

くす、という笑い声。目の慣れてきた暗闇の中、美紀の口元が不気味に歪むのが見えた。

「洗いざらい教えてあげたわよ。お父さんはお隣の奥さんとエッチなことしてたのよ、って。それで子供ができちゃったから、お母さんとあなたを置いて出て行ったのよ、って。でも、浩介はお母さんのものだから大丈夫よね、本当の父親でもない男なんかいなくても、浩介は康一なんだから、康一と私の子なんだから……」

美紀の中で何かが混乱しているようだった。そして、私に語りかけるというよりは、ぐったりと私に体を預けている浩介に話しかけているようだった。

「理子さん」

突然名前を呼ばれ、全身が総毛立つ。

「私ね、妊娠したの」

頭上から、冷たい水が一気に降り注いだような気がした。一瞬、美紀の言葉が理解できなくて私の視界が白くなる。

「それは……康一、さんの？」

おそろおそろ尋ねると、美紀は小さく首をかしげて苦笑した。

「分からないの。和仁ともしていたし、康一ともしていたし、もしかしたら……」

美紀の指がゆっくりと宙を彷徨う。そしてその指は私を指差した。

「浩介の子、かもね」

その指は、私ではなく、私の腕の中にある、浩介を指差していた。

「み、美紀さん……あなた……」

私の動揺した声に、美紀は満足げだった。そして、その当たってほしくない推測のために、浩介のあの夜の言動に納得がいった。

「ごめんなさい！ 俺は浩介じゃありません！ コウイチです！ ごめんなさい！」

おそらく美紀は、私たちが越してくるずっと前から、浩介を康一と呼び、それに反発する浩介を虐待して、さらに性的虐待を加えていたのだ。

「だって仕方ないじゃない。康一を捨てたのは私だけど、この子は私と康一の子だもの。この子は康一なんだもの」

美紀が近づいてくる。手を伸ばし、浩介に触れようとする。私は咄嗟に浩介を庇って身を振った。それに、美紀の表情が変わった。

「あなたは私から康一を奪って！浩介まで奪おうなんて！ふざけないでよ！康一も、浩介も……私のものよ！返してよ！」

「康一さんは私なんてもう見てないわ！だから私に指一本触れようとしなかったもの！」

「うるさい！紙切れ一枚で彼を独占しようなんて……！」

「待って、美紀さん！私たちは離婚を……」

「康一を離しなさいよっ！それは私のものよっ！」

髪を掴まれて思わず顔が仰け反る。だが、浩介を離すわけには行かなかった。裂けるような痛みが走る頭を必死に戻しながら、浩介をずっと抱き続けた。頭を、顔を、腹部を、背中を、壮絶な痛みが走る。

「助けて……」

小さく叫んだのは私ではなく、私の腕の中で意識を取り戻した浩介だった。

気がつくと、目の前には真っ白な天井が広がっていた。自分の体が横になっていることを認識するまで、かなりの時間が掛かった。脳震盪か何かを起こしているのか、目の前がぐにやりぐにやりと変な歪み方をする。眩暈をこらえて体を起こそうとするが、そのとたん手足といわず全身に、今まで感じたことのない痛みを感じて思わず呻いていた。

「理子さんっ！」

右手に暖かい感触を感じ、首を動かすことができずに視線だけでそちらを見やると、自分のひじから上がベッドから生えているように見えた。その手には見たことのないくらい包帯が巻かれている。テレビで見たミイラみたいだ、と少しおかしくなった。そして、その手を握っていたのは、他でもない和仁だった。

「和仁、さん……」

喉が渇いていて言葉が絡みつく。それを察してか、和仁が急須のような水のみを口に入れてくれた。それを少し飲むと、やっと生きた心地が戻ってきた。

「ここは……どこ？」

「市立中央病院だよ」

「病院……？」

「隣の病室には浩介もいる」

浩介、という響きに、自分が何故病院にいるのか検討がついた。美紀に殴られながら意識を失い、それから一度も目覚めなかったのだろう。

「三日、意識がなかったんだ。もう、起きなかったらどうしようかと……」

和仁はそう言って私の手をまた握り、唇に押し当てた。暖かい和仁の温度が私の中に広がっていく。

「浩介くん……は？」

「意識はもう回復している。ただ、精神的なショックのほうが大きいらしい。そっちのリハビリのほうが大変だろうって話だ。俺も大体のことは……もう聞いているよ」

和仁はそう言ってからベッドに視線を落とした。私も、静かにあの日のことを思い出す。美紀に殴られながら、必死で守った浩介は、今回のことで一番の被害者だったのだ。今回だけではない。何年も前から、いや生まれたときからずっと。

「理子……」

和仁がまっすぐ私を見つめていた。

「助けてくれたの、和仁さんでしょう……？」

薄れ行く意識の中、浩介の「助けて」という悲痛な叫びと、和仁の怒号を聞いた気がしたのだ。まず真っ先に私の体を抱いてくれたのは、あの体温は、今手の平から感じている温もりだった気がした。

「君が、荷物をまとめたらすぐ来るといつていたのにこないから、様子を見に行っただ」

そこで、自分の家から妙な音がしているのに気が付き、玄関に私の靴があったのを見て慌てて物音のするほうへ行くと、美紀が意識を失い始めた私と、浩介を暴行しているのを見つけたのだと

、和仁は教えてくれた。

「ありがとう……」

痛む頬をゆっくりと持ち上げながら、私はできるだけ明るく笑顔を作ろうと努力した。だが、顔にも巻かれているらしい包帯が引っかかって、うまく笑うことができなかった。それでも和仁は私のそれに気がついて、とても悲しい目をしてから微笑み、

「これからは絶対に苦しめないから……だからずっと、一緒に、そばにいてくれ……」
と優しく私の体を包んでくれた。

美紀は、傷害致傷で逮捕された。

康一は、美紀を待つ、と言って離婚届にサインと判を押してくれた。浩介が自分の子供であるらしいことは、なんとなく察していたのだと言っていた。それは、美紀と連絡がつかなくなっていた頃、もう十二年前になるが、つてを使って聞いた話で、美紀が妊娠し、結婚したということを知ったときから、自分が二股をかけられていたらしいこと、その子供がもしかしたら自分の子であるかもしれないことは予想していたのだそうだ。

そして、和仁と私は数ヶ月の同棲のあと、再婚した。

「ただいま！」

そんな声がして私は玄関へ出た。制服に身を包んだ浩介が、スニーカーを脱ぎ散らかしているところだった。

「ああ、もう！ちゃんと靴をそろえなさい！」

「はい」

渋々浩介がスニーカーを揃えて洗面所へと入る。

「そこにクッキーが出てるから食べていいわよ」

手を洗ってリビングに入った浩介にそう言うと、彼はすでにそのクッキーをかじってテレビのスイッチを入れていた。音量をすぐに絞る。

「ワコ、寝てるんでしょ？」

「うん、ありがとう」

浩介はあの一件以来、しばらく心を閉ざしたままだった。だが、閉ざす原因となった美紀がいなくなったことや、和仁と私の再婚後に引き取ったこと、そして何よりあのとき奇跡的に助かった私の中の子供が生まれ、歳は離れているが妹ができたことで浩介は徐々に精神的な部分を克服していった。

あれから二年の時が過ぎていた。浩介は十四歳、四月がくれば中学三年生になる。生まれた娘、和子も一歳五ヶ月を迎えていた。

「ワコー」

クッキーを何枚か食べ終えた浩介が、和子の名前を呼びながら寝室へ消える。夕飯の支度をしていたので手を止めずにいたが、浩介の「お前はかわいいなあ」という声が聞こえて私は微笑んでいた。

望んでいた幸せだった。一番愛する和仁と、浩介と、和仁との間にできた、念願の娘の和子。今はマンション暮らしだが、十分満足していた。和仁は浩介を引き取っても、和子が生まれても、私を妻とし、母とし、そして女性として愛してくれている。

ただ、私の中に、あの一件以来、暗い影が残るのは事実だった。

七時半ごろ、和仁が帰宅したので全員で夕飯になった。私と再婚してから、和仁はなるべく残業にならないよう帰宅してくれるようになった。会社では、あの原さんが子供の写真を持ち歩いている、と噂になったらしい。ただそれは事実で、和仁の定期入れには私と浩介、和子が三人で写った写真がいつも入っていた。和子が生まれたばかりの病室で和仁が撮ってくれたものだ。それを同期の社員数名に見せたことが噂の発端らしかった。時折その社員たちを呼んで家で食事をしたりすると、

「原さんって、本当に奥さんと子供に弱いですね。家と会社じゃ顔が全く違いますよ」とからかわれている。

「浩介、お前進路そろそろ進路決めたのか」

食事をし始めると、最近は決まって和仁が浩介にそう尋ねる。

「耳たこ。でも、工業高校に行こうかと思って。今日どうせ聞かれると思ったからさ」

「工業かあ……工業ねえ…」

和仁は納得いかないらしく、食事をする手を止めて腕を組んだ。

「なんだよ」

「この地区の工業高校は競争率が激しいんだぞ。倍率知ってるのか？」

「和仁さん、それは大丈夫よ。浩介の成績、知ってる？」

「知ってはいるよ。でもなあ……」

「大丈夫。学校の先生も、推薦枠で入ったって大丈夫って言ってくれたから」

浩介はその話をすでに予想していたらしく、にやりと笑ってピースサインを出して見せた。

「浩介がちゃんと考えたんだったら大丈夫よ。頑張って」

「ありがとう、お母さん」

浩介の笑顔が輝いて、私も嬉しかった。

その夜、私は寝付くことができずにリビングで過ごしていた。この時期になると、どうしてもあのことが思い出されて寝付けない日が続く。耳の奥に、美紀の言葉がまるでついさっきのように思い出される。

「この子は私と康一の子だもの。この子は康一なんだもの」

私はいつの間にか浩介の部屋の前に来ていた。そっとドアを開け、眠る浩介の姿を遠めに見つめる。この子は、私と和仁が傷つく前から、すでに康一と美紀の子として生を受けていたのだ。最近の浩介は、あの冷たい瞳や言動はほとんど見せない。血のつながりが全くない私たちに、本当の親のように接してくれる。それは私たちの心の支えが浩介に届いたからだ、と、リハビリの医師は言っていた。

だが、時折ふと見え隠れする康一の面影が、私に嫌な想いを抱かせる。

部屋に入り、ベッドのそばまで行くと、寝息を立てる浩介の項が布団から見えていた。浩介は、本当のことを知っている。知っている上で、私を「お母さん」と呼ぶ。私は母親でもなんでもないのに。本当の母親の昔愛した男、本当の父親を、奪って、義理の父親さえも奪って、私は今、母親という場所に立っている。一番、愛される形で。無限の後悔。これは、自分が幸せになっていいのかという疑問が根源の葛藤。そして、生まれてきたことが罪であったこの子の……。

私の両手が、浩介の項のすぐ側まで伸びていた。甘美な果実に手を伸ばしかけ、はっとして私はその両手で自分の両腕を抱えた。

浩介が寝返りを打つ。眉間に皺を寄せ、小さく唸る。その寝顔が康一のもものと重なる。そして、美紀の言葉が蘇る。

大きくなっていくごとに、浩介は康一にどんどん似ていくの」

その言葉どおり、一年一年、歳を重ねるごとに浩介は康一に似ていく。日に日に増していく、私の黒い想い。

あの二人のせいで、私たちはこんな想いを。

あの二人の子のせいで、私たちはこんな想いを。

それは、楽園でイヴに禁断の果実を食べさせようと誘う蛇のようだ。ゆっくりと首をもたげて、この子さえいなくなれば、私の罪の意識は消えるのだと、幸せに生きても罪の意識など感じる事などないのだと、そう囁く。

「理子」

突然名前を呼ばれて、驚いて振り返ると和仁が立っていた。

「和仁さん……」

「疲れているんだよ、きっと。おいで」

和仁に伴われて寝室へ戻る。こんな夜は、和仁は必ず一緒にベッドで眠ってくれた。すっぽりと和仁の体温に包まれて、ようやく落ち着きを取り戻す。

「私ね、妊娠したの」

睡魔に襲われながら、朧になっていく私の意識の中で美紀が囁いた。彼女は一体、誰の子を産んだのだろうか。彼女の子が一体どうなったのか、私は知らない。

その子もきっと蛇なのだろうと、思ったところで意識は途絶えた。